



江戸名所圖會

六



本牧

十二天宮 本牧の場はあり真言宗多聞院別當奉祀

奈川の墓より眺望せし所の絶壁ハまをり此社の右に

裏手ハ聳立せし所の巨巖こそなりと巖頭数株の松梅

鬱蒼とせし栄茂せしと 本牧の地ハ川田原北条家の分限帳に左傍に

吾妻明神社同所六町斗南の方原宿といふあり相傳ふ

天和年間此地の獵人吉太夫といふもの此海上に網を投

し当社に神跡を得しと 此像ハ髪髻と云 依り小祠を

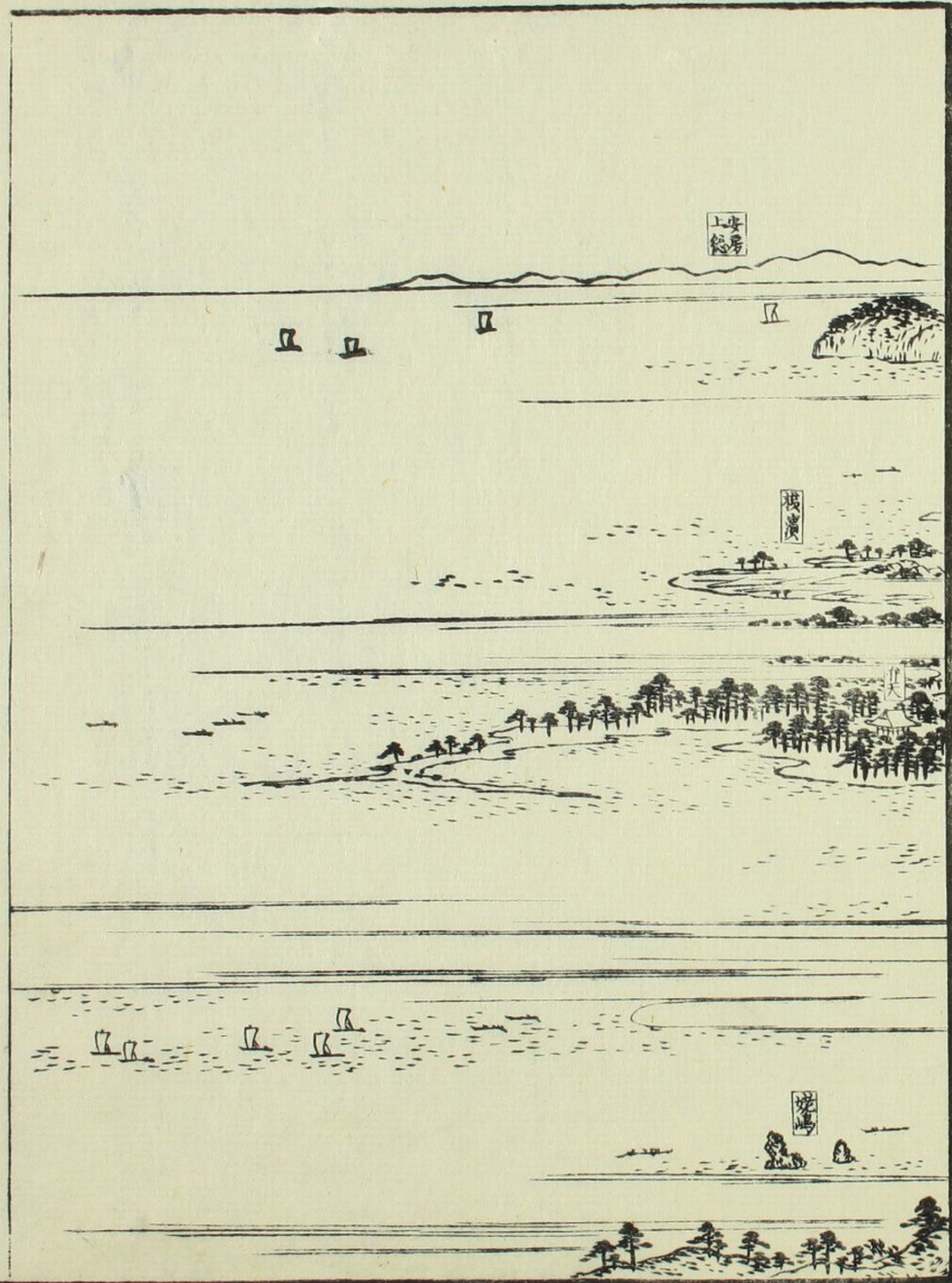
營建せしと云此神跡ハもと南總亦更津吾妻明神の神

像ハ浪に漂ひ此地に止るをいふ祭神ハ人皇十一代

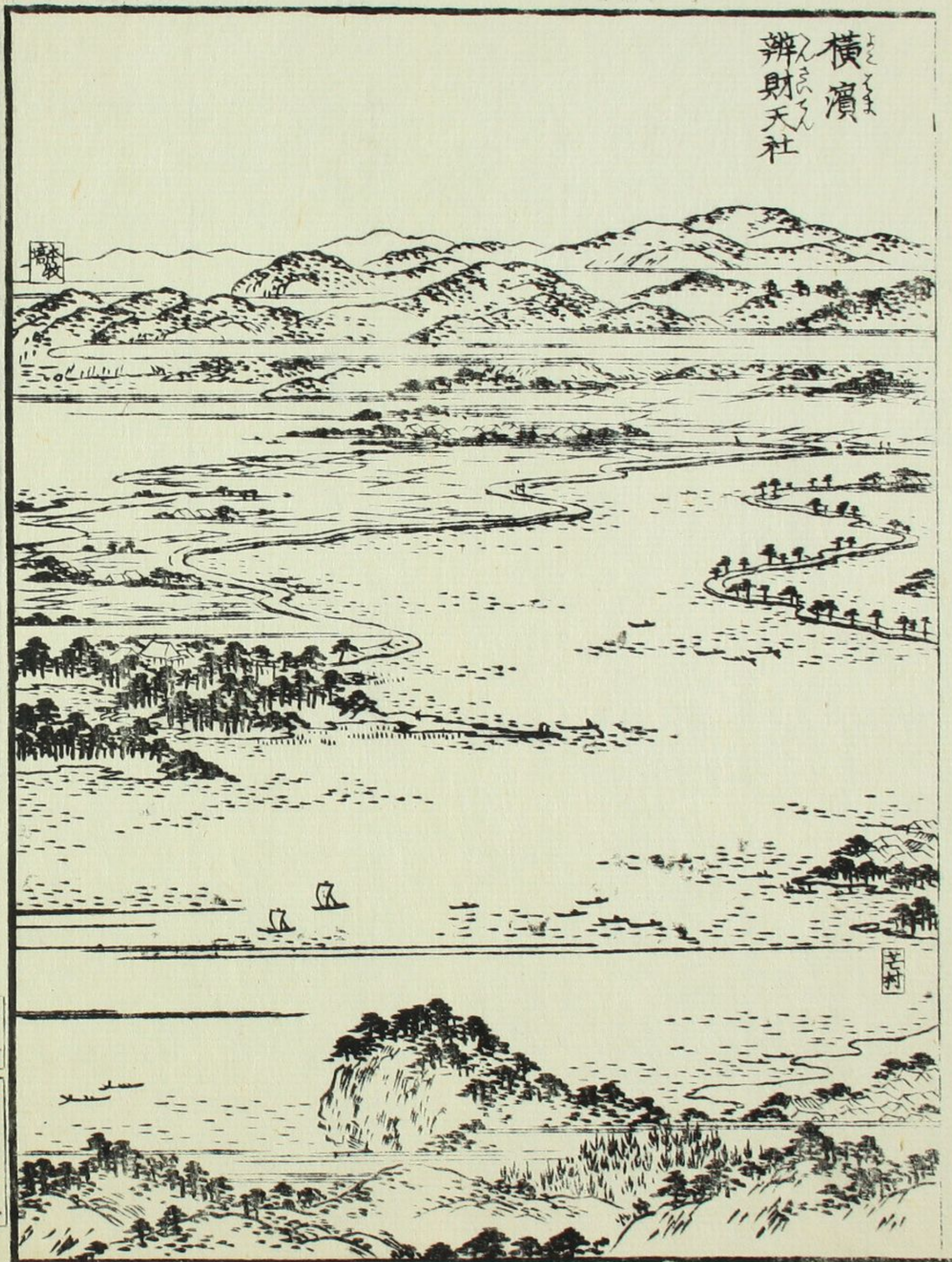
垂仁天皇の皇子日本武尊初の御名を以小碓命と奉る

武藏相模の際と尊の東征御經過の地とを以て所々

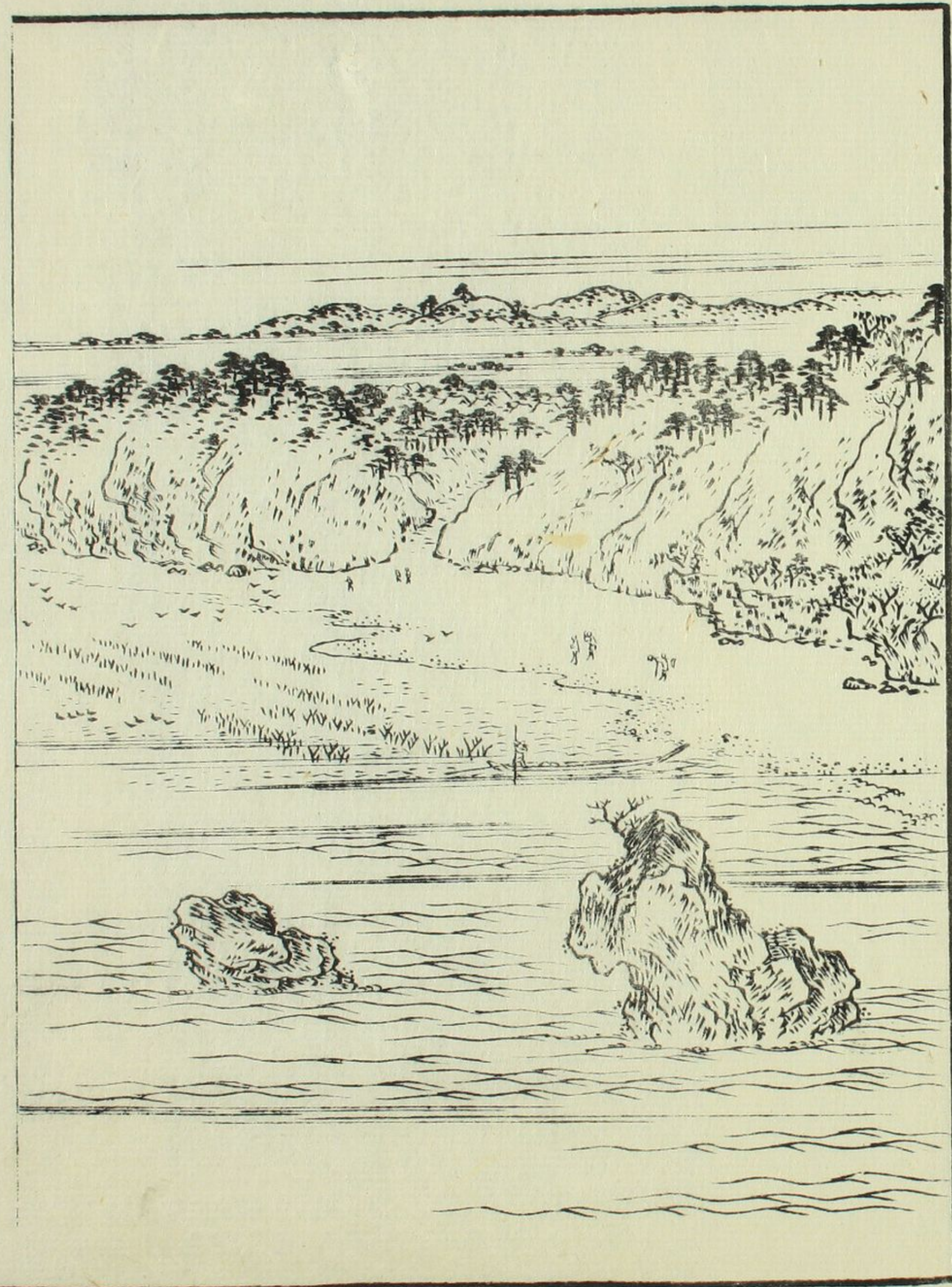
あり



横濱
辨財天社

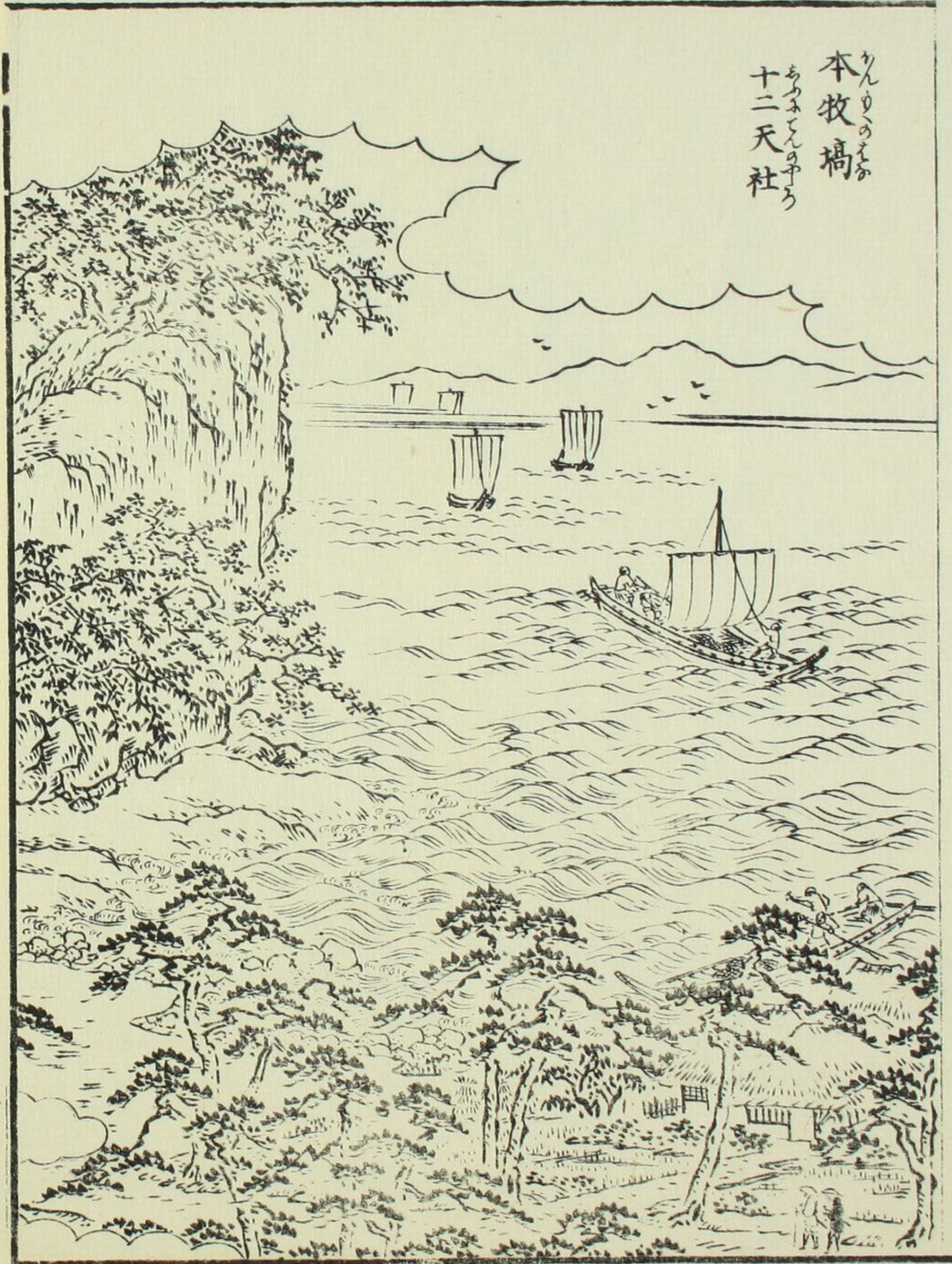


六冊二ノ百二十九



芒村
 姥島
 此地ありし
 海苔を産
 きのり
 呂川増
 らすと云





くろのま
本牧橋
あふてんやう
十二天社





本牧の地ハ
 神志川澤の
 南に續きて
 海上に鋭き
 一方の系地ハ
 して勝區派
 操る人あり
 乃とあふ取と
 せんより按むふ
 本牧の名り六
 昔時牧馬の地
 なるゆゑふの終
 阿るりの紀今ハ
 海利魚鹽の淵と
 可り漁人の家多く
 小魚とて東海の
 澤路まび東都ガ
 市 輸り
 驚ぐらるる

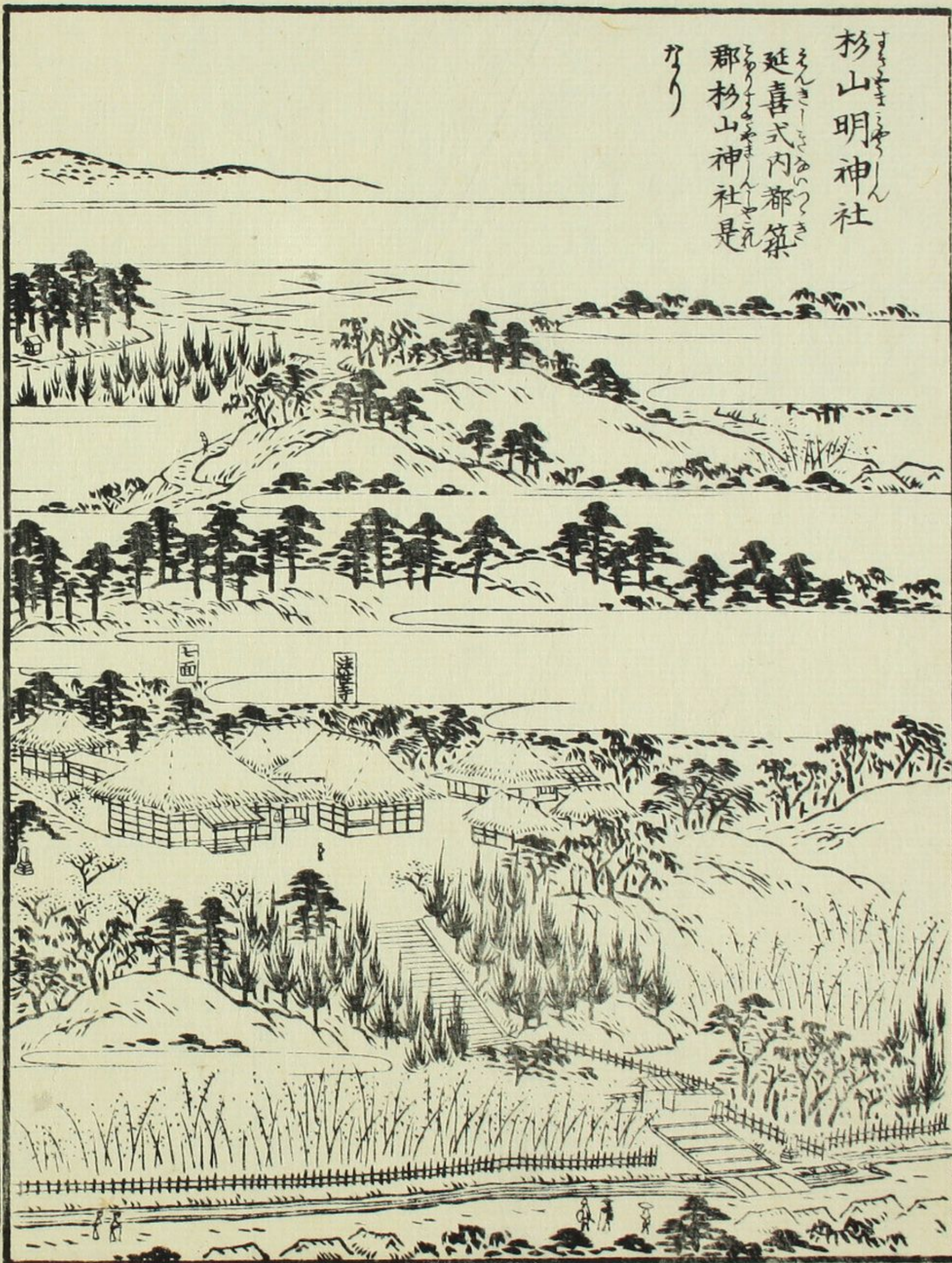
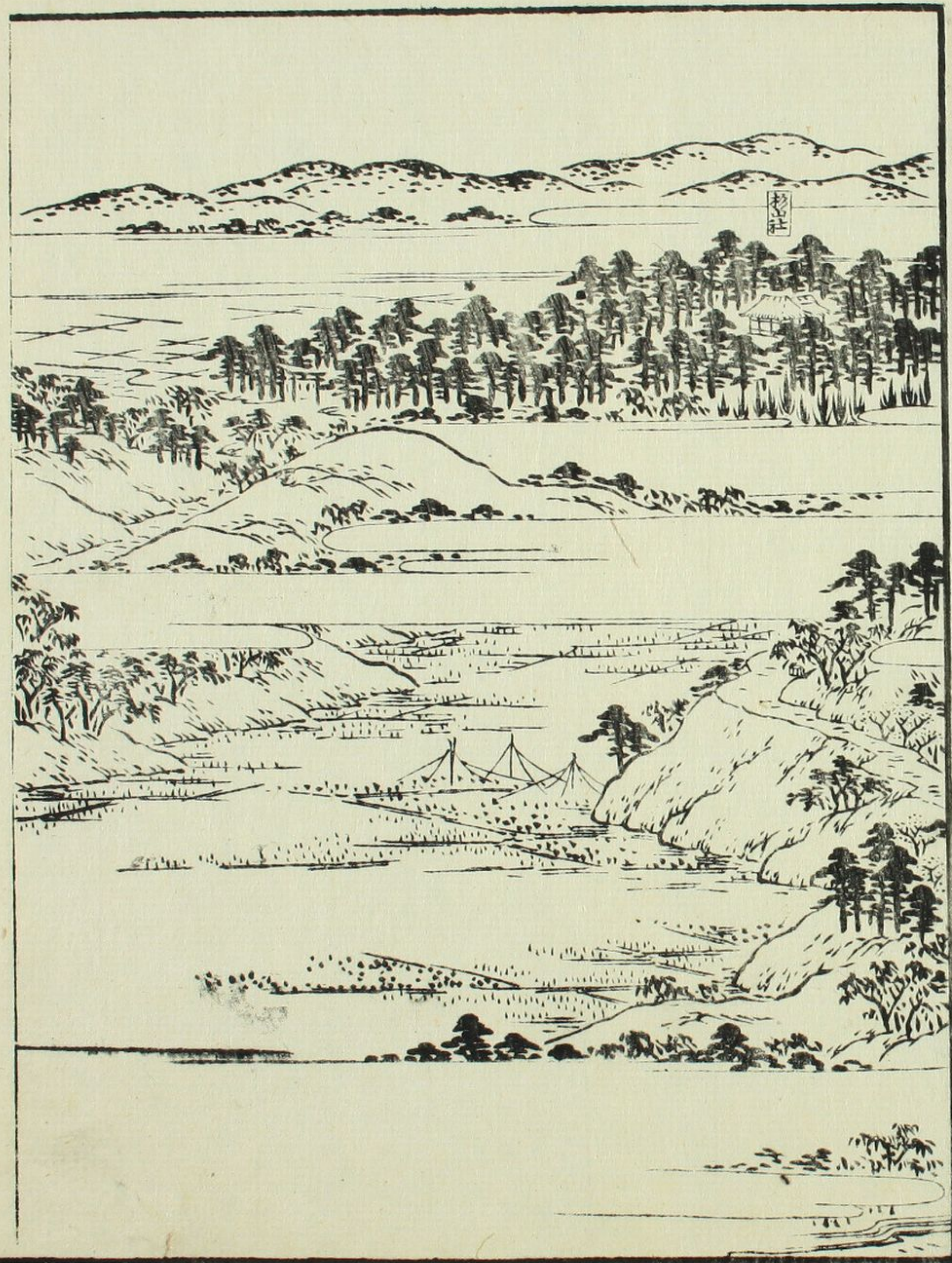
新製
 里乃
 奉祀
 鎮護國家の盛功末

奉祀して千歳御神威を仰き奉るも鎮護國家の盛功末
 代よ及りぬ人の故あるへ
 詳なる事ハ本所吾孺森の
 下よ出るゆゑ多に器せり

杉山神社新町より八町あり北の方下星川村より延喜
 式内の神社中々靈蹤尤揭然たり今ハ日蓮宗法性寺と
 いへり兼帯奉祀して釋迦如来と本地佛とを例祭ハ
 毎年六月十四日は修行也

延喜式神名帳曰 都築郡一座小
 續 杉山神社
 日本後紀第七曰
 兼和五年二月庚戌武藏國都築郡粉山神社預之
 同 官帶以靈驗
 書曰 五年五月庚辰奉授武藏國无位杉山名神從
 五位下
 按小判本の續日本後紀小粉山は作らるる誤なり

惟子里芝生の南に並み往古ハ宿驛の名なりし今ハ程ヶ谷
 驛に加へりし小地名とあり
 此所を下惟子と名け岩間
 神戶の南にあるを上惟子と



杉山明神社
 延喜式内都築
 郡杉山神社是
 なり

新入覽永五年齊藤德社の園東下向記に所の人小此里の君のつれと尋ねて海辺にありあり浦のありありなるをかく名解とて尋ねしり記せり

平安紀行 かきつくと若つくと所あり 持資

日ゆりまをかくてゆりまを旅人の汗ふあふかく所の里 道奥 准后

鎌倉記行 此の里のまをりたふつてゆりまを 道奥 准后

地白ありまのたつたむきまをきまをいかにむの里 澤庵

帷子川 下帷子の南新町驛舎の入口と流る 川幅十五間 此流

小架を枝橋と帷子橋と号く此川ハ同國都築郡白根の辺よりゆき此地小至り下流ハ久良岐郡戸部村故経る

海小會を

程ヶ谷新町 東海道官驛の一なりと 帷子町上下岩間町上下神戸町上下岩間の地を合せし驛とせり

或ハ慶長或ハ慶安二年又ハ治年間ともその説一がくすは余家の分限帳に三郎とま人の所領小地を谷とあり此地を背ハ小初ハ馬一とありし神奈川より此地迄行程二里九町あり驛亭軒と連絡

昌の地より

神戸川 神戸と上帷子との間の小川あり長二間あり此板

橋を架ししを 神戸橋と号く主人ハ水源ハ田間の水落集りて流

まをなす新町より右の裏と流ま此地小至り末ハ神戸岩

間の左の裏を回り帷子川入 大神宮 神戸の地小あり街道の右側ハ鳥居を建侍大門

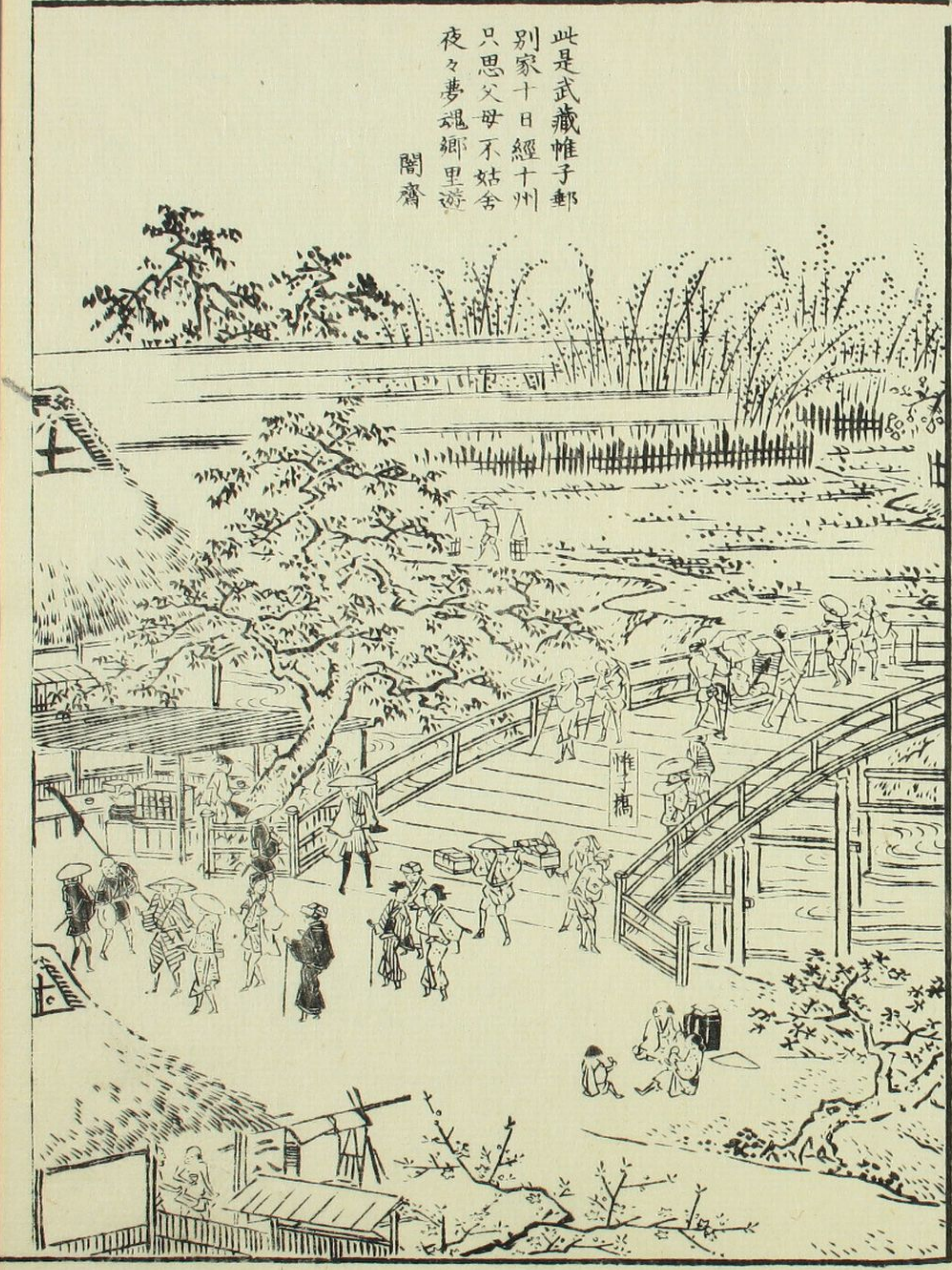
三丁あまりと入る社ありと神主岡田氏奉祀を祭礼ハ六月

九月西月の十六日中より九月を大祭の辰とを相傳ふ往古

當社の御神武州御厨庄榛谷峯ハ影向なりあひしと後世川井二股川程ヶ谷宮林同所八坂等の地へ遷し

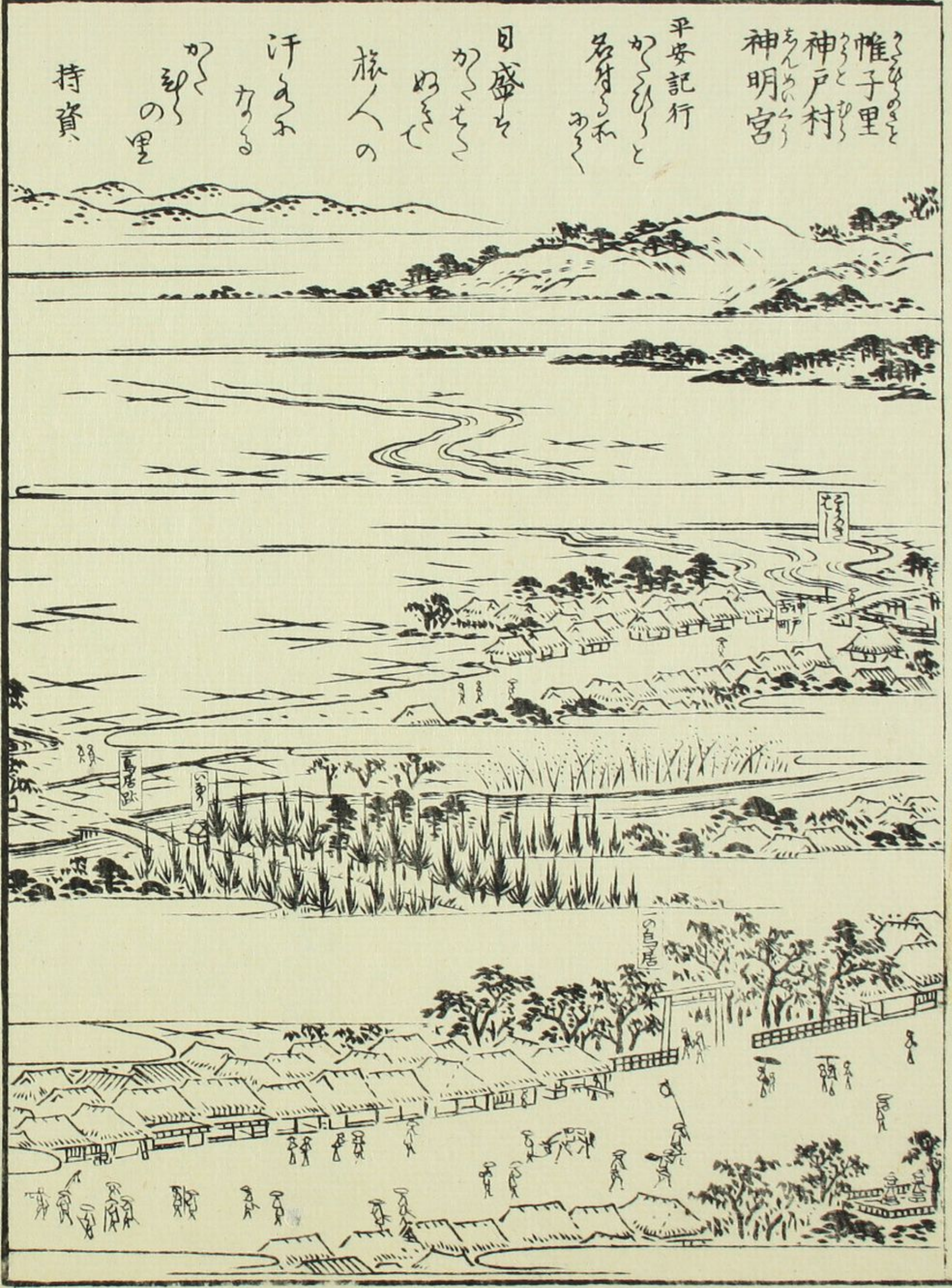
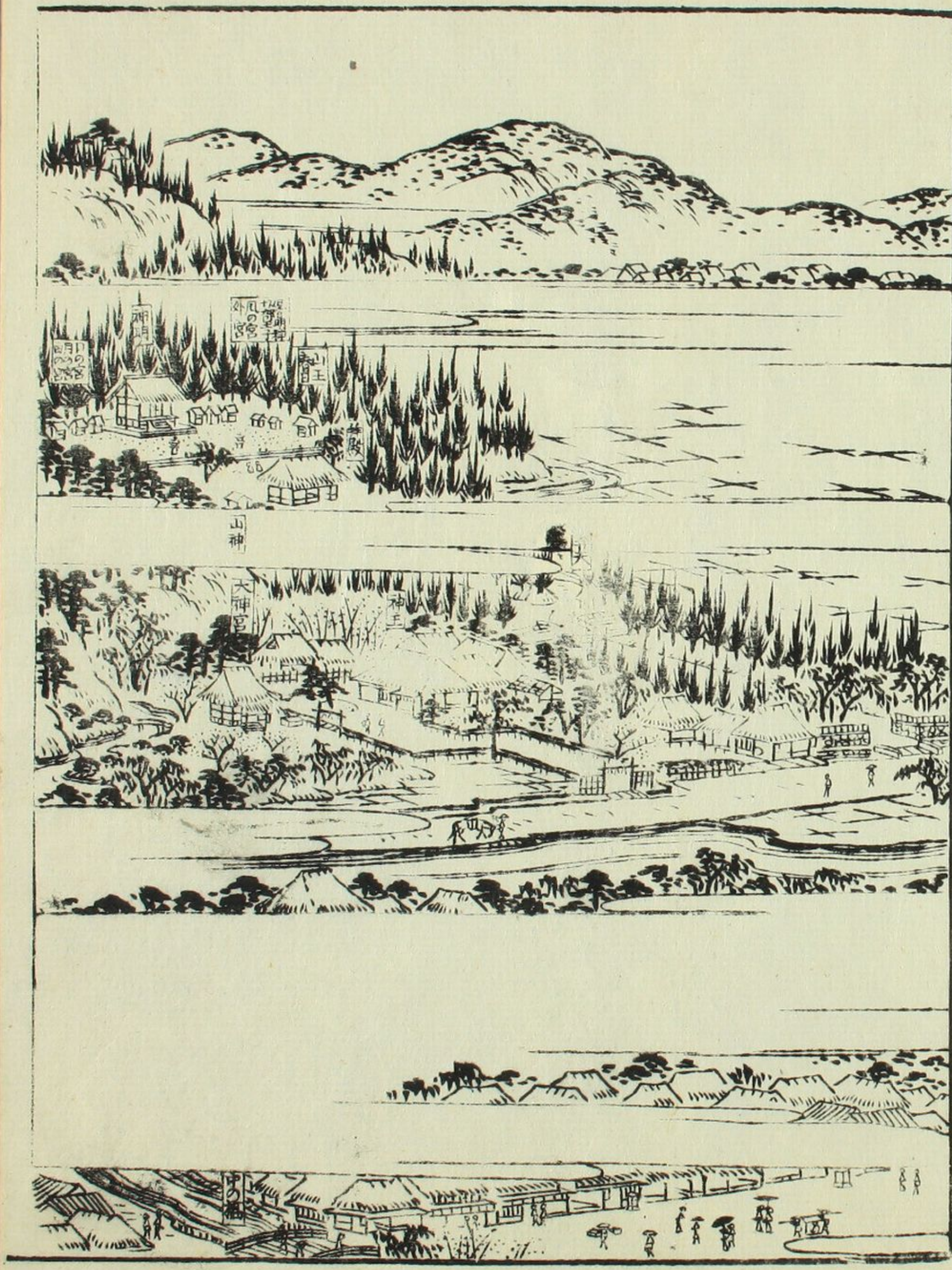
まゆりせりし神託あるを以終り嘉祿二年九月十六日

此是武藏帷子郵
 別家十日經十州
 只思父母不姑舍
 夜々夢魂鄉里邊
 閻齋



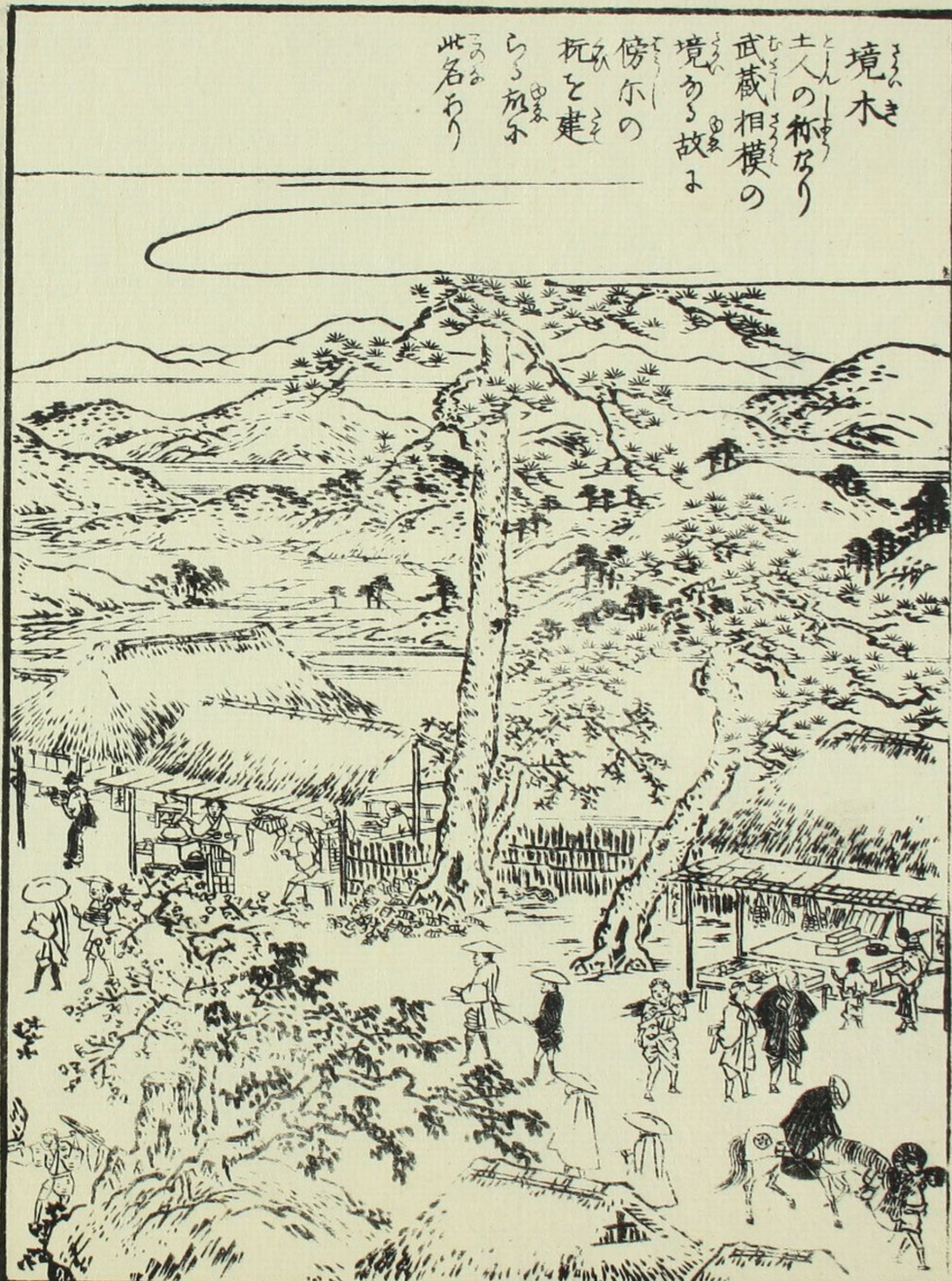
帷子川



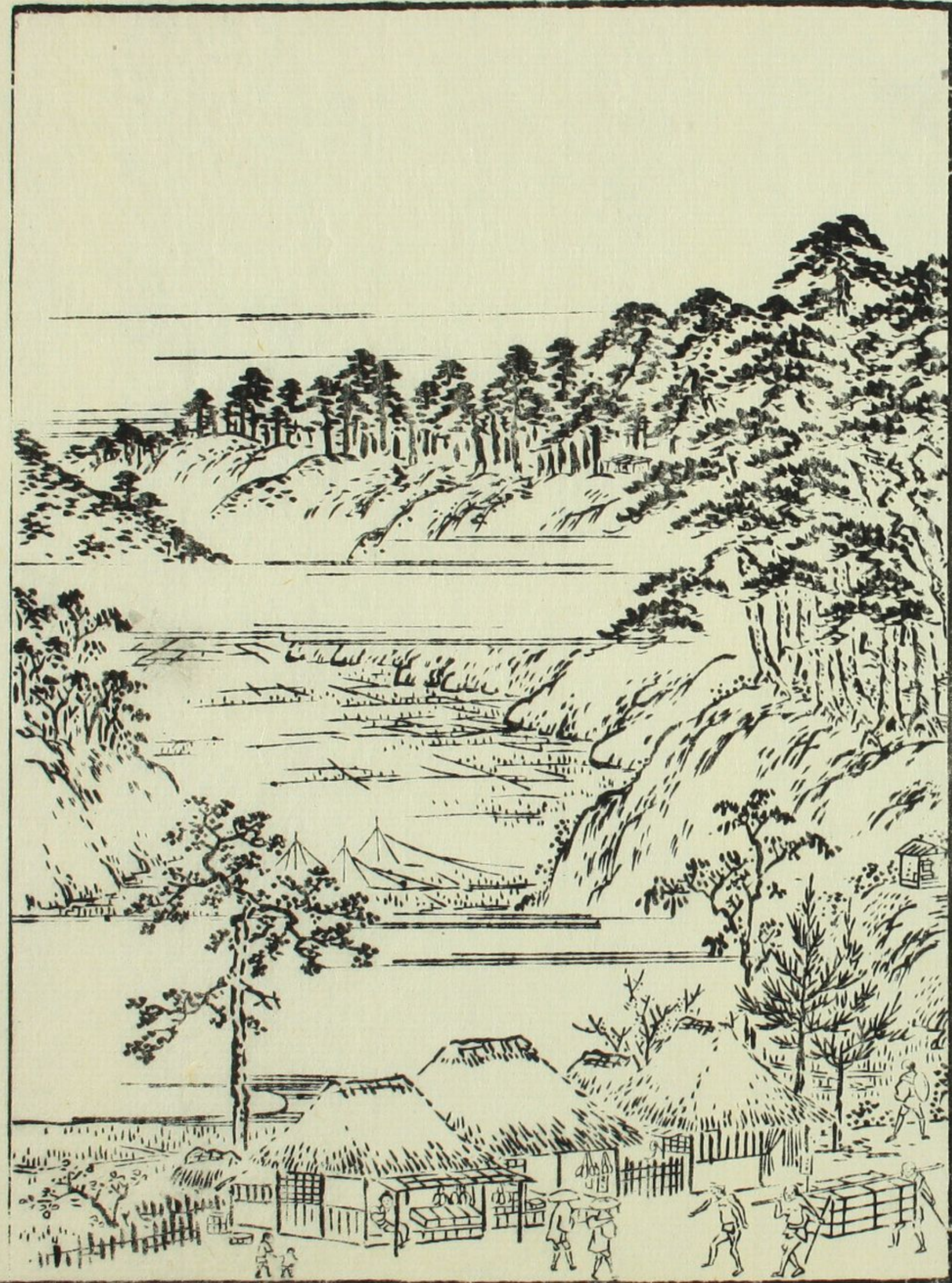


平安記行
 名付る不
 日盛々
 旅人の
 汗まみ
 かの
 里
 持資

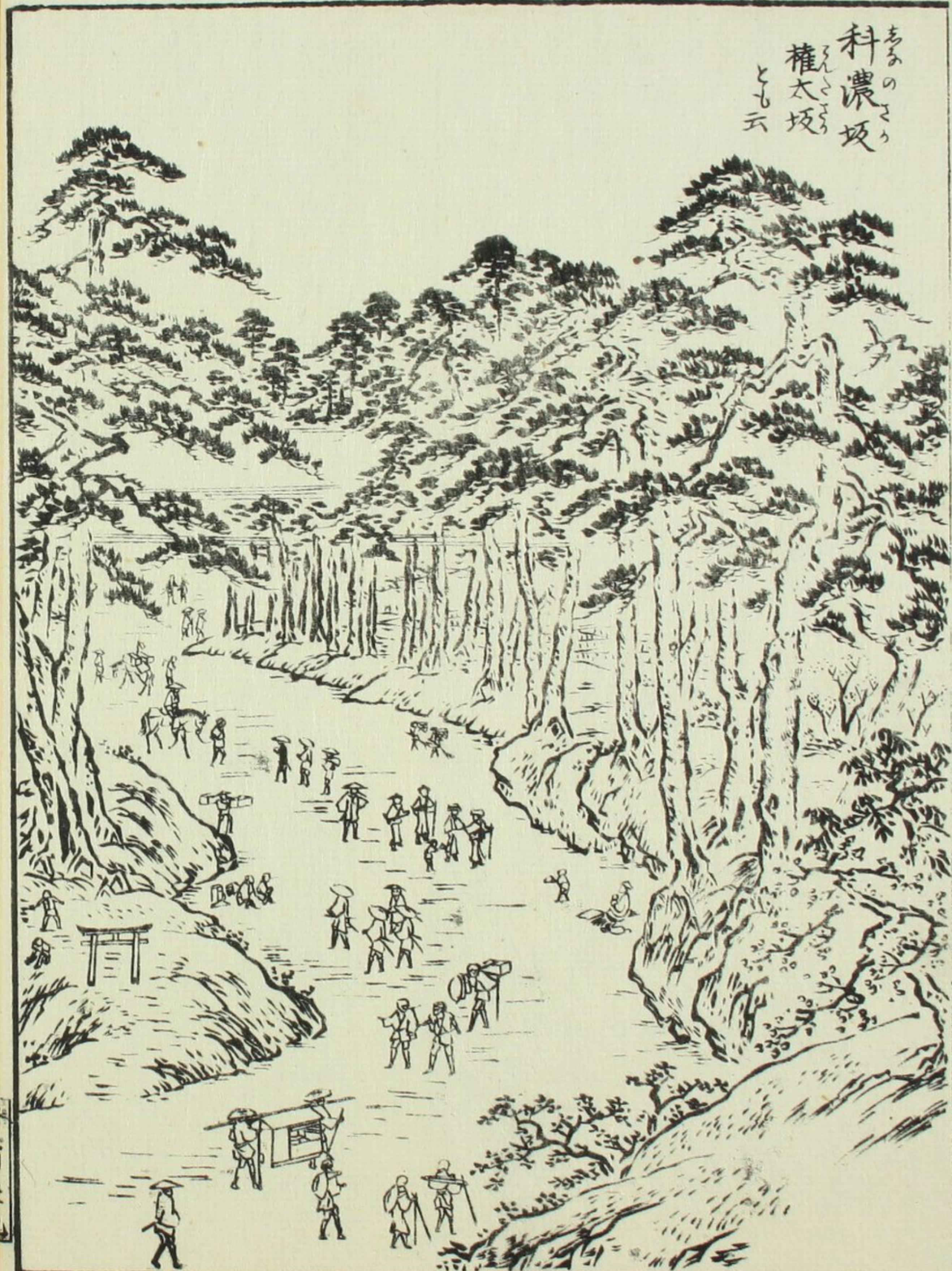
惟子里
 神戶村
 神明宮



境木
 土人の村なり
 武蔵相模の
 境あり故よ
 傍尔の
 杭を建
 らる故よ
 此名あり



科濃坂
権太坂
とも云



此山上は迂一なり又元和二年三月三日今のゆく平地へ

宮居と造立もと云見目河神田春日天神河宮の地なり

古町街道 芝生の追分より下帷子の右の裏通りを程ヶ谷の

元町へゆく通路中へ行程十八町あり則古の街道

なり万治二年武蔵長門今のゆく通路を改られしより裏

通りを古町街道と称し今の驛舎と新町とを名一なり

帷子橋造替の路此古町 御道と往還の通路とせ

界木 立場ゆり道より右は武蔵相模の國界の傍尔城

建よりある此称あり此地牡丹餅を名産とせ是を製する店

品野坂或ハ信濃又 谷小権太坂と云此地ハ武相の國界なり

坂路の両傍ゆを蒼松の老樹左右は森列と坂上ゆく

右と望りハ芙蓉の白拳玉をけりゆく左を顧むる

鎌倉の遠山翠黛濃ゆく実此地の风光まことに一奇観

と称すし春日山日記は謙信鎌倉鶴岡社恭乃節

江田稲毛小机小杉権現山品野坂杯云海道筋なり

この岩を討敗りあり此地ゆ中世小墨ゆり

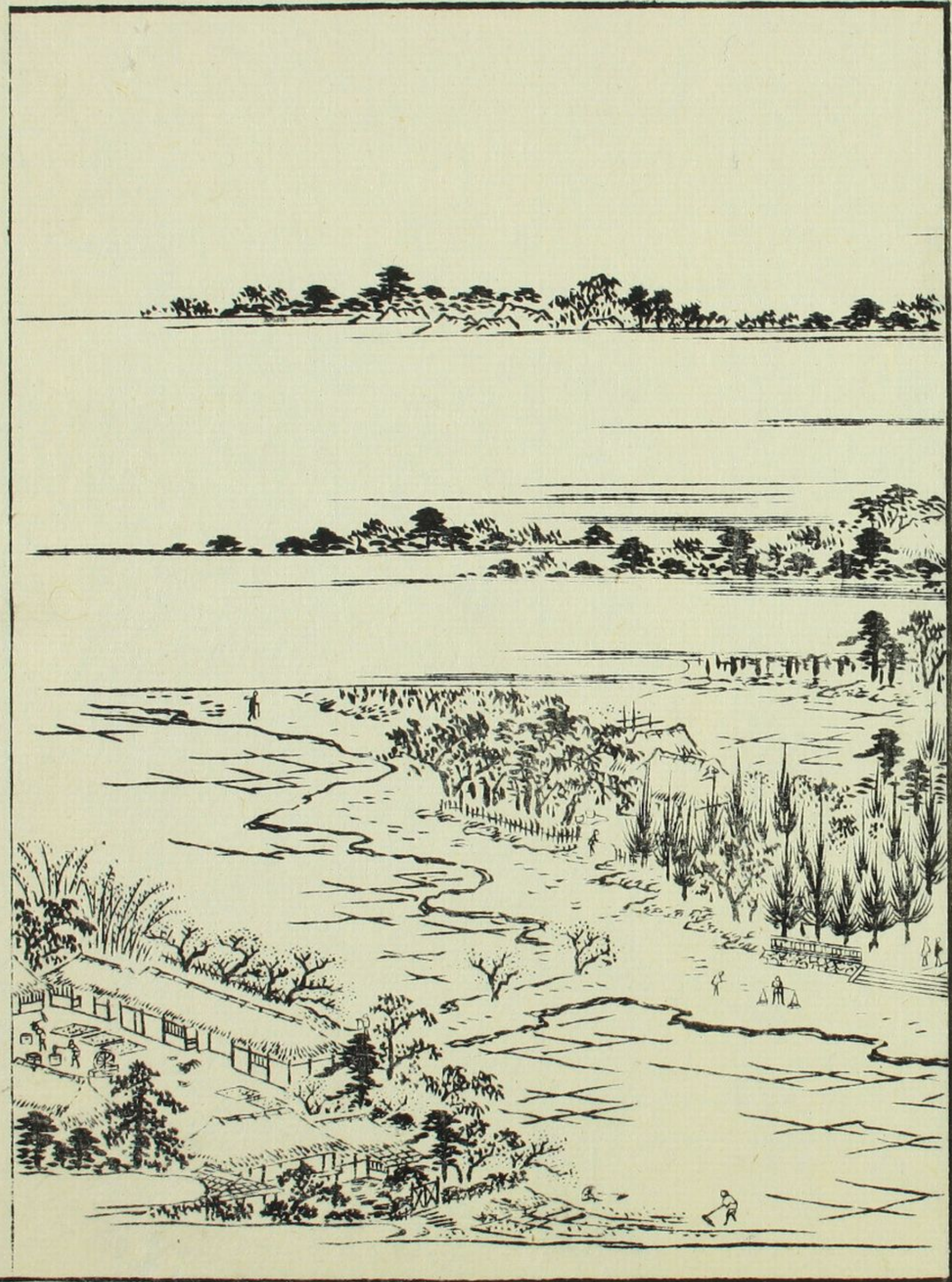
蔭田城跡 新町より金澤通道蔭田村の内蔭田橋と

ゆり東南の方五町計を隔て道より左あり土人ハ

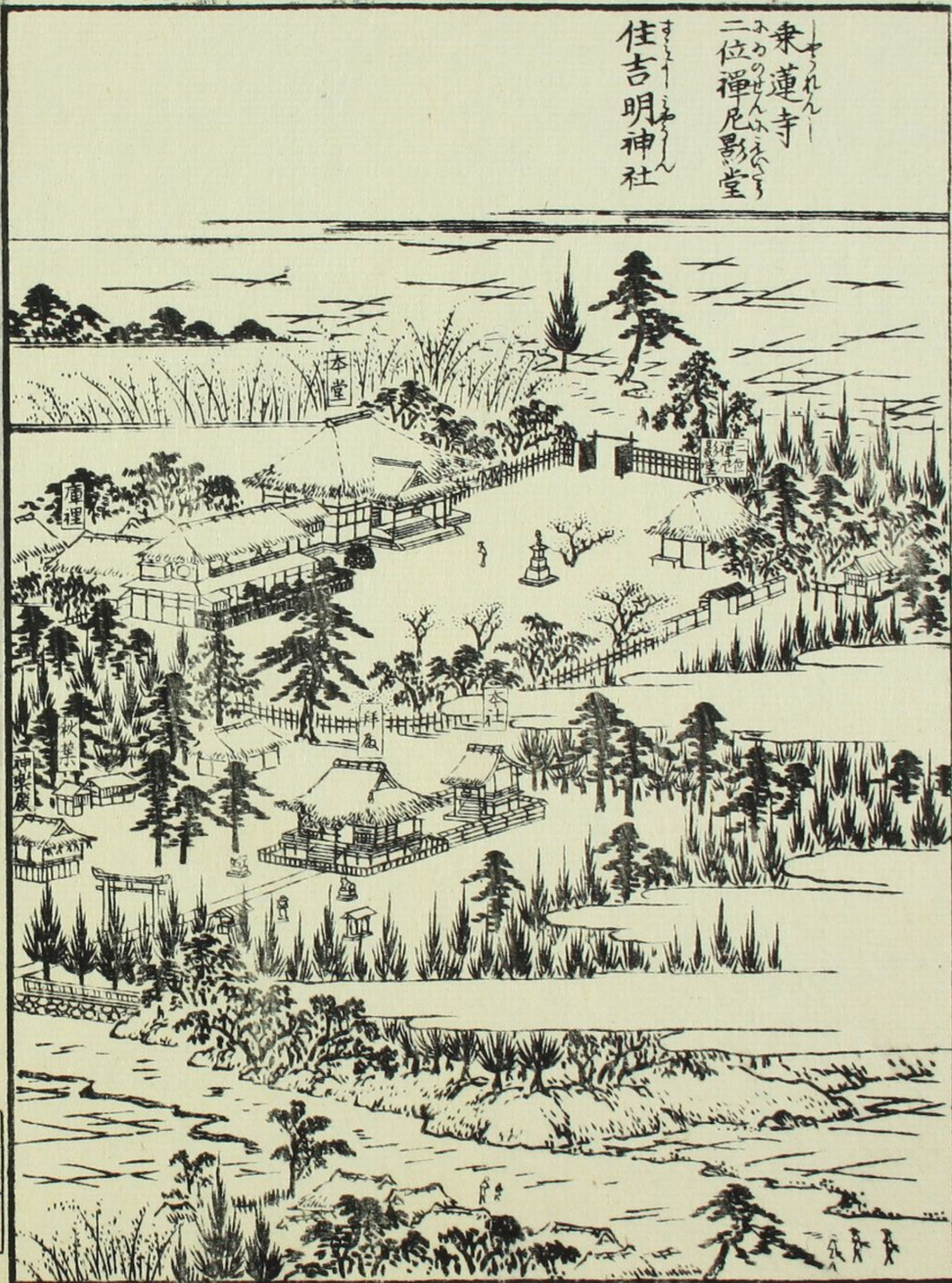
城山と号く封域東南ハ一町半計南北ハ二町餘あり

小山なり郡ハ往古吉良左兵衛佐義門此地に住す

と云小田原記永禄十年武田信玄小田原と藤人とを条下ハ王子藤へ信玄
神大寺と山と筋違より其項大橋北見加賀守藤頼杯相
左兵衛佐住なり左兵衛佐其項大橋北見加賀守藤頼杯相
具しく小田原あり此吉良ハ北条氏康の妹北見加賀守藤頼杯相
人敷もあり此吉良ハ北条氏康の妹北見加賀守藤頼杯相
此建女の宅と焼せり多目周防守とみ者其項青木と妻女ハ藤田あり折節
探云同心とを連れて蔭田と守護しそ軽部豊前守泰則より一蔭田



乗蓮寺
二位禪尼影堂
住吉明神社



青木明神社



ありてハ谷吉良のやまきの前ある山ふのりて鑿炮とちうけけられハ敵と
米らしとある

二位 禪尼影堂 井戸ヶ谷村乗蓮寺と云 西光山と号し古義真言
宗石川室生寺に属す

二年 米草とありと云 真言宗の境内佛殿の側あり相傳ハ此
地ハ禪尼分領の地也

等身あり四十計の殿やと建く乗蓮寺と号せし其後度ハ
右の念珠と持し

兵乱の為ニ破壊せしと秀善法印勧進の功を慕り寛永
十年癸酉影堂と再興せしもの

書し 歴あり二位尼 其文左
平政子の牌ありとの

の銘ニ詳なる

梁 牌銘曰

二 位 尼 者 北 條 四 郎 時 政 卿 息 女 則 右 大 將 家 北 方

頼 家 實 朝 而 公 為 慈 母 賴 朝 公 逝 去 後 經 二 十 六 年

嘉 祿 元 乙 酉 年 七 月 十 三 日 卒 法 名 如 實 世 人 号 尼

將 軍 是 也 井 土 谷 卿 依 為 亂 破 滅 今 秀 善 法 印 廢 堂 号

■ 梁 牌銘曰 二 位 尼 者 北 條 四 郎 時 政 卿 息 女 則 右 大 將 家 北 方

辨 依 造 立 鎌 倉 二 位 尼 御 影 堂 一 宇 國 土 安 全 求 願 成

寛永十癸酉年三月十一日

大檀那間宮産次郎忠次
別當 衆蓮寺 秀登

東鑑脱漏曰嘉祿元年乙酉七月十一日庚午丑刻
二位家亮御六十歲是前右大將軍之後室二代
將軍母儀也前漢之呂后而令執行天下給若又
神功皇后令再生令擁護我國皇基給敷云云
濟之云云
按當寺梁札の銘は二位禪尼逝去の日と嘉祿元年七月十三日とを
東鑑脱漏七月十一日とを以て證とすべし

瑞應山弘明寺金澤通達より十四丁游右の方へ入る弘明

寺村あり坂東順礼札所の第十四番目なり當寺は

弘法大師開創の佛刹なり中興は光慧阿闍梨と号

古義真言宗石川室生寺に属せり毎年七月十日十二月

十八日市立く大賑はす

東鑑曰治養五年正月廿三日於武蔵國長尾寺

并求明寺等者以僧長梁可致沙汰之旨被定下是

源家累代祈願所也云云

本堂本尊十一面觀世音菩薩
佛龕背面銘曰中興光慧阿闍梨注

荒木作表本有横削横度十方立像堅救三世長六
尺約六丈十一面頭果地各行基示深旨也

天満宮
本堂の内右の股檀あり昔浪華の旅客其菅神の像一軀を

携へ來りて置くと傳ひて我有家の價と求むるに云云
此神像を置くと傳ひて我有家の價と求むるに云云
神と非を和乎のふあはる大感應を以て因る神恩を謝す

額 瑞應山弘明寺

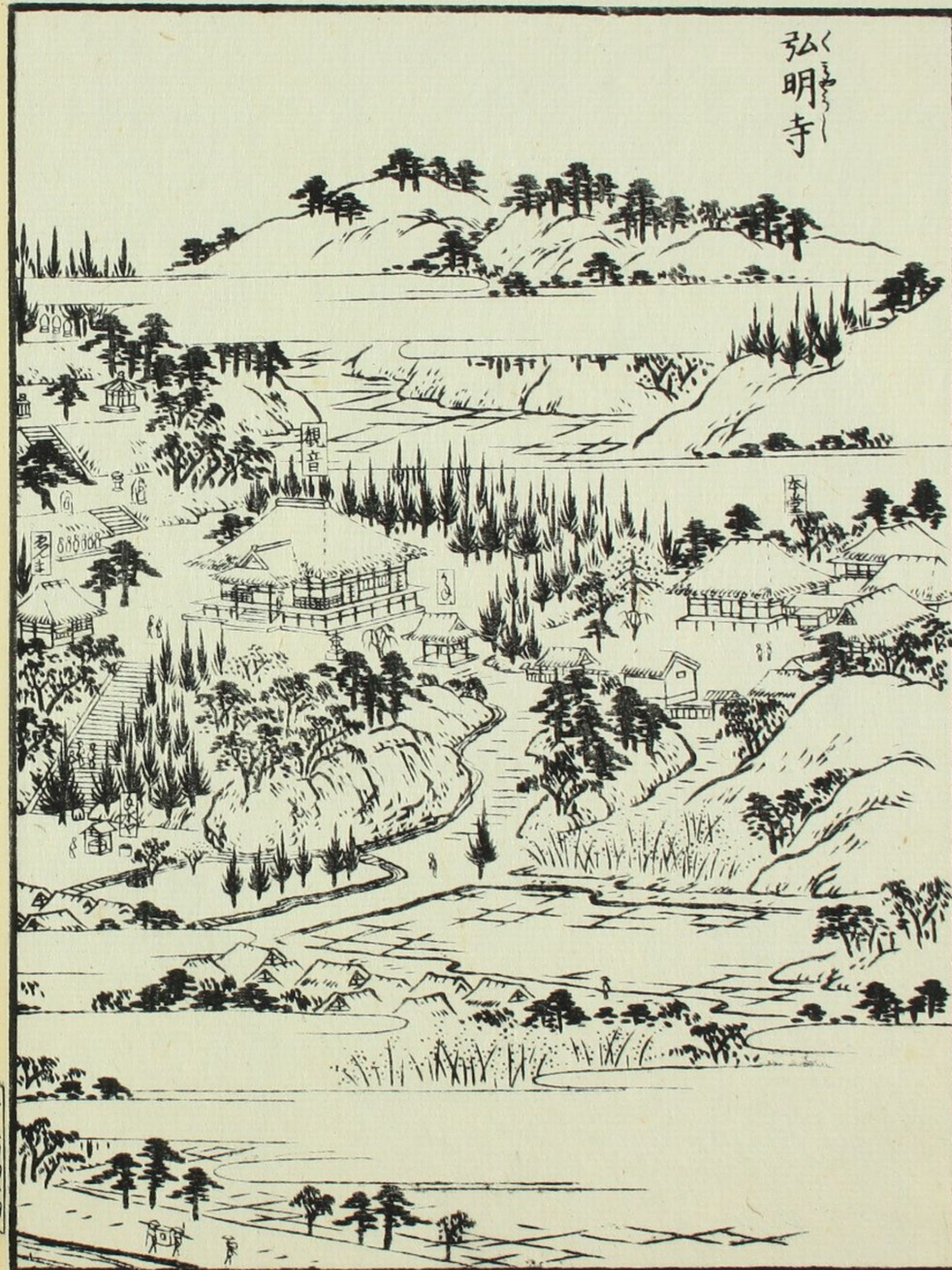
本堂の向拜と掲る

大角信勝筆

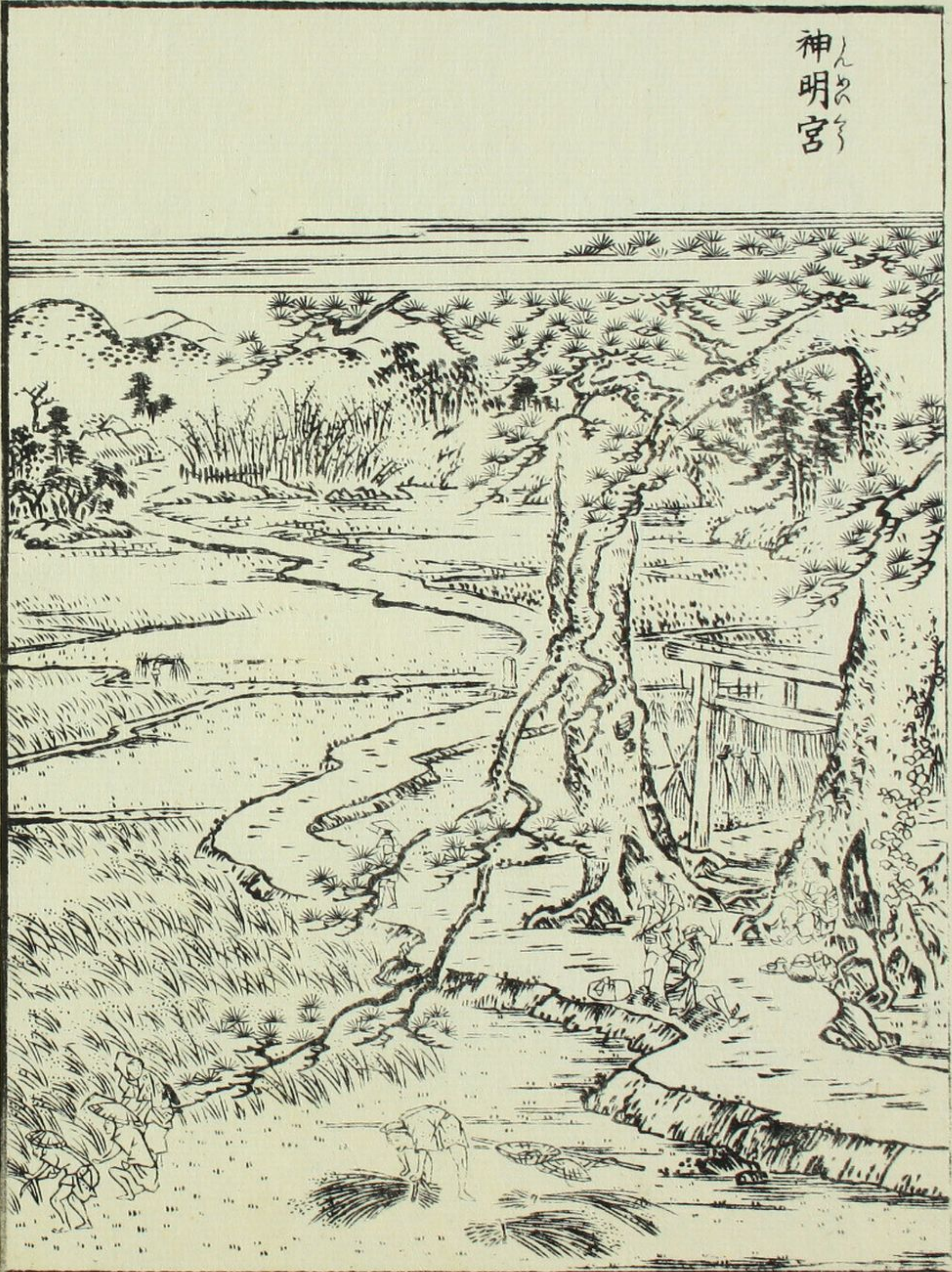
熊野権現祠
本堂の左の方に山ありて往古行基大士此地に至るより入時

鳥小乗と稱す熊野権現と稱す由縁起す

麻耳山
熊野祠あり阿加井あり土俗奥の院と号し往古弘法大師勒の地と



神明宮



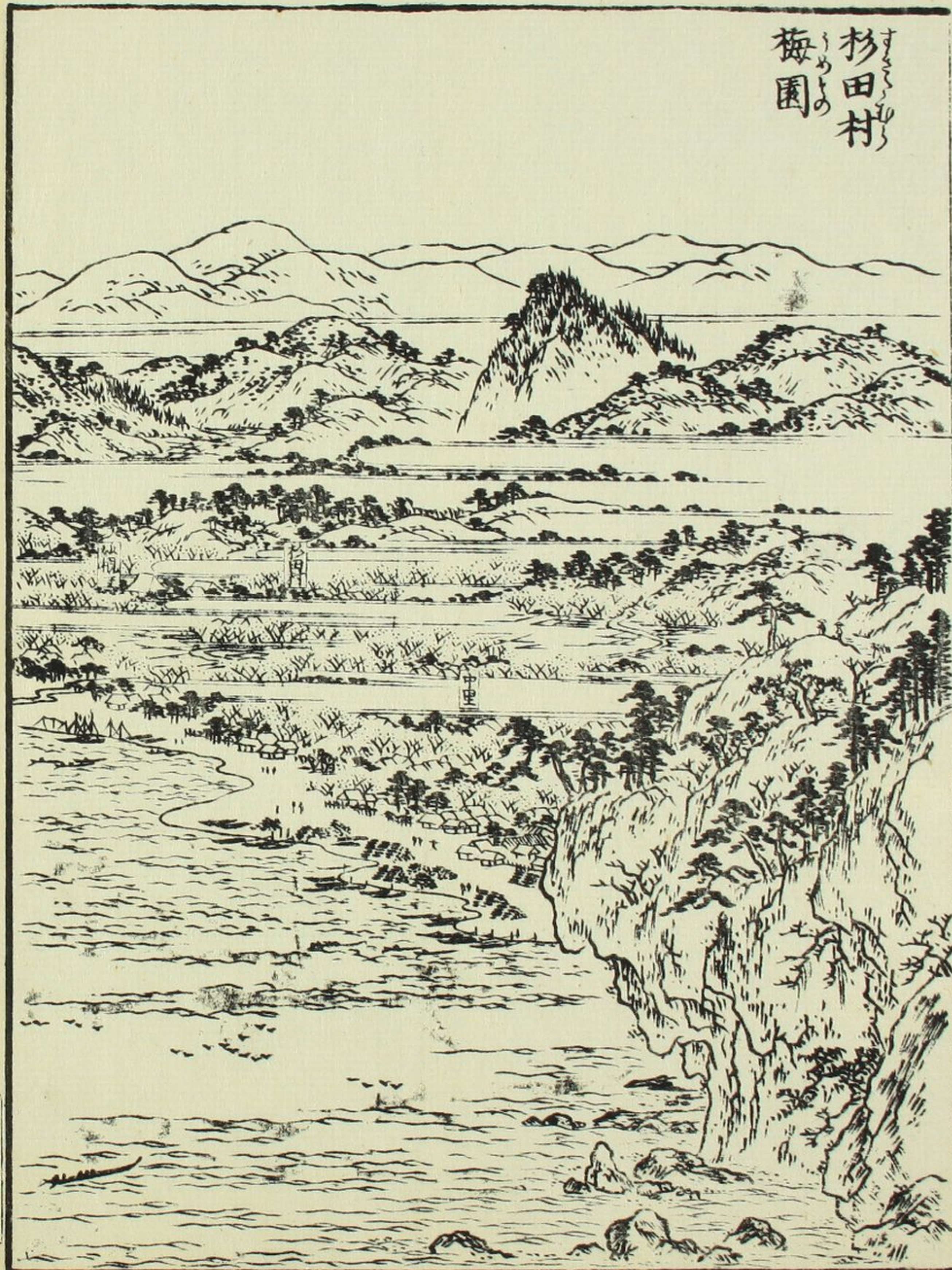
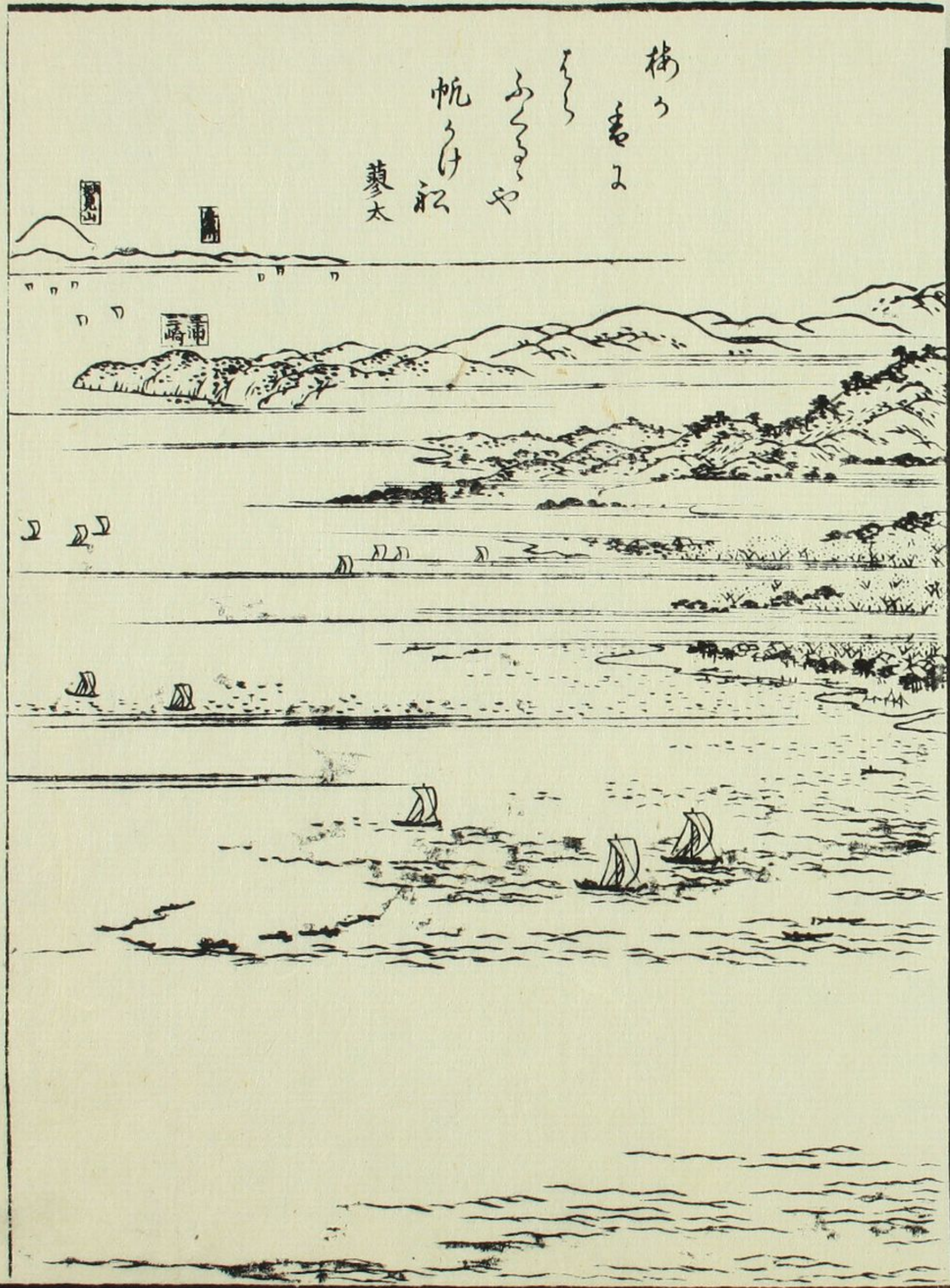
鯨鐘

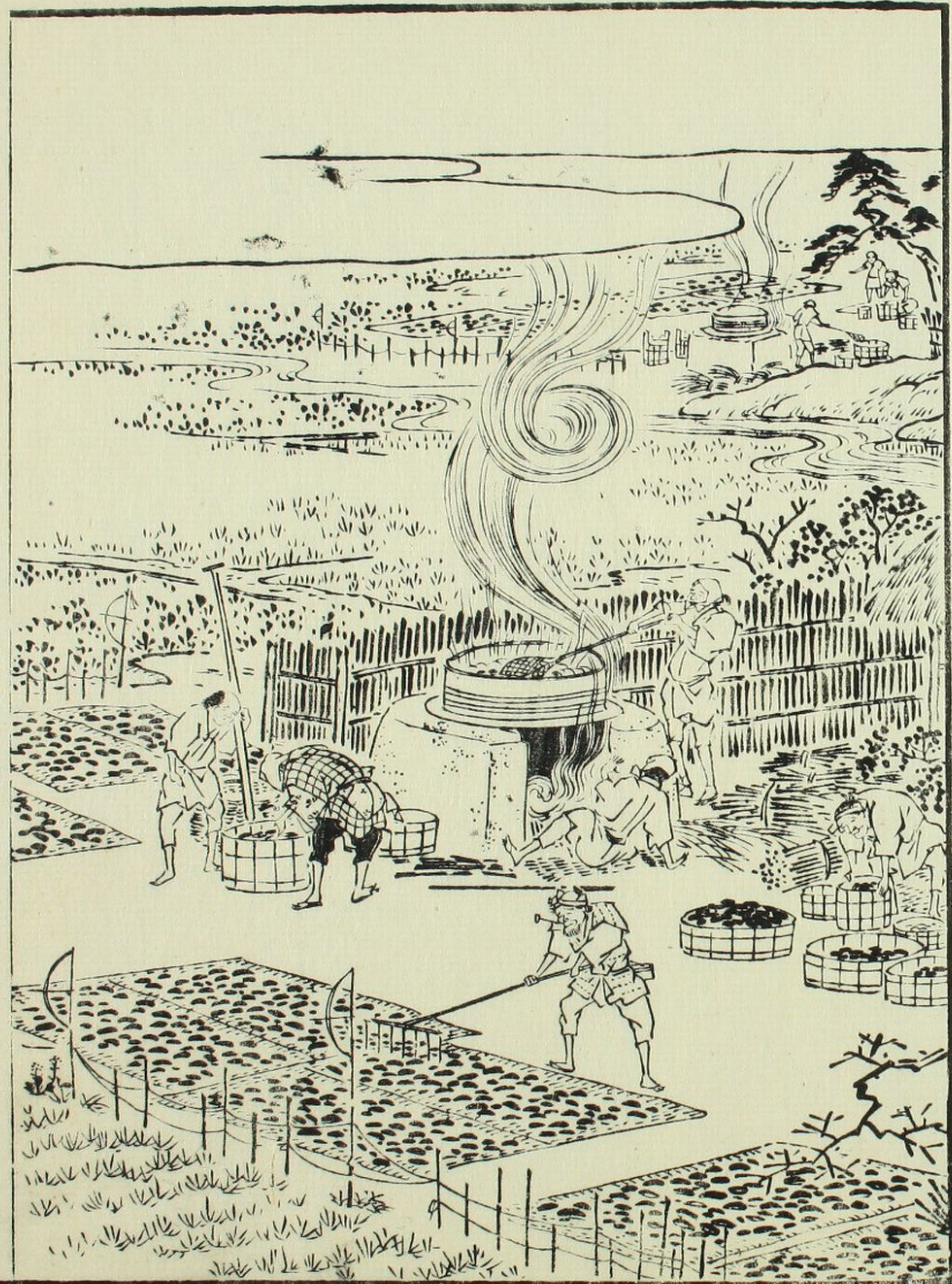
堂前右の方坂の社より、時鐘弘安九年九月廿五日、鑄浴のその中て願主
法印長慶とて名を注せり、今の鐘ハ寛政十年に改鑄せり

七ツ石

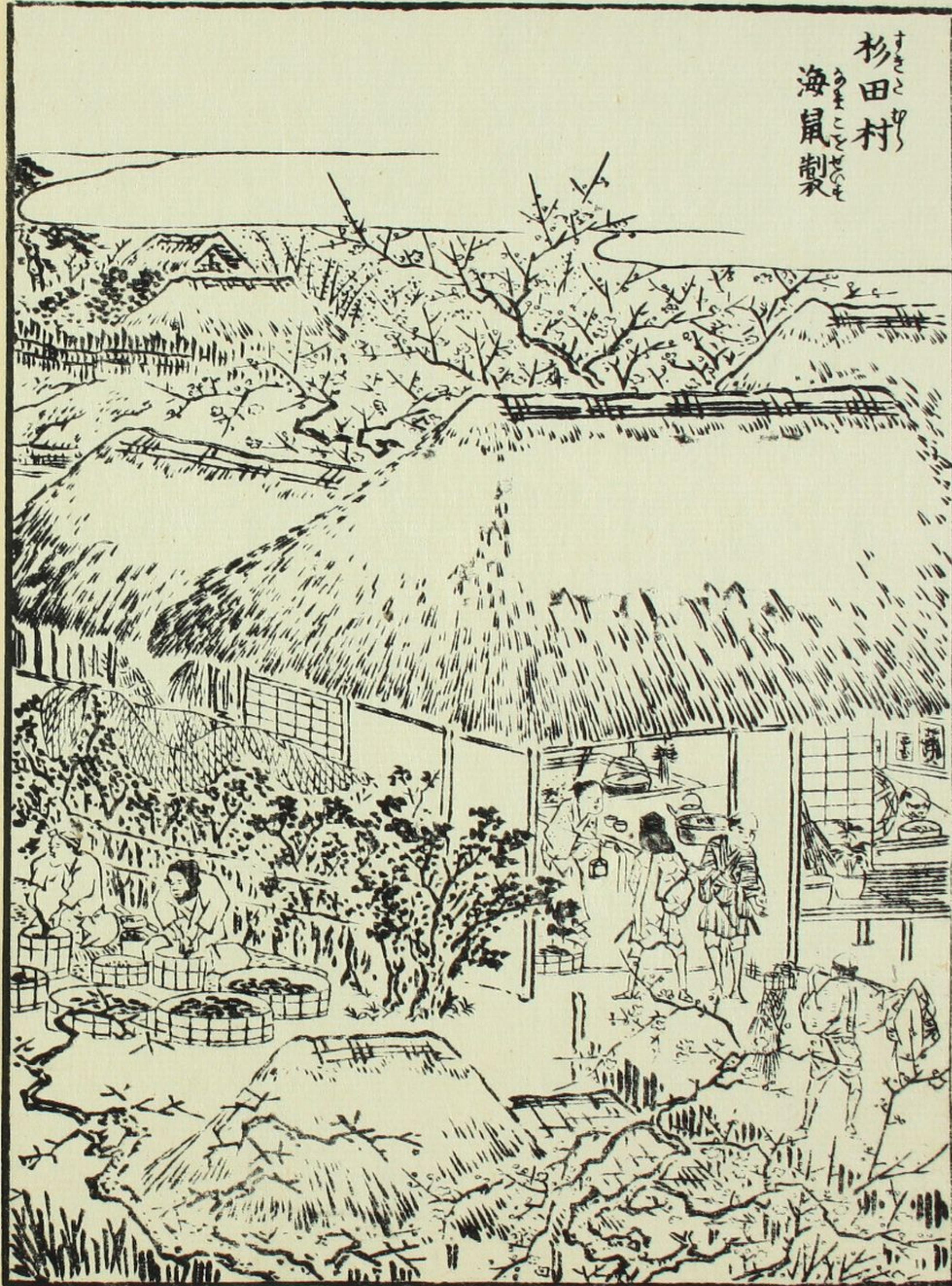
若神堂奇異の靈石や、自ら現れ自没する恒に其在所とあり、
若堂合破壞及及び修理の力をいさる時、因らるる此石現れ、
然、ハ枕敷金錢等涌く、幅三ツあり、頻年御堂の再堂を企つる、
同、檀家の庭中より、知りたり、寺僧喜、當寺境内に安を尚靈石の徳
傳、く、不、工、匠の資財とせり、果して明和三年造堂の功と全く、
具、靈、集、小、石、今、二、王、門、の、傍、ニ、ツ、あり、又、最、村、に、
存、當、寺、表、門、の、前、耕、田、の、中、に、一、ツ、あり、共、小、四、ツ、ハ、今、
二、王、門、の、下、に、あ、る、陰、剛、密、迹、の、兩、像、ハ、運、慶、の、作、り、各、九、尺、餘、の、
小、田、原、北、条、家、制、札、永、享、十、年、丁、卯、十、月、二、日、
同、寺、領、寄、附、證、文、天、文、二、年、癸、巳、二、月、十、八、日、
本、尊、縁、起、曰、人、皇、四、十、五、代、聖、武、天、皇、の、御、宇、行、基、大、士、東、國、
遊、化、の、頃、此、地、に、至、り、ま、の、の、空、中、に、白、蓮、乱、飛、く、山、上、り、
散、墜、を、大、士、怪、む、て、山、小、登、り、ま、の、の、果、に、神、人、の、ま、せ、り、一、を、
白、狐、も、乘、り、一、ハ、靈、鳥、も、乘、り、今、境、内、に、鎮、座、の、熊、野、各、大、士、
告、て、曰、く、去、る、養、老、年、間、印、度、の、善、矣、畏、三、藏、遠、く、我、

告て曰く去る養老年間印度の善矣畏三藏遠く我





杉田村
海鼠製

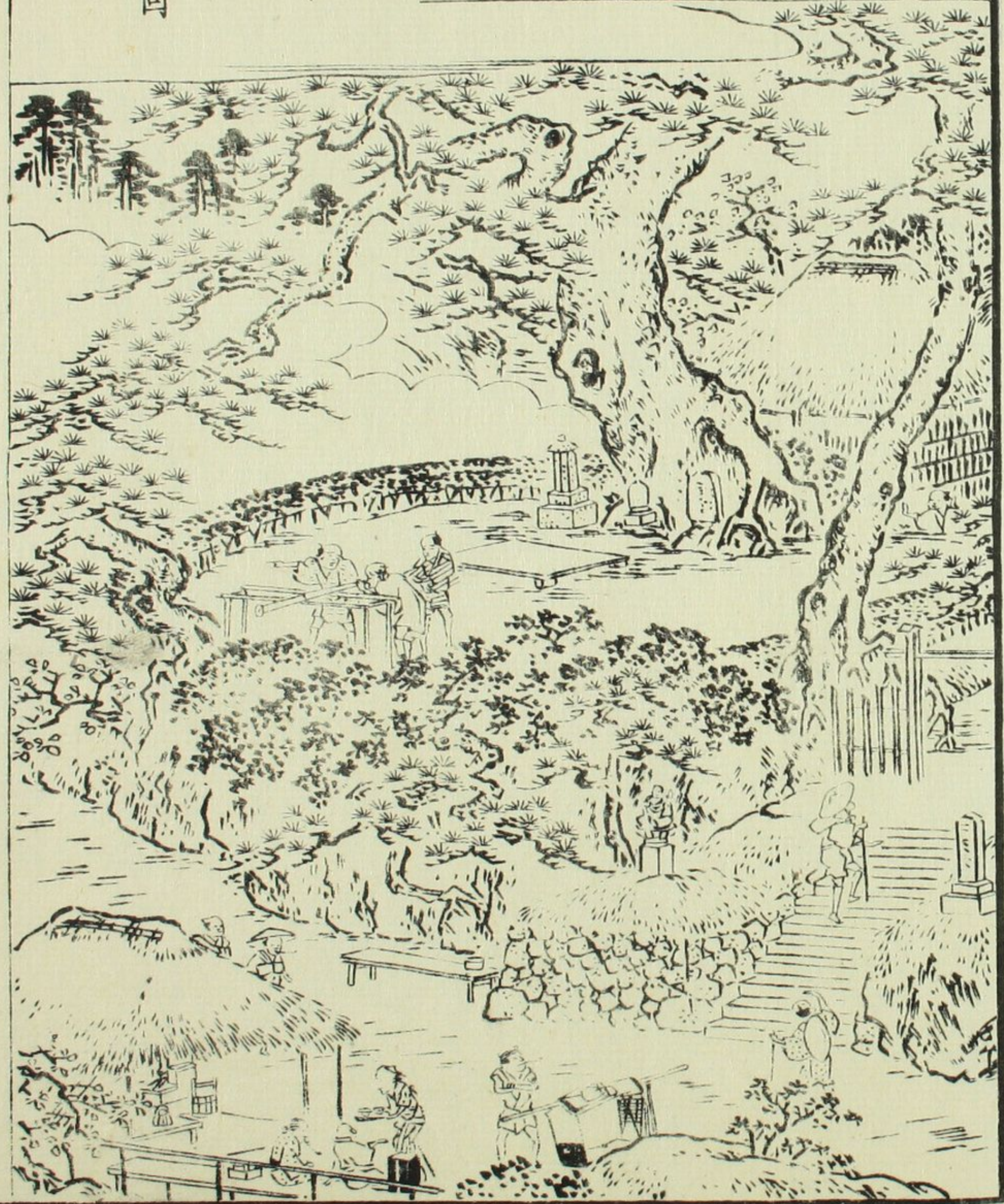


日本の土小渡を密教の機縁を要むと終ふ此の地に来り
 心を止めりて七箇の幡石を加持し一所稱七石又其の石は陀羅尼
 を書き寫し一此山に鎮す結界しぬと云ひ託て其の終つ方をあらはしめ
 あらふに於て大士善無畏の素懐を鑑みては十一面の尊像一軀を
 彫りては當の寺に又弘仁年間弘法大師此地に錫を飛し
 無畏三藏の舊を興し行基大士の跡を継ぎては大悲者能淨
 刹と鞞をあらはしめ伽藍安鎮のありを四臂の不動を錢を作し
 密教獲神の法樂をあらはしめ般若心經を書き寫し一人法繁榮の
 為す一千座の護摩を修し且大黑愛深此字の宝塔
 一基是皆大師の製しぬては遺の後長曆の頃武相の
 間疫癘流行し一人民大小是を患ふ時小當寺中與光慧
 阿闍梨本寺小新し此の疫災を除滅せしと云く
 澤此地ハ六浦莊の内なり吉田兼好法師ハ此地に住れ

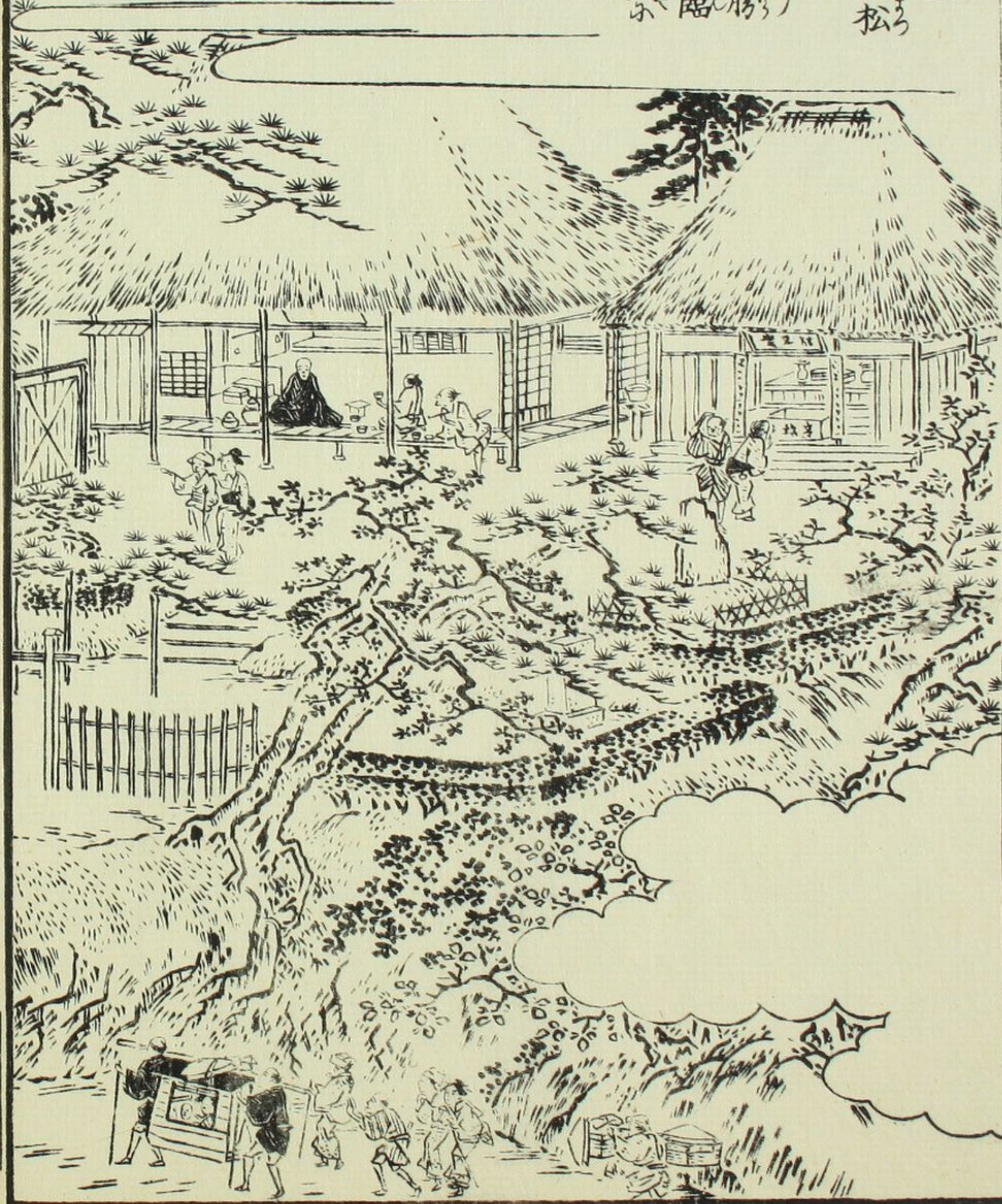
絶妙の勝地なりと稱せしれ一往古巨勢金岡此地の勝
 景を摸し畫むと及つて筆を投し嘆賞を大明
 心越禪師ハ其佳景西湖に似しと云ふ、其八勝ハ准疑し
 八詠の詩賦あり

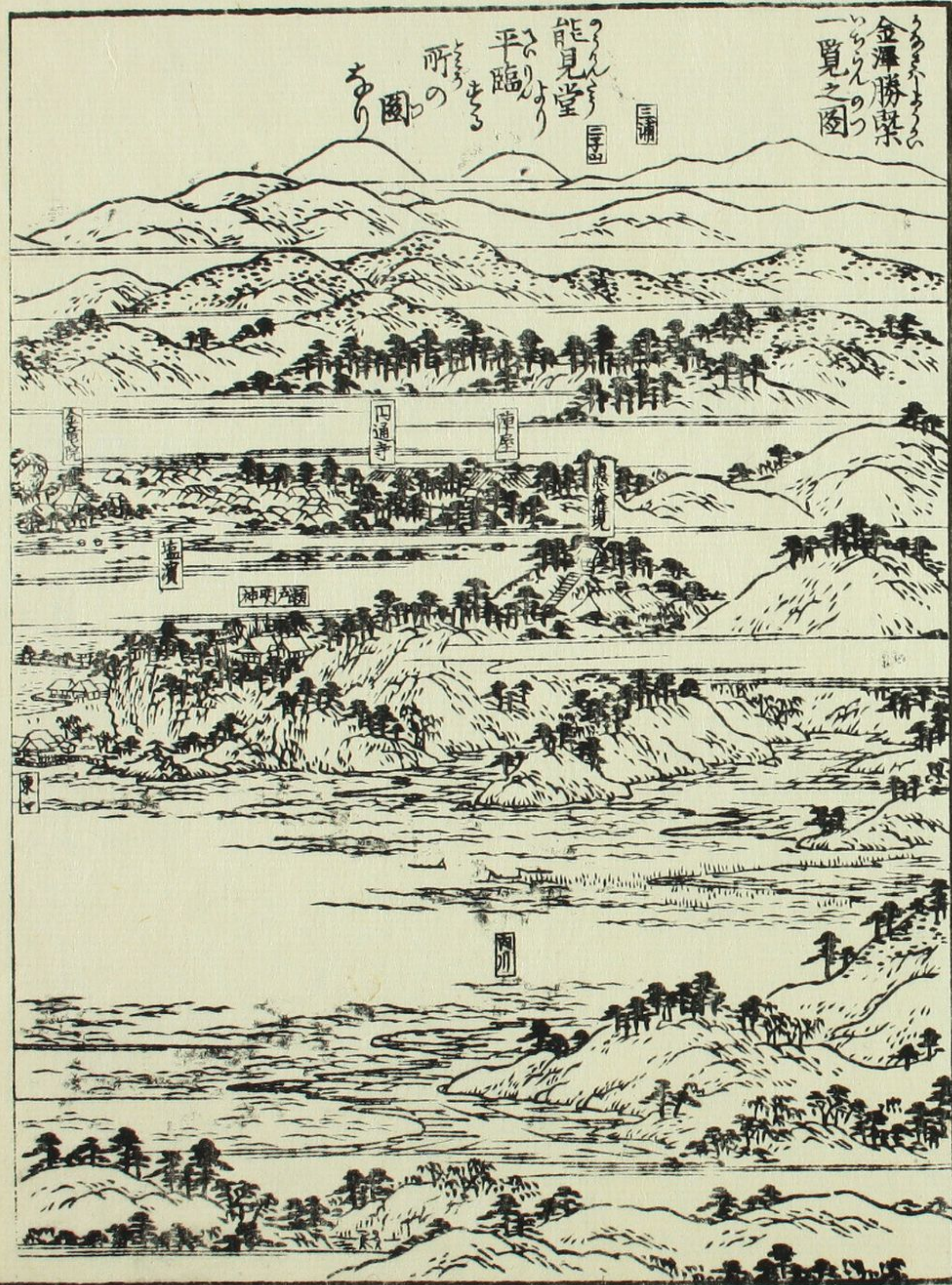
泊々洲崎晴嵐静行雲流餘暉依依狂波遠竹扉市後日斜人
 清瀨消秋月水自依依狂波遠竹扉市後日斜人
 飄處共看水輪舟際浮清瀨消秋月水自依依
 暮雨淒涼夢亦驚甘泉洞々聽分明蓬窓淹塞無
 相識賜斷君山鐵笛聲朝識賜斷君山鐵笛聲
 雲外依稀數連天無恙輕帆掛日邊款乃高歌落
 生風稱名藍鐘覺地華鐘晚扣若鯨音幽明聞者咸
 平悟一片迷離祇樹木生風稱名藍鐘覺地華鐘晚扣若鯨音幽明聞者咸

涼
如
柳
糸
ハ
足
筆
擲
松
西山
宗固



能見堂
擲筆松
此所あり
金澤の勝
聚を平臨
まき園ハ次ハ
奉り





金澤勝景
一覽之圖

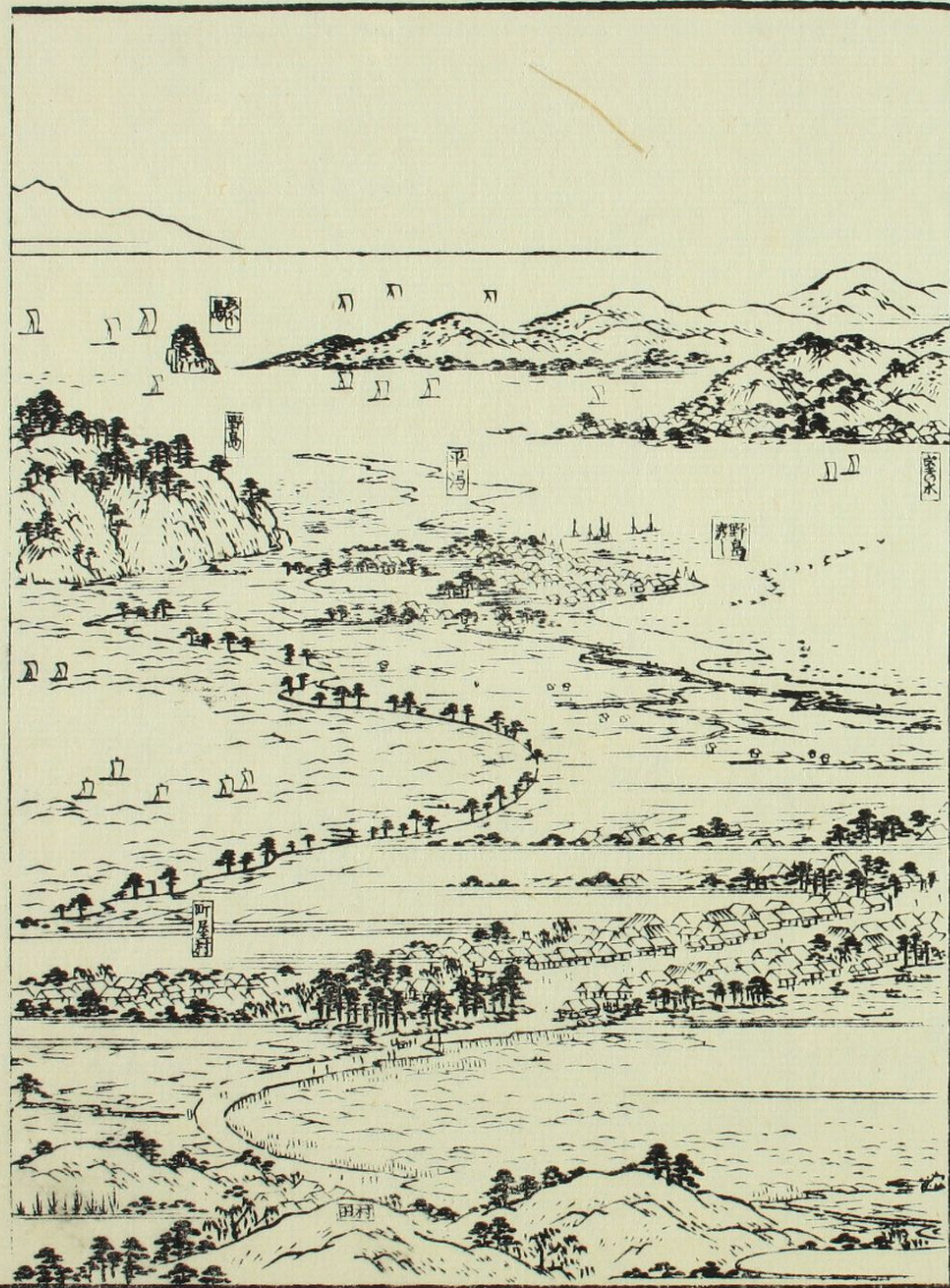
能見堂
平臨
所の
園

列陣中冥堪入塞菰蕭瑟幾成隊飛鳴宿食倦
樓進千里傳書誰不愛
廣内川暮雪沒奇花六出以鋪練渾然王砌山
河色逾覆危峯露些犬
獨羨漁翁是作家持竿盪漿日西斜網得魚來沾
酒欲披蓑高臥任堪誇
武州金澤擲筆山能見堂有蒲相八景之風味因觀
鎌倉志甚詳一夕寥寥對青燈漫賦八景之陋句以
識斯勝境云歲執徐夏日
東阜越杜多州

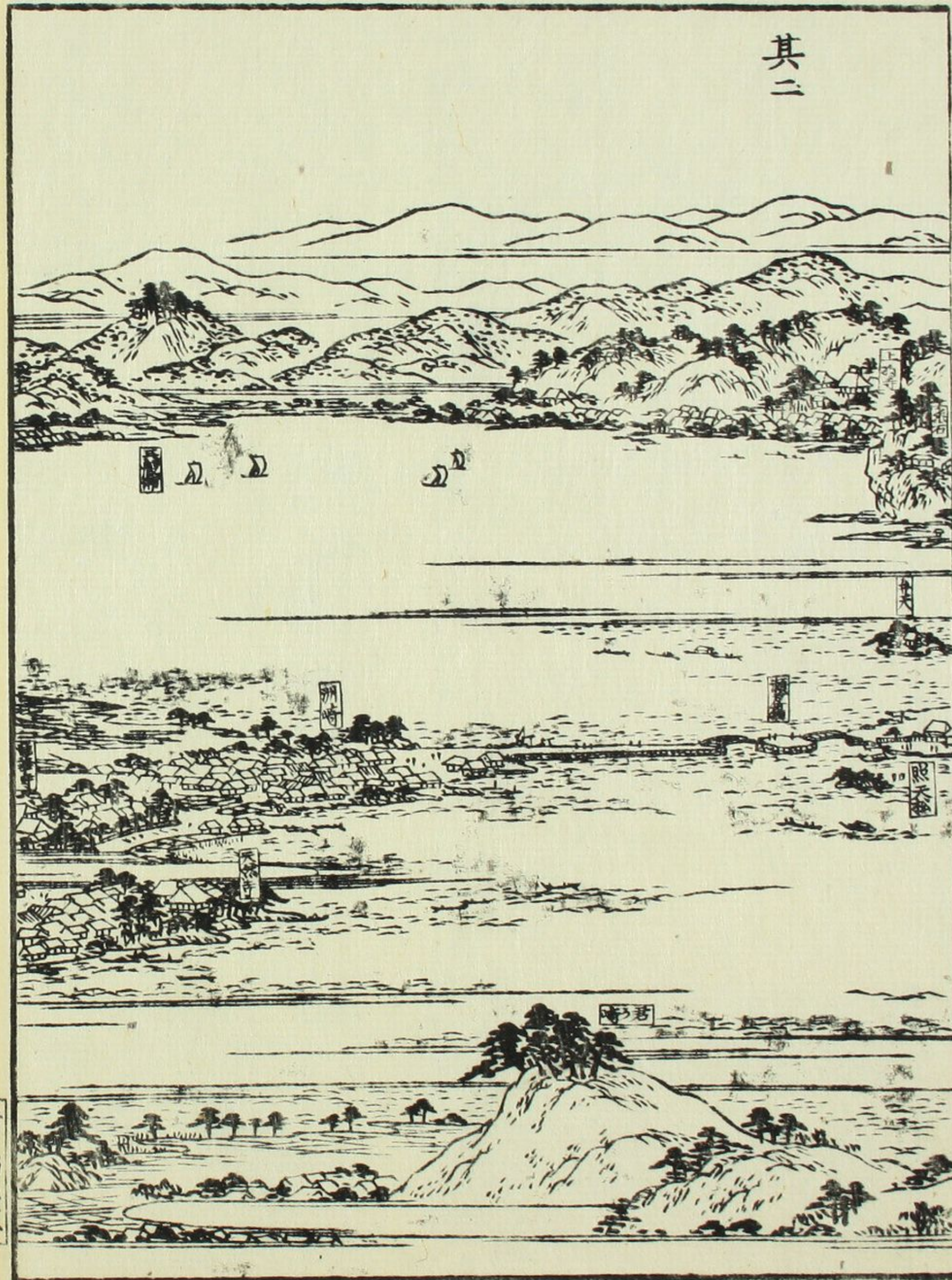
能見堂

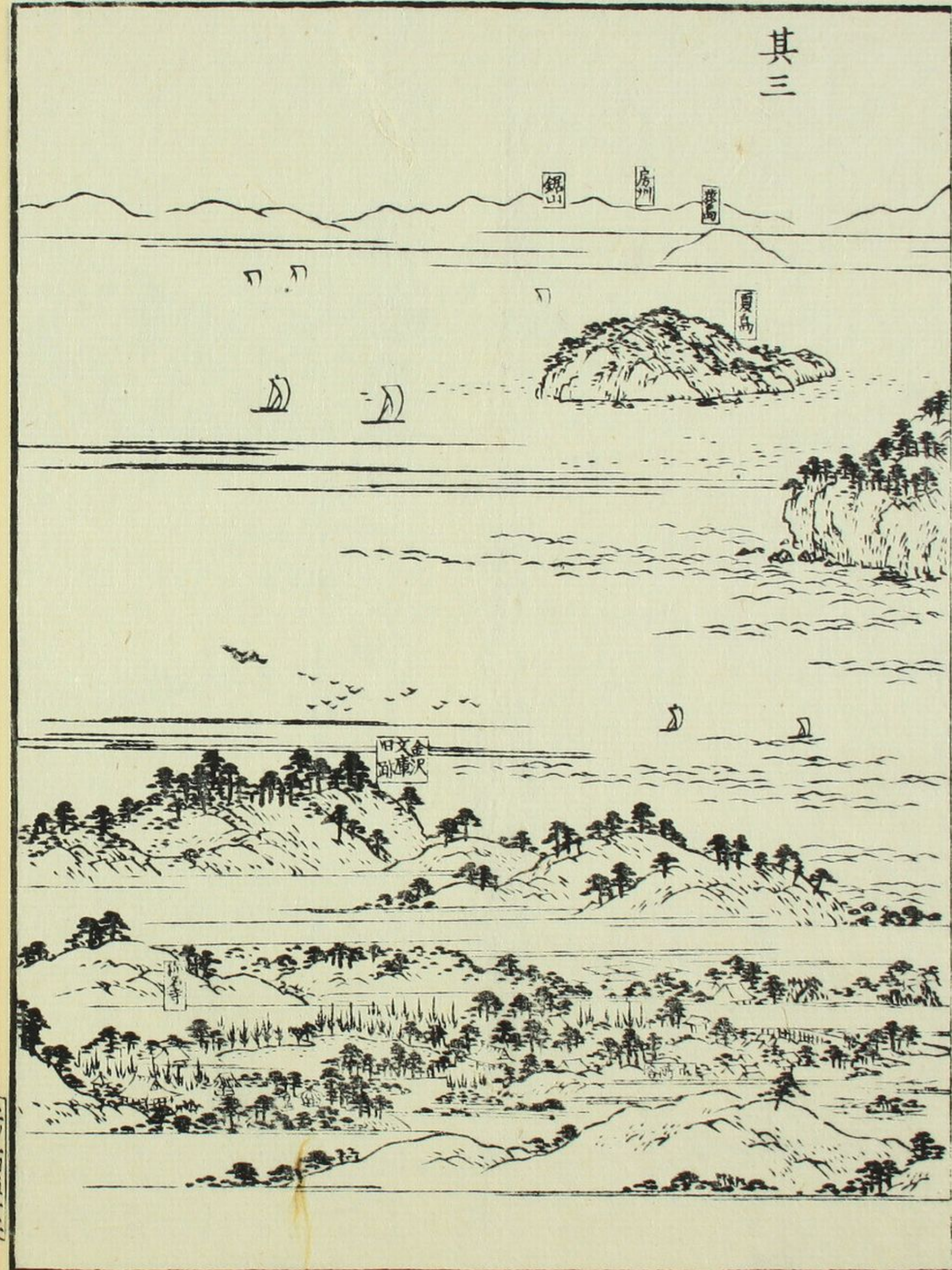
金澤稱名寺の良の山上より禪宗の草庵あり

本寺の地藏井ハ惠心僧都の作也一寸八分有りと云
後世立像二尺五寸計の地藏菩薩と作る靈像をハ
其胎中より云故に此草庵を地藏院と号く
近世久世和州侯源廣之建立あり其を擲筆山及び
能見堂の二つの額を共小心越禪師の書なり
相傳ふ昔畫工
巨勢全岡なるもの其真景を写さんと筆比及ハざる



其二





以絶倒（絶倒）のけん堂と云と梅花無盡蔵は濃見

堂は作る或人云此地より望め八瀬戸の八勝も皆能見

故に能見道と云とつと

澤庵和尚のうらうら記は能見堂の松と云より金澤と下せ

詞中及能化堂の作られ

擲筆松堂前存まのこの大松を巨勢金岡此地の勝景筆と

梅花無盡蔵 出金澤七八里許攀最高頂則山々

水々面々之佳致昔畫師金岡絶例擲筆之處有

名無基但其名不甚佳相傳曰濃見堂也中畧又

云畫師擲筆之峯云云 萬里居士

登々匍匐路攀高 景集大成忘却勞

秀水奇山雲不裏 畫師絶例擲秋毫

涼々々々 杉ハと筆 杉松 西山 宗因

此地に至る金澤の勝景を望め八畫は如く南より西

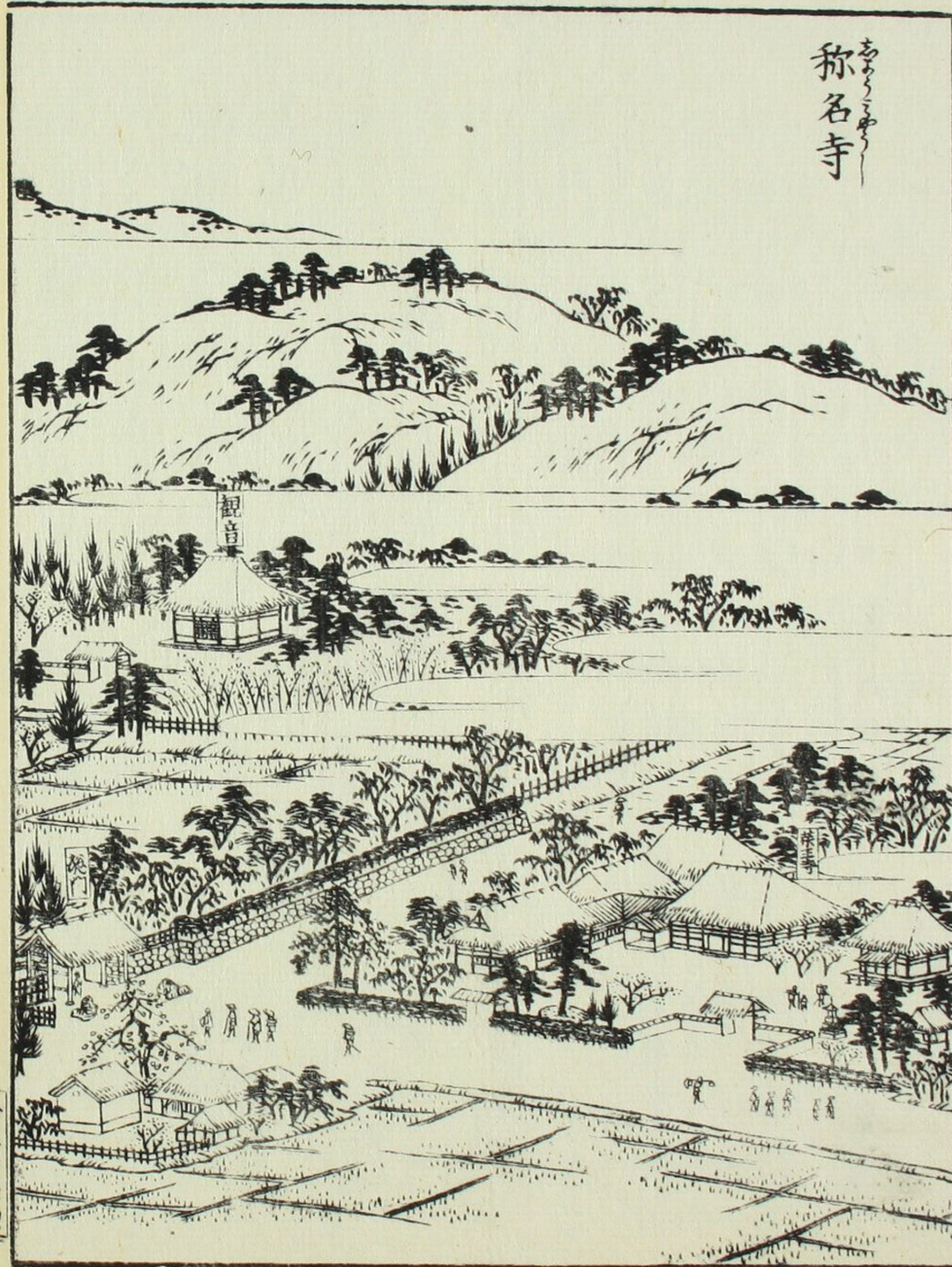
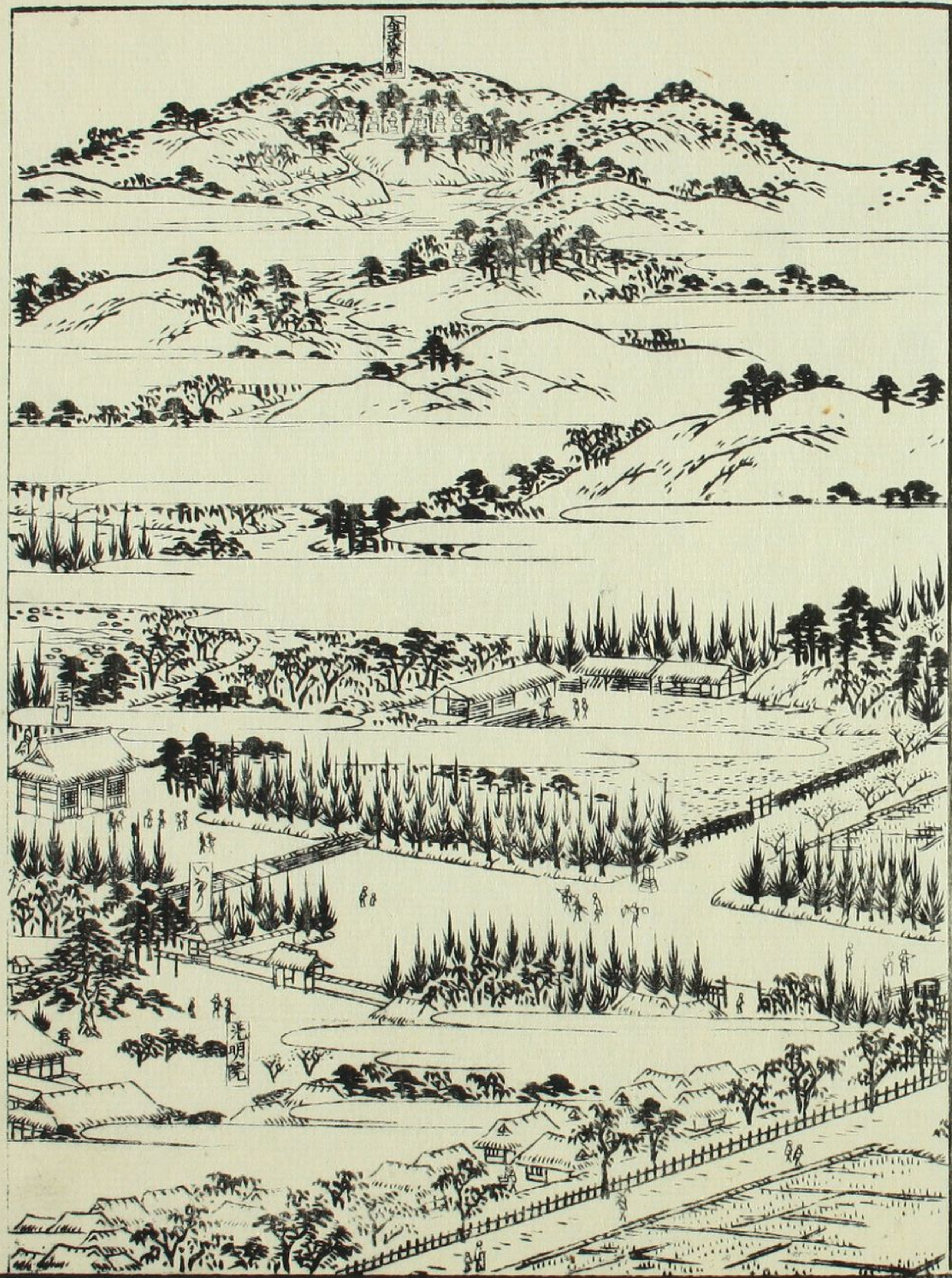
北よめろりくハ皆山中東ハ滄溟に連る千里の風光
窮りなく沖舟の真帆片帆ハ雲小入りとあ中一海る
瀬戸の神祠ハ水に臨み称名の佛閣ハ山に傍り漁家
氏屋ハ樹間くふくそ一島嶼ハ波間くにあ
る又瀬戸の烟潮水の盈虚も皆此擲筆松の下に平臨
せよ水の中一瞬は速く一日早晩の異なる一年春夏
秋冬の変わる千態万状極りなく南左の一勝地あり
あつと松島象潟の風致あつと以雅客遊人留連時と
移せりとも其十と一と究り能り

金澤山稱名寺 町屋村にあり 弥勒院と号に真言律に
南都の西大寺に属す當寺ハ龜山帝の勅願所なり
北条越後守平實時の本願其子顯時の建立なり
法名と慧日と号を靈牌に弘安三年三月二十八日に卒せり

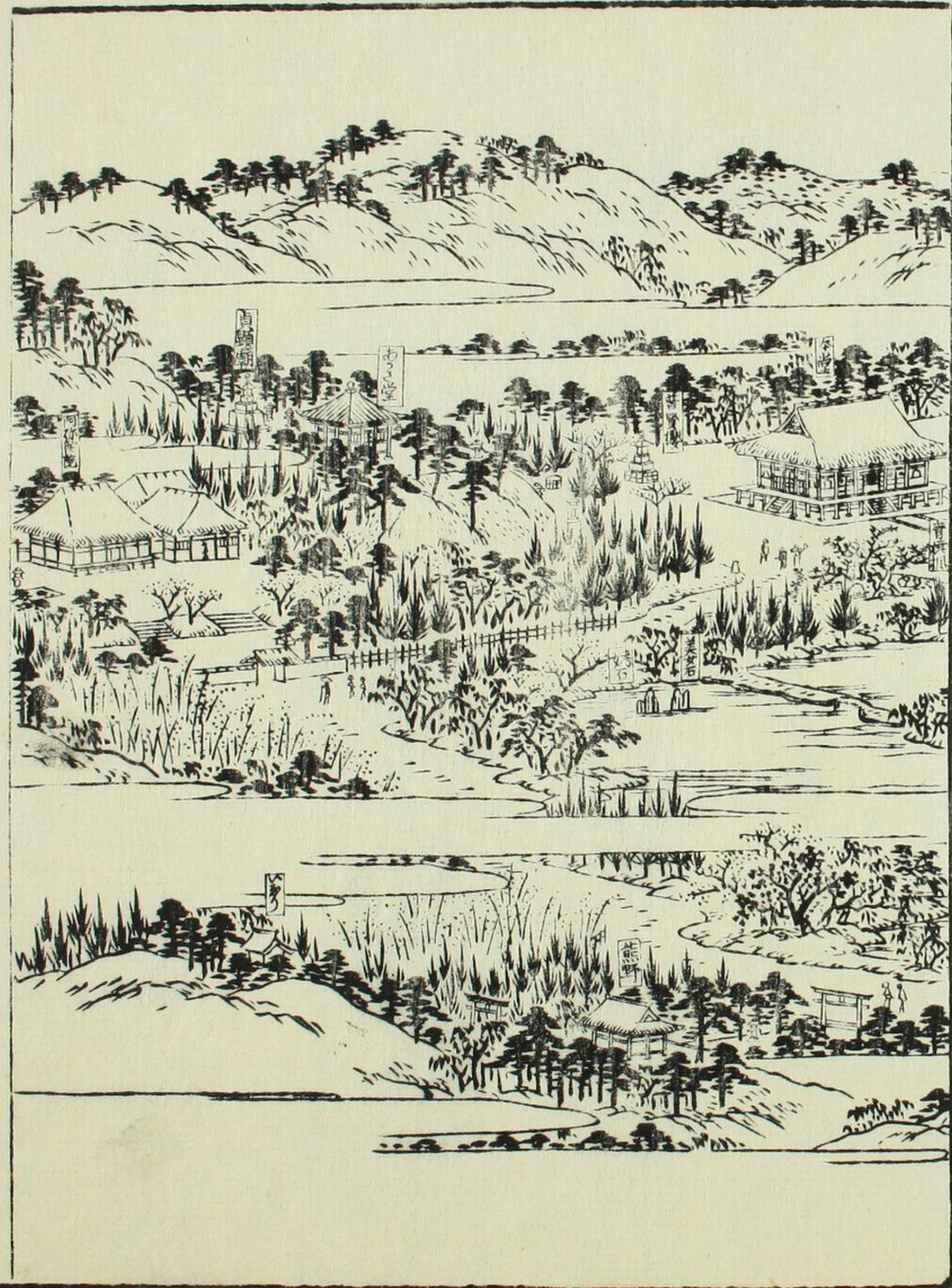
本尊弥勒菩薩ハ唐佛なり立像五尺五寸あり傍に運慶

の作の地藏菩薩の本像二軀を安んず開山ハ審海和尚と号す
小田原北条家分限帳に金澤稱名寺領金澤に伏せり又氏綱の三男
兼壽王所領の内金澤稱名寺分とあり地を注し如く
愛染堂 本堂の西にあり本堂に柳子あり三寸ありとの鎌倉志に弥勒
大結界の圖に三重塔と注し直興北条の回國雜記に稱名寺とあり
又澤庵和尚の鎌倉記行ゆ本堂一字あり諸堂皆跡をとり五重に
塔も一重ありぬとあり
鐘樓 本堂の東にあり

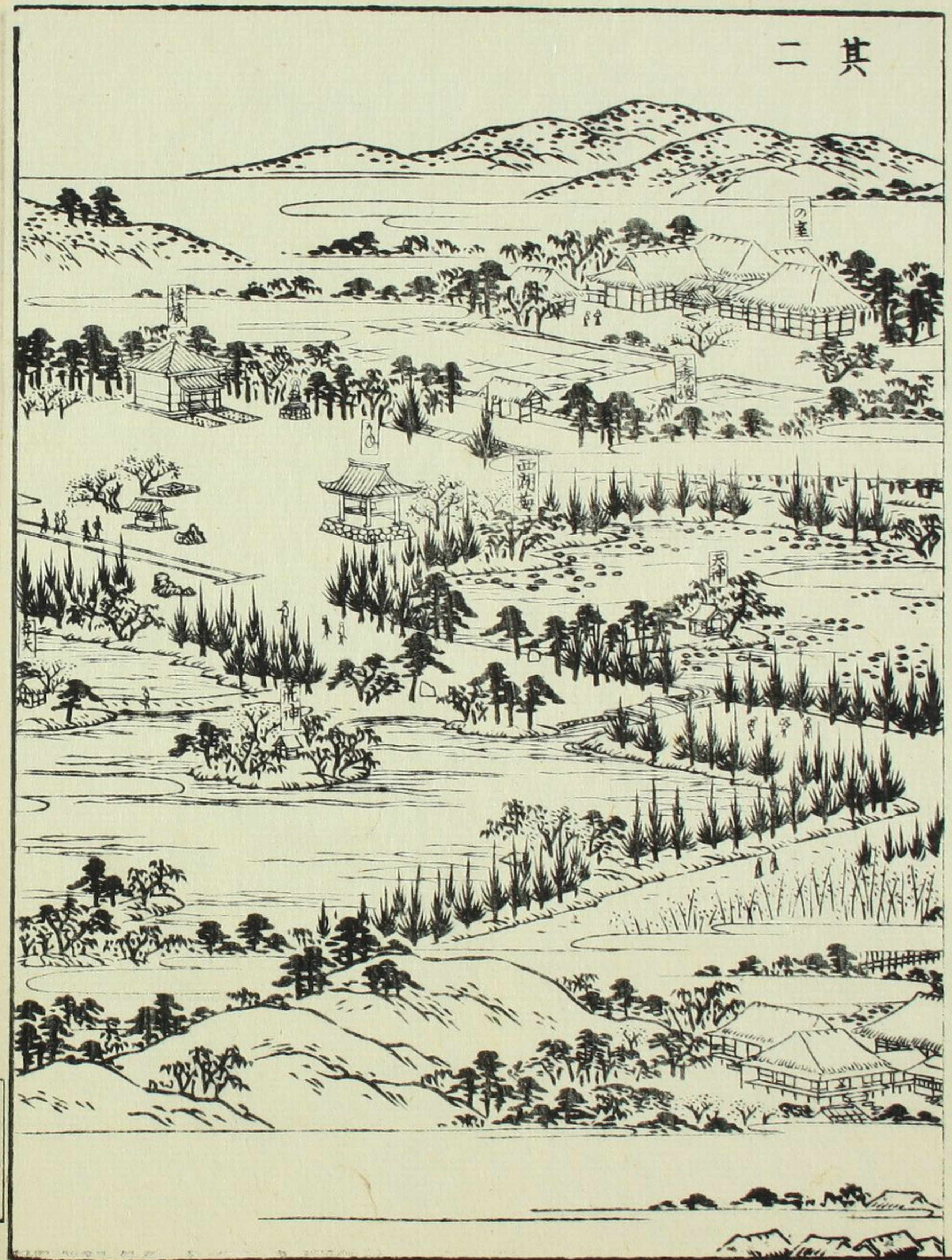
大日本國武州六浦莊稱名寺鐘銘
降伏魔力怨除結盡無餘露地擊捷槌菩薩聞當集
諸欲聞法人度流生死海聞此妙響音盡當雲集此
諸行無常是生滅法生滅已寂滅鐘聲當願衆生
悉有佛性如來常住無有變易一聽鐘聲當願衆生
斷三界苦頌證菩提
文永己巳仲冬七日奉爲先考先妣結緣人等同成
正覺鑄之



高き山
称名寺



二 其



金澤頭時墓



金澤貞頭墓

大檀那越後守平朝臣實時實泰龜ヶ谷禪尼

宋入宋小比丘
慈圓種述
洪書

改鑄鐘銘并序
此鐘成乎永曆
力非募士女更
伏乞先考超三
於光世音暨半
洪鐘之起其始
質備九乳形象
三界五趣無八
之朝之夕無愚
賢凡厥聽者同
見金仙

正安辛丑仲秋九日

大檀那入道正五位下
行前越後守平朝臣
實時
法名慧日當寺住持
沙門審海行事比丘
源阿大工
大和權守物部國光
山城權守同依光

金澤頭時墓

同貞頭墓

當寺大檀那阿彌陀院後の山の中腹あり
高七尺餘五輪の石塔あり
同所あり頭時の子なり石塔あり
五輪あり高とも前不同程あり

美女石 燒石 池の中橋より西のあり 金澤
 青葉楓樹 金澤八木と稱するもの一あり 謝曲也と是を作ると

北國記行 金澤より行く 稱名するもの一あり 律のあり

つわいば一本は時を白くむのふさささの巻のみち

東國記行

秋のつとまのふさささの巻のみち
 宗牧

鎌倉記行

西湖梅 鐘樓の影あり 八木の其一なり
 澤庵

梅

花無盡藏曰貼西湖梅詩序律寺西湖梅以未開
 丙午春余入相州金澤稱名東遊之奇也
 為遺恨富士則本邦之花豈非東遊之奇也
 唯見落蓋先雖未見其主屬南船移杭州西湖
 哉金花澤稱名先雖未見其主屬南船移杭州西湖
 梅於提遊十庭背以湖呼之西湖詩云前朝金
 澤古招禽帝及今年餘雖未盡福山西有湖識
 遺恨翠禽數十片為恨未盡福山西有湖識
 春摘其花數十片為恨未盡福山西有湖識
 之舊廬奉獻而彼包於春梅心翁之借則趙昌
 條貼其花而見之則於春梅心翁之借則趙昌
 所貼其花而見之則於春梅心翁之借則趙昌
 觀焉次以要作贅語題新造化所設而見之日招
 西之次以要作贅語題新造化所設而見之日招
 湖梅貼軸詩題新造化所設而見之日招

萬里居士

六浦秘法日荷上人
 称名寺の住僧と
 蔵小基と圍之彼
 寺の二王を
 賭物とせし
 上人勝り
 うれひ終ふ
 これを負く
 甲州身延
 山へ至られ
 一と云
 大力無双の人
 なり



前朝金澤古招提 遊十年遲雖啞臍
 梅有西湖指枝拜 未開遺恨翠禽啼
 一横枝上粘西湖 名字斯佗列不呼
 意外春風真假合 傍人定道逐成圖

櫻梅 同所あり花ハ重瓣 普賢象 本堂の前左の眼あり一品に
 文珠櫻 同所あり普賢象小對一の 鐘樓の後あり門に一の
 今ハ荒廢せり澤庵和尚の鎌倉紀行ありの室と書せし額を揚く

阿彌陀院 本堂より左山の傍あり 二王門 樓門の左右に安置せる
 運慶の作りあり此二像ハ杉田村東禪寺とのあり
 稱名寺の住僧と基を圍二王と賭とせし終小日荷上人と号せし上人或日
 二玉の像をゆき身延山へ逃されり六浦上行寺に其二玉の像の玉眼
 なりと稱する五寸ありの玉と傳へり

熊野新宮 池の西岡の上あり
 寺寶佛舍利 八祖相兼の舍利と号し代々弘法大師大和
 國室生山小納置と号しと 龜山帝の執にり

當寺へ後納りし昔ハ 弘法大師の作あり
勅封ありしと云ふ 龜山帝の御念持佛の作あり
愛深明王金銅像 吉備九の作りと云ふ
共ニ菅丞相の真跡の瑜伽論ハ長二寸五分一行ハ二十五字あり此論ハ一部百卷
紀州高野の金剛三昧院ハ一巻江州作生島ハ一巻以上合せ其外古佛多
枚奉りし違あり

大界外相圖 元亨三年當寺結界の図なり其光景尤大夏高堂ハ
元亨三年癸亥二月廿四日 今ハ異なり其裏書の按云
羯摩師極樂寺長老恐公大德
多宝寺長老俊海律師

當寺本願越後守實時及ひ顯時貞時貞將等の西像の
懸幅あり

楊貴妃玉簾一連 初尾州熱田ありしと龜山帝の勅あり當寺ハ
梅花無盡藏曰 金澤林名律寺間西湖梅以未開爲
遺恨矣珠簾猫 兒支竺群書之目錄無介者而不能
融目云云 注曰称名寺水晶簾唐猫見之孫一大時叡及郡書

蓋先代貯焉 又曰寺秘件々之物容易元使人看之也

田園雜記 差の長と三尺四寸ひろくと四尺少くも水精の
かきとせのみの差ありしと云ふ
お妃のまのあつたは花帳ふりしと云ふ
かきとせのまのあつたは花帳ふりしと云ふ
かきとせのまのあつたは花帳ふりしと云ふ
かきとせのまのあつたは花帳ふりしと云ふ

北條陸奥守制札 道與 推后

金澤阿弥陀堂称名寺領敷地并垣場等事
右於當所軍勢并甲乙人等不の致咎妨狼藉若於
令遠犯軍者為被處罪科之被注申交名々状依仰
執達如件

康安二年五月廿四日 陸奥守 印
永享十一年称名寺領結解状

註進

稱名寺領赤岩十四ヶ村御年貢錢永寛結解状事

合八十貫文内

六十九貫六百文

八貫文

一貫文

八百文

三百文

三百文

己上八十貫文

右所勘定状如件

永享十一年三月三日

政所憲意判

當判北条家繁昌の昔巨藍なる巨藍なりとも物換り
星移り堂宇多く破壊して今ハ山圍と古木聳えく松杉

寺納

代官給

徳妙衣料

夫領路錢西度四人分
年貢運上時

今津問方酒直

六浦六郎方礼儀替錢之時

金

梢とありそひ常小鬱くあり房宇をえそりて寂寞の
扉と閉ち座禪觀法の床とありに似たり

澤文庫舊址 阿弥陀院の後の畠といふ東野文集よ寺前の

冒と相傳北條越後守平顯時宮建をそりて内
和漢の羣書と納め儒書を墨印佛書ハ朱印を用ゆ

印文ハ楷字ゆゑ堅ハ金澤文庫の四字と注す印章の

次ハ後上杉安房守憲實執事より時再興せり

其後ハ荒廢し書籍散失せり

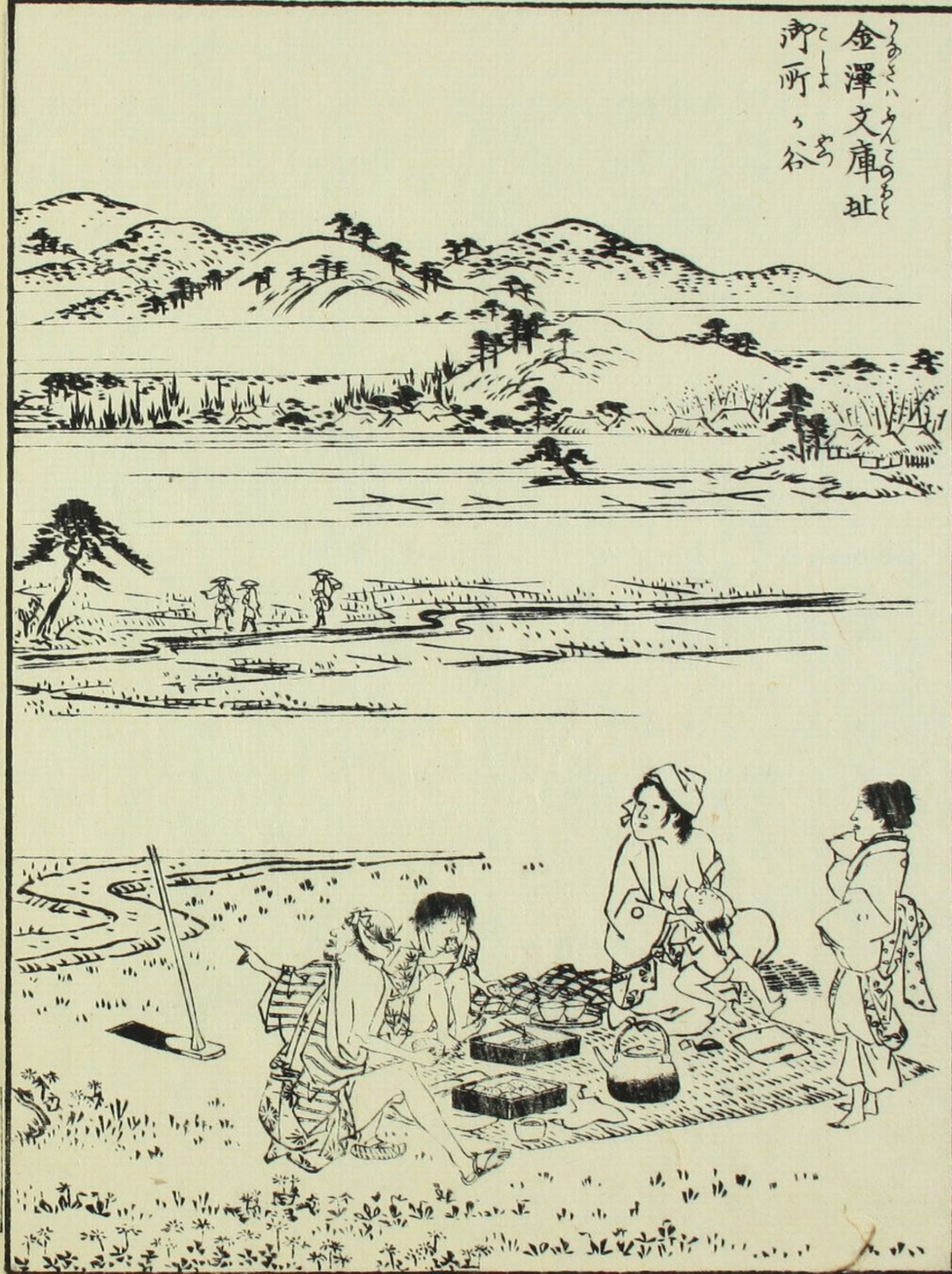
清原の教隆は群書治要と續せり余りも文選清原の師光左傳教隆
群書治要存民要術律令義解本朝文粹續本朝文粹續日本紀をのこす
其外人家よりあり一部とすのひまら一切経も取得たり
中原師光の跋ありとあり鎌倉志一切経の切残りとのの弥勒堂ありと云

印面大
共如圖

金澤文庫



金澤文庫址
 河所々谷



鎌倉大草紙云武州金澤の學校ハ北条九代の繁昌此
昔學問あり旧跡なり是れ今度彼文庫を再建
種々書籍を入置又上州ハ上杉ノ分國ありこれハ
足利ハ京并鎌倉ハ名字の地也他ハ異なり也彼
足利の學校を建立し種々の文書と異國より求め
納る此足利の學校ハ上代永和六年ハ小野篁上野
の國司より一時建立の所同九年篁陸奥守ありて
下向の時此ハ學校を建てる由其旧跡ヲ今残る
るを應仁元年長尾景久ハ沙汰とて政所より
今の所へ移る建立し近代の岡山ハ快元とて禪
僧なり今度安房守公方ハ名字掛の地あれハとて
學領を寄進し彌書籍を納り學徒を憐愍をこれハ
此頃ハ諸國大に種々學道絶るハ此所日本

一所の學校となる是れ猶以て上杉安房守憲実と
諸國の人をほめたるハ西國北國より學徒悉く
集ると云く

觀金澤藏書而作
玉帳修文講武餘
牙籤映日窺蝌斗
圮上一編看不足
照心古教君家有

遺人來覓舊藏書
縹帙衆晴走蠹魚
鄰侯三万欲何如
收在胸中歷五車

慕景集

二月將葉金澤の文庫やうに抄り三好
日向子勝元の許よりこれをこれハ隣家梅花
といふ歌を供りてててててててて

表あれや粉くともいふを記さるるも列の梅の夕風 持資

丙辰記行

懷古淚痕羈旅情
人亡書泯幾回歲

府儒早晚起蒼生
境致空留金澤名

御所ハ谷阿弥陀院の後の切通をゆる畠と云里俗云く
龜山帝の行宮の跡なりと
切通ハ則所泰請の鎌倉志ナリ

此帝勝地佳境へ遊歴のよりあはれとも此地へ浄享のより

舊紀に見えずと

魚好法師閑居旧跡 其地今あまらざる

魚好家集

武彦因室は...
あはれ...
あまらざる

右獅の御守...
...
魚好

藥王寺 三療山と号し...
...
古義の

真言宗...
...
大日如来

座像...
...
蒲御曹司

靈牌あり表小大寧寺道悟...
...
天文九年庚子六月

十三日と記...
...
由鎌倉志よ物るとりへとも今その牌

よるより

藥師堂 本堂の前右の方...
...
藥師佛の像

...
...
其法号を擲く

天然寺 法爾山と号し...
...
九丁ありを隔

て瀬戸街道より野島へ...
...
浄土宗より

鎌倉の光明寺に属せり...
...
阿弥陀如来の木佛ハ

座像あり一尺五寸計あり...
...
作者あり

禪方和尚と号し...
...
永祿二年二月

等の畫る佛像四五幅あり

龍華寺 知足山弥勒院と号し...
...
天然寺より五六町南の方瀬戸

街道洲崎村と町屋村の間道より...
...
左側より古義の

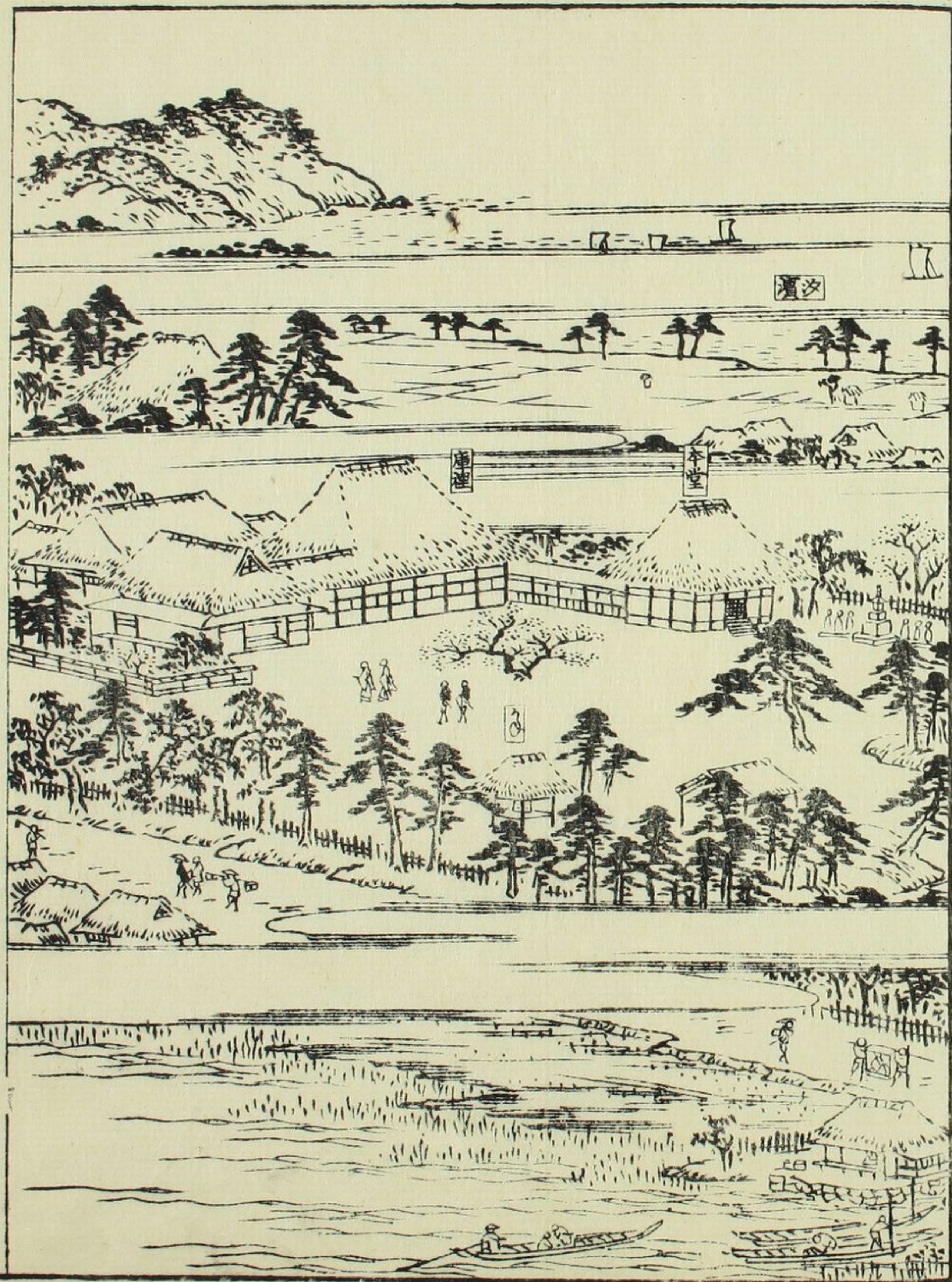
真言宗の檀林あり...
...
御室仁和寺の末

本尊大日如来ハ座像二尺餘り...
...
右は弥勒佛の本像を安

す共よ作者を志し...
...
左は安置の不動尊

作あり...
...
立像 太田道灌入道寄附と云

開山を法印



町屋柳
龍華寺



融辨と号
鐘樓堂前左の方にあり
其文左のこゝ

大日本國武州六浦庄金澤郷 知足山龍華寺
唱鐘知識文
夫滄海者鱗甲所潛泰岳者翔蹄所集則知智池者
念塵所浴靈鐘者苦類所息然則洪鐘隆鼓焉非但
留老王之望劍兼亦歟 灰河脫三界苦得見善提

菩薩勝慧者 乃至盡生死 恆作衆生利
而不趣涅槃 一般若及方便 智度悉加持
諸法及諸有 一切皆清淨 愆等調世間
令得淨除故 有頂及惡趣 調伏盡諸有
如蓮體本染 不爲垢所染 諸慾性亦然
不染利群生 大欲得清淨 大安樂富饒
三尊得自在 能作堅固利 大安樂富饒
七尊聽陀羅尼 隨求陀羅尼 光明真言
此各梵字略之

天文十年辛丑五月五日

富寺住法印推大僧都善融
檀那古尾谷中務少輔平重長
道傳

寺寶兩界曼荼羅 涅槃像 華者詳ありとあり 八祖畫

像 一幅弘法大師或ハ願行 十三佛補像 一幅中持姫の不動畫像

一幅弘法大師の筆なりと云 祿禱の裏書は太田道灌奇進とあり 寺僧云く

天正年間 御當家より於く重修なりとあり 鈴 一箇弘法大師の持物

五指量愛赤明玉像 弘法大師の作と云 鈴 一箇弘法大師の持物

鳳凰頭 二箇龍頭 上は金の箔と貼せり 灌頂の時幡を掛る具あり

當寺ハ治承年間鎌倉右府頼朝公伊豆國三島明神を

金澤瀬戸の地小勸請ありし後法味を進まざる為

文覚上人と共に志と合せ文治年間六連の山中に精舎を

創建せし 彌勒菩薩の像と安し 都卒の四十九院に

準擬し 四方は六八の僧坊を建 淨願寺と号 庄園若干

と寄らる 當寺是なり 往古弘法大師獲摩修りし中 然しあり 慶堂

堂と並へ粉壁 八月の光と移を伽藍ハ博敞あり 丹柱あり

星の林となせり 其後正嘉年間南都の恩性律師當山小

住し戒律を弘め弘長二年中東寺の能禪法印當寺に
於く灌頂を修めせし印融僧都の附屬に依て光德寺と
兼帶せし此寺も頼朝公の建立なり真言の靈區なり高野山
無量光院印融東遊の初此寺に住親筆の書籍也庫
荒廢せしと明應八年融辨師大永四年甲申八月深く是を愁へ
朔日八十二歳本尊の眞助を願われし菅原朝臣中務丞資方と合せ
伽藍再興と企む時小本も弥勒大士夢中辨師に告
めり是より良し當く末世有縁の勝區あり彼所へ移
し三密の法燈を挑へしと夢覺く後を窺はるる竜
燈の奇瑞あり洲崎村の境なり妙ハ堂舖は教團の竟は辨師
松あり竜燈の松と号今ハ枯る本尊の靈尔は任せ此地に至る二町四方は結界し兼帶
後土御門院の勅を奉り知足山龍華寺と号師資相

傳の本も聖教を納め善融法印は附屬を此師ハ相州小田
原の城主大森氏の
未子ゆき龍玉丸と号く并師の徳を慕ひ淨願寺に入る僧とあり其
世は隠れなり依り北条左京大夫永樂錢に貫文并柴村權現堂山と寄附
享祿五年小東寺の寶菩提院亮惠僧云を請りて傳法
灌頂を受天文十二年古尾谷中務少輔平重長を檀越と
し洪鐘を改鑄せし後太田道灌不動尊の靈像を寄
附し武運延長を祈り此不動尊の像ハ
此寺の左に安む靈牌を置來世の
追福を求る天文十九年 御問國の後當寺を御修
營りし御朱印を下ししより四海泰平此祈念
意ありしなり
當寺ハ真言古義檀林一宗の本寺ゆき金澤小甲より
境内中を古木聳え覺樹の粧ひと示し緑竹翠の色を
なり實相不變の容を頭も海水左右に湛る朝鳥夕鬼の
影を浮へ人家前後に列り山市漁村の觀をなせり二十

鎌倉記行

新夕子流

よ水

事ぬき

烏帽子

島

沖より

あき

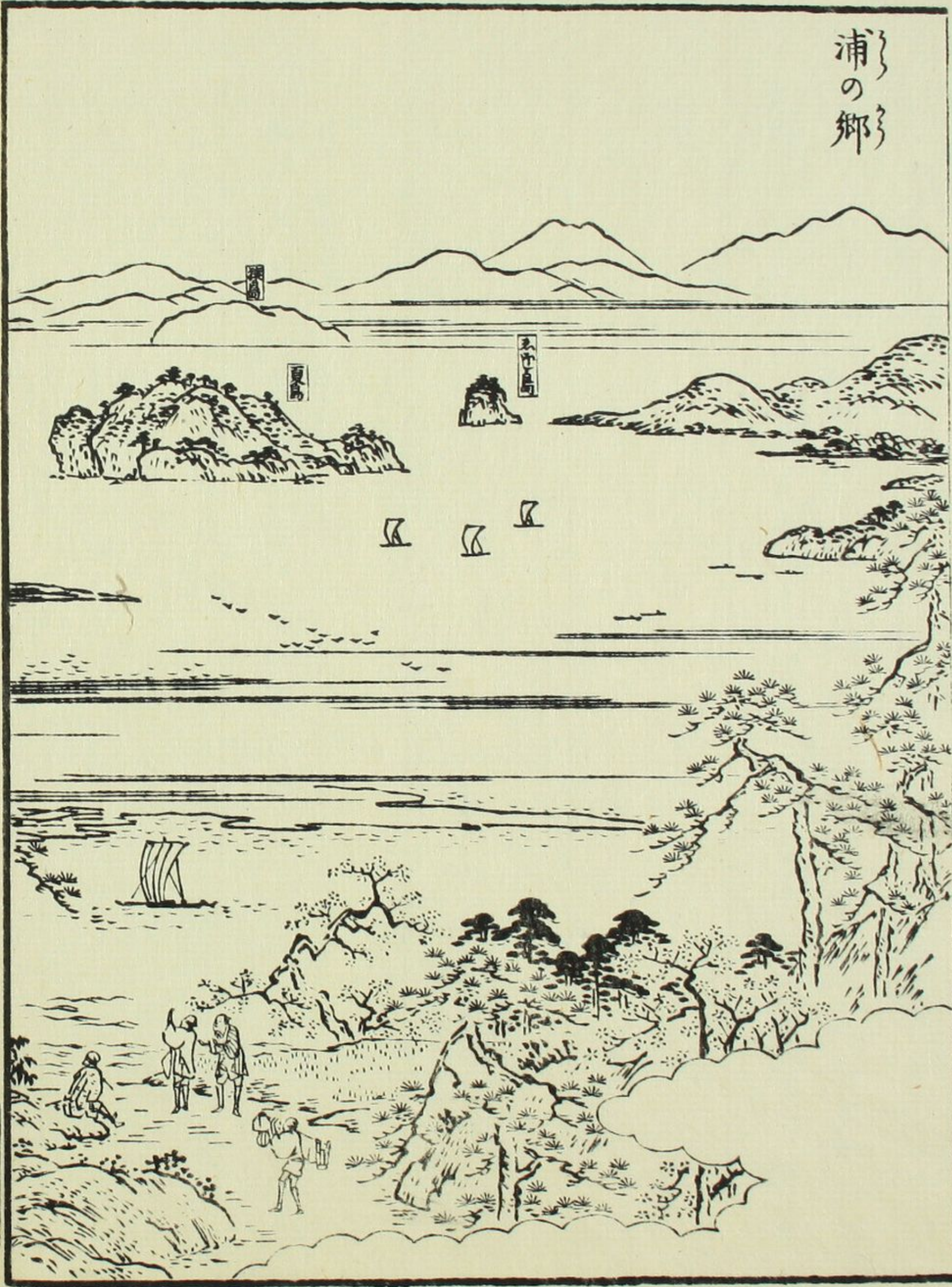
ゆき

こゝろ

津菴和尚



浦の郷



有餘の未寺ハ林邑ニ散在シテ年々の法會月々の勤修
恒例ニ任セテ怠る者ナク實祚の長久武運の萬歳茂
祈ミテ暁の振鈴の聲ハ無明煩惱の眠を覺シ夕比
梵鐘の響きキテ三途の迷夢を破ル實ニ江南の一精舎トシ
善應寺野島山ト号シ同所ヨリ半道ナリ盛瀆を隔テ南の
方野島ニ傍テあり真言古義ノ龍華寺ニ属セ本尊
不動明王の像ヲ作者トモフニ正觀音の木像ハ立像ニ尺斗
ありテ聖徳太子の作ナリ愛染明王ハ座像一尺五寸ナリ
ありテ弘法大師の作ト云此像の胎中ニ愛染子の小像
千體と作テ籠ラセテあり
野島同所東の出崎中ニ瀨戸橋ハ其間七八町あり土人
百軒島トモ云民家百軒あり餘リ時ハ必災あり俗ニ百軒島ト
呼ヘリト云此所の出崎ニ肥州亞相頼宣卿の山の出崎ニ稻荷の
盛尻の舊地ありト云
小祠あり又中腹中ニ菅神の宮あり此地の北ニ平方ト

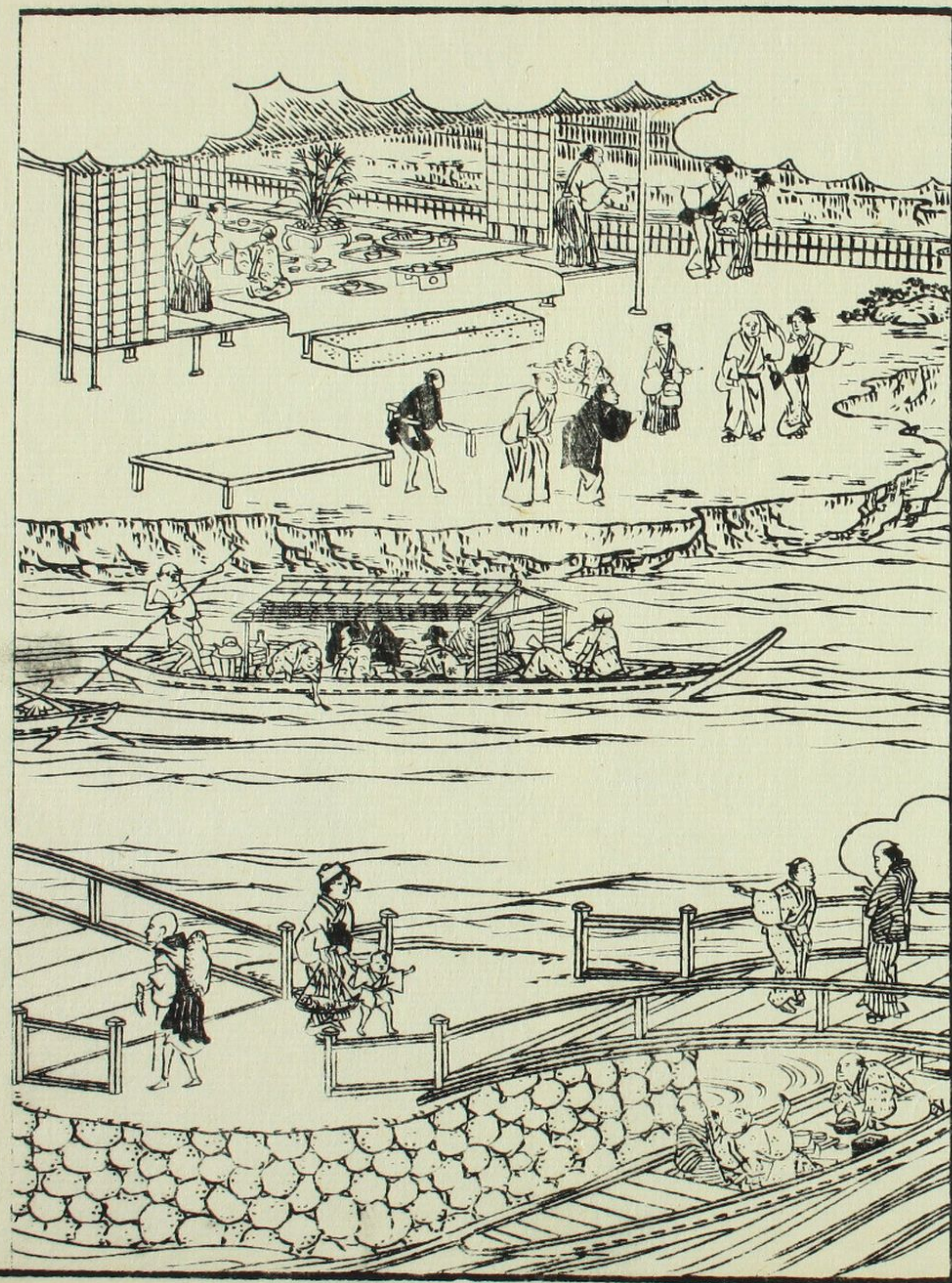
ツハ町屋村の東と金澤原とのみ此地の東北海濱と云
鞆の浦と稱せり

鎌倉記行 名のありし所もいへり今も續き
江とありし所もいへり今も續き

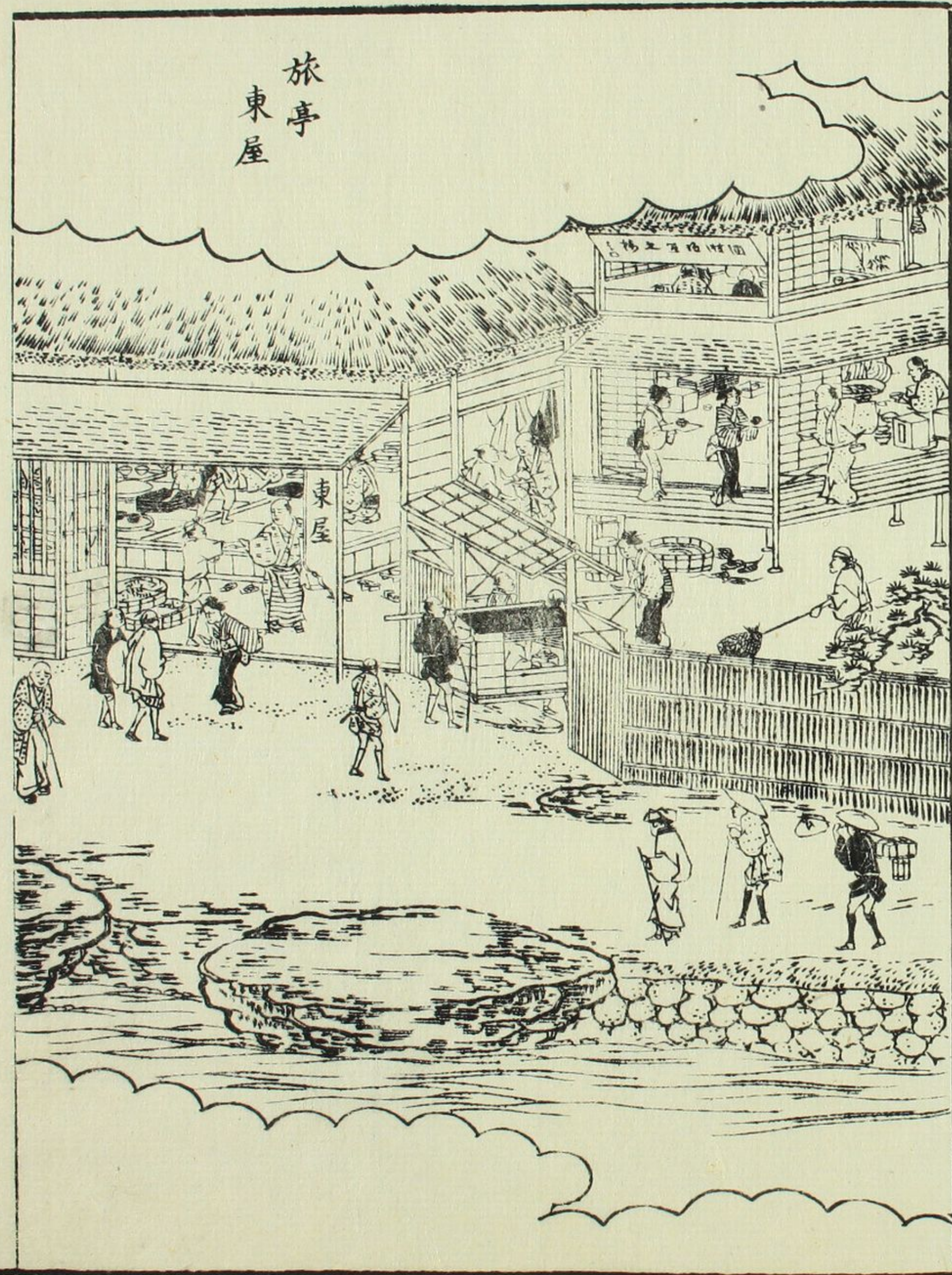
野島渡一 野島より南の方室木村へ入渡り舟路
一町餘とあり江戸あり浦賀への近道なり
洲崎 野島の西瀨戸橋の東北漁村を云鎌倉志ニ云太平
記及び鎌倉年中行事等の書ニ洲崎とありしを鎌倉山
内の西ニある洲崎村のり中ニ此地ありと見え

瀨戸 或ハ迫門 洲崎と引越村との間と云

四國雜記 瀨戸を海と云テ猶也のまを云



旅亭
東屋



其二



瀬戸の沖は海ありて深し

久しかりのたしむる波ありて瀬戸の浪は波はみ人

道真 准后

磯山は磯ありて深し

あまの瀬戸の浦は深し

瀬戸橋 同入江は架せ中間の臺を備け橋杭を用ひ

長と二間ありて橋二川を渡し

追門の明神とて入海はさし

潮の入りぬれは速き山の興まく湖水あり朝引ぬる水鳥も陸より

照天姫松 同所北の方西の出崎あり延寶庚申の大風

吹折らぬとて連一株の松の根株のを存せり里彦

云く照天姫姫の為小燻られしとて姥う焼し一の松と

のり

鎌倉大草紙云 應永三十年癸卯春以より常陸國佐人

小栗孫五郎平満重と云者ありて謀反を起し鎌倉

背そとれハ源持氏結城の城へ勅座ありて同八月

二日あり小栗を攻ら終小栗忍びて三州へ落ゆ

とある条下云今度小栗忍びて三州へ落ゆ其子

小次郎忍そと忍びて關東ありて相州権現堂

と云西へ移るを其邊の強盗を集りてに宿城

かりられハ主の中ハ此浪人も常州有徳仁の福者の由

聞く定て隨身の寶ありて打殺し取らる由

終合を乍去健なる家人ありて何せん云一人此

盗賊中を酒を毒を入吞せ殺せし先と同一宿の

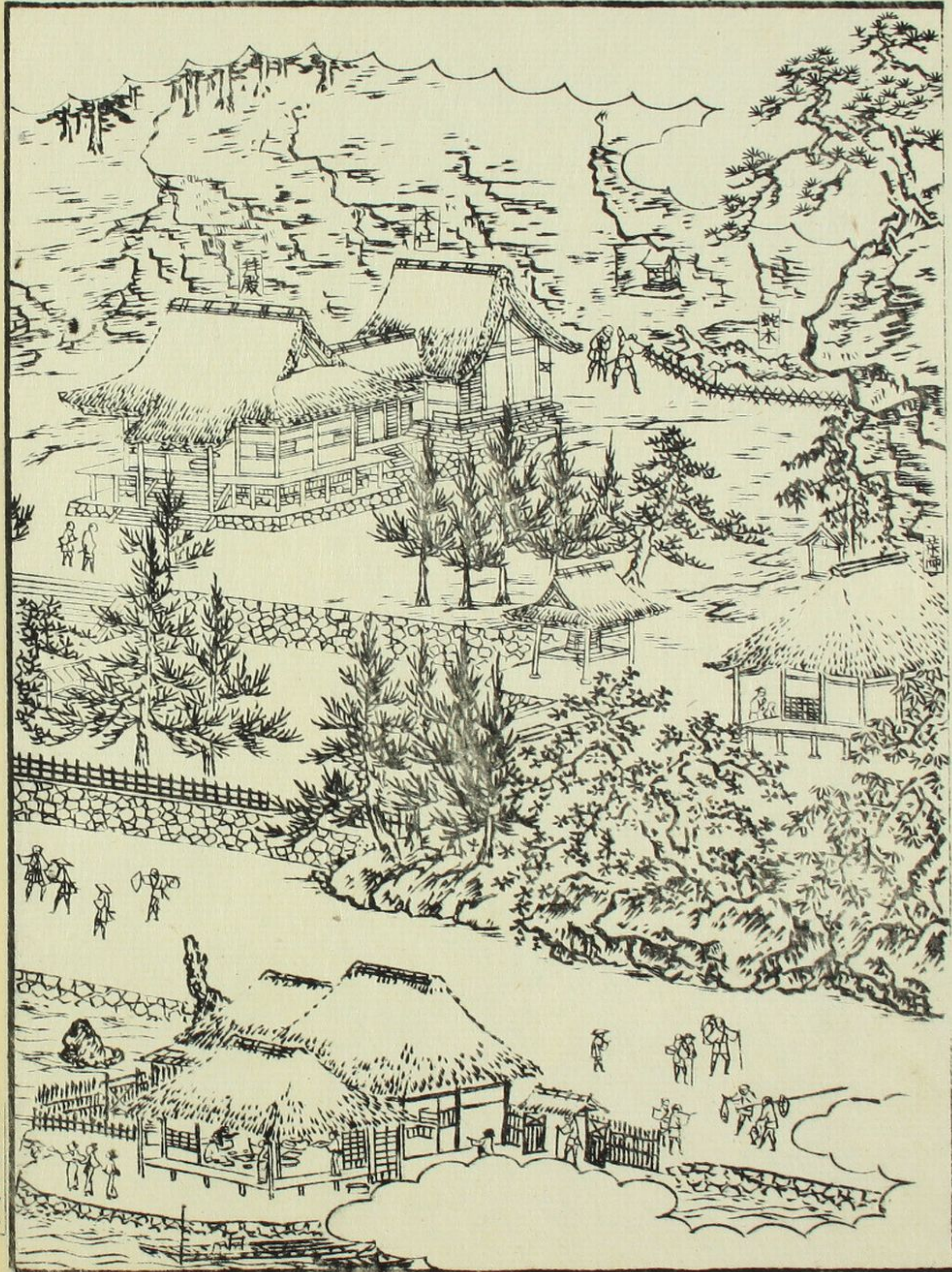
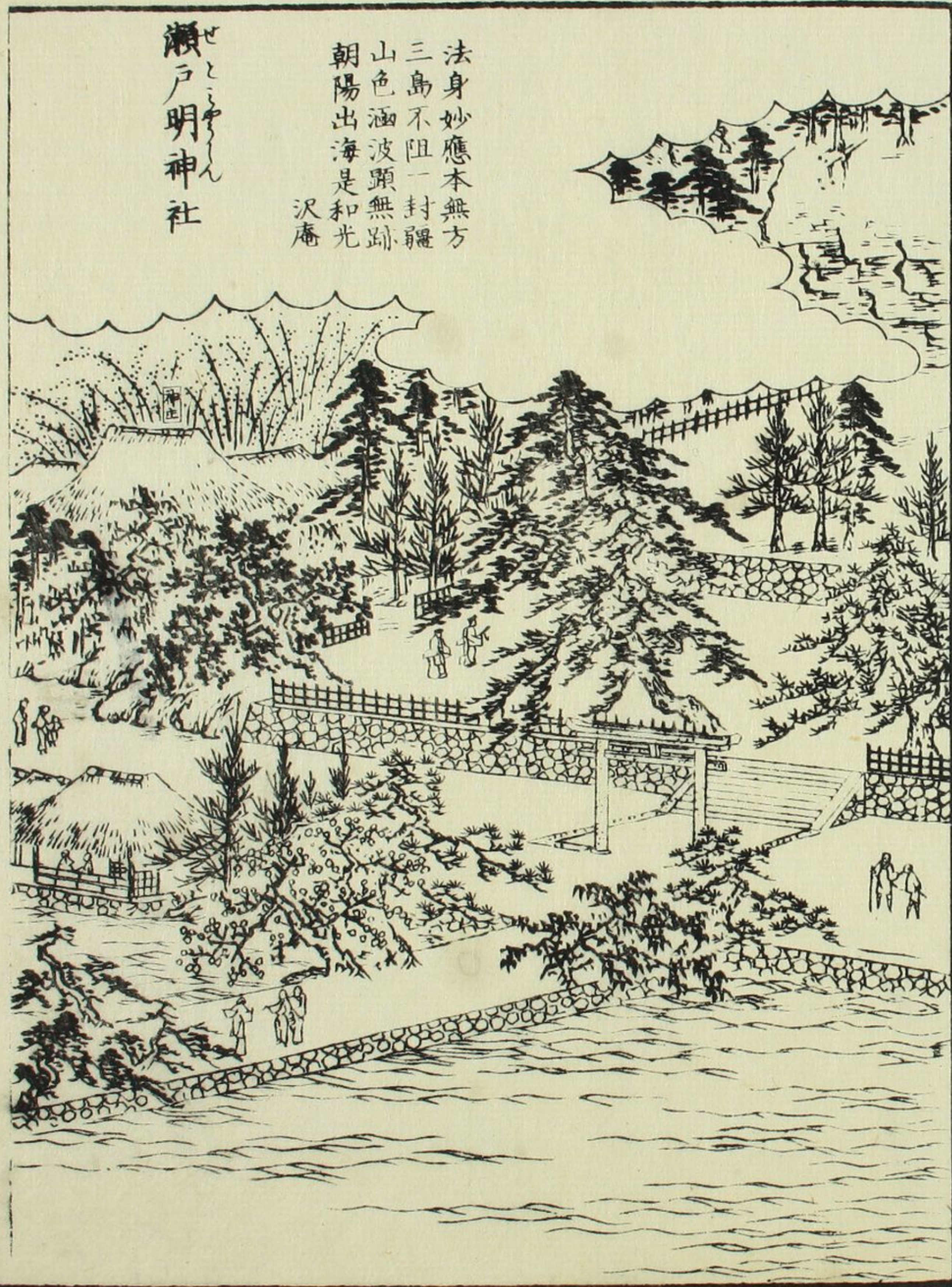
遊女をを集今様を唄ひて踊舞戯れり彼小栗城

馳走の騎小を酒を呑せり酒を呑せり夜酌し立る

照姫と云遊女此間小栗は逢馴此ありて必し知る

瀬戸明神社

法身妙應本無方
三島不阻一封疆
山色涵波頭無跡
朝陽出海是和光
沃庵



あや自らも此酒を呑まし〜あり〜小栗とありれ〜あれ
由を私言々〜間小栗も呑様ふ〜酒を更は呑さり
る〜家人た〜何れも解伏て〜小栗ハ夜初〜
解ゆる〜林の有〜間へ〜鹿毛〜
馬を繋ぎ〜置り〜此馬ハ盗人共海道中へ出大名往
来の馬を盗〜来れとも才一のあり馬〜人をも馬
とも喰踏〜盗人共不叶〜林の内ハ繋置〜
小栗是を〜密に立帰〜財宝少〜取持て〜
乗鞭を〜小栗ハ雙双の馬乗〜片時の
間ハ藤澤の道場へ馳移上人と頼〜れハ上人ありれ
侍衆二人付〜三州へ送ら〜彼毒酒を呑〜家人并
遊女少〜解伏〜川水へ流〜沈め財宝を〜尋取
小栗とを〜盗人共ハ夜分散

酒を呑〜水が流れ〜川下〜上〜
其後永亨の頃小栗三州より来〜彼遊女を
出し〜種々の宝と与〜盗人共を尋〜皆誅罰〜
三州に代々居住〜

鎌倉大草紙小栗より考や照天姫ハ照姫の云云小栗の名を世に
鳥氏と称せし同書小次郎とのあり鳥氏と云ふをありは鎌倉志小
栗小栗私譜を考〜小栗五郎平重子助重とあり〜此小次郎
能あり〜大草紙に〜不〜俗者不興なり〜と云ふも此小次郎
今世に云はるるハ〜附倉の説と備〜あり〜

瀬戸明神社瀬戸橋より一町半西の方道あり右側あり
祭神 大山祇命一座〜神主 葉氏奉祀 社傳 云
當社ハ右大将頼朝公治承四年四月八日豆州三島の御神と
勸請なり〜あり鎌倉年中行事ハ四月八日瀬戸
三島大明神臨時の祭礼とあり或云往古此神此地へ飛

来

此の如く云ふも、上人傳へ云ふ今金龜院の庭中飛石と

看

按は頼朝卿孫倉へ入り、治承四年十月六日あり、東鑑小の傳は

額

延慶四年辛亥四月廿六日、戊辰書之、沙弥寂尹

山積神官

世尊寺後二位経尹卿筆

同額裏書曰
延慶四年辛亥四月廿六日戊辰書之
沙弥寂尹

鳥居

神道長正二位卜部季兼卿筆

鐘樓

銘社前右の方あり

鏗化世俗頌歌夜禪覺煩惑夢驚生死眠昏曉清響
鏗體黃玄緇素益大村里聽鮮問靜動閑奏敬悲田
洪鐘新製寄器海場電神振德衆人結縁韻徹遠近
穎戸三島社鐘銘

劫々永傳
應安七年四月十五日奉鑄之

普川國師鑄
宝戒寺の鐘也

藥師堂

本社の右より上人
按は下僧薬師と稱す
父左衛門上州伊香保の湯は浴せし項相徳國の住人乃祢彈正信俊と云ふ

此の瀨戸の三島明神の社前あり、信俊の輩の歌と討むと、彼下は身をそのし
り、放た僧と号する、謠曲あり、之とも、他の書よるあり、之に

三本杉

延宝庚申の大風は吹折られ、り、今ハナリ

蛇混拍

本社の右の傍あり、延宝八年庚申八月六日の暴風は吹倒され

梅

花無盡蔵曰、文明竜集丙午十有八年小春二十

同

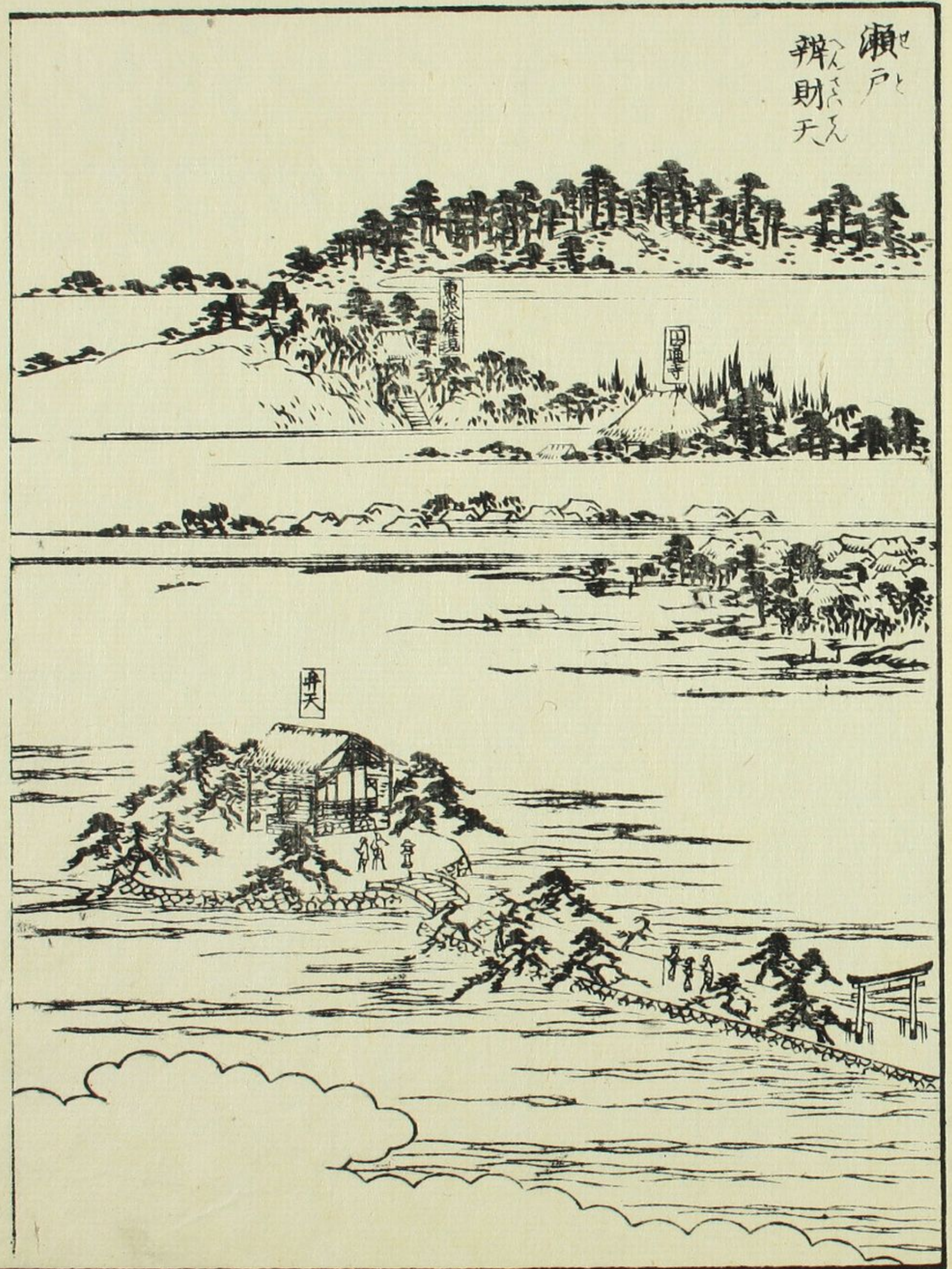
瀨書老有花梅同
戸曰所七無花梅同
社作己亥盡藏曰、文明竜集丙午十有八年小春二十
自注云六浦廟前有古柏屈蟠

遺廟拍圍六浦橋 朗吟繫馬石支腰
 歸鴉飛破翠屏面 刺被風聲添晚潮

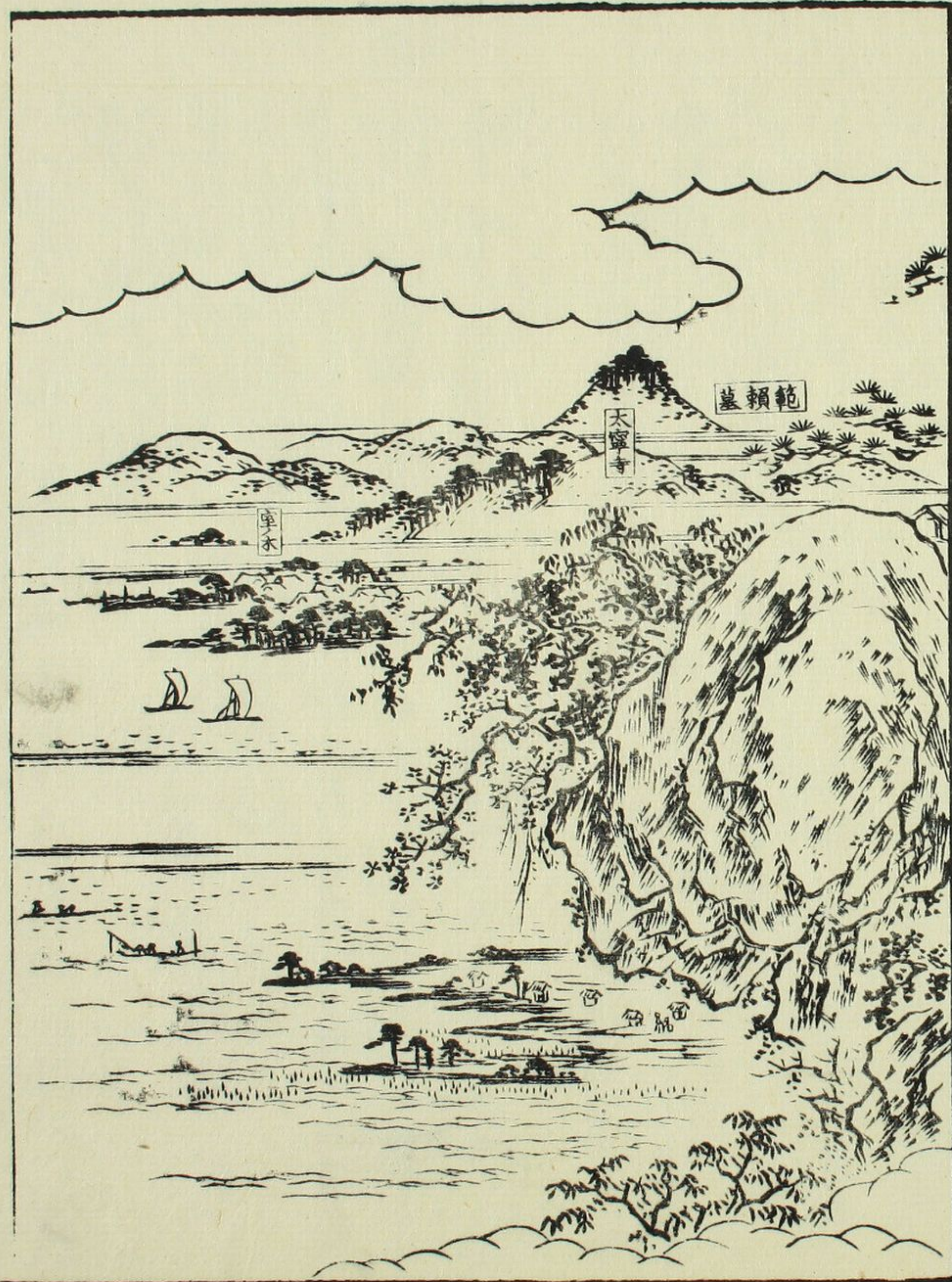
鎌倉紀行
追つての御神、此地ハ大通智勝佛伊豆と寺一狹ありと
 神威とくられ

あつての御神を今もあつての御神をあつての御神の内に 浮菴
 當社境内を千歳の古木雲を凌ぎ回岩社頭を清くみ
 そるる山の勢ひ実り巨靈神のまを延くつりくあり
 此山を遷しえとあゆむ社前の老樹浦風不靡さ
 打寄る浪を下枝を洗み一根清浄なる時ハ六根共に
 清く我人の頭は神も中々とつとまをくを

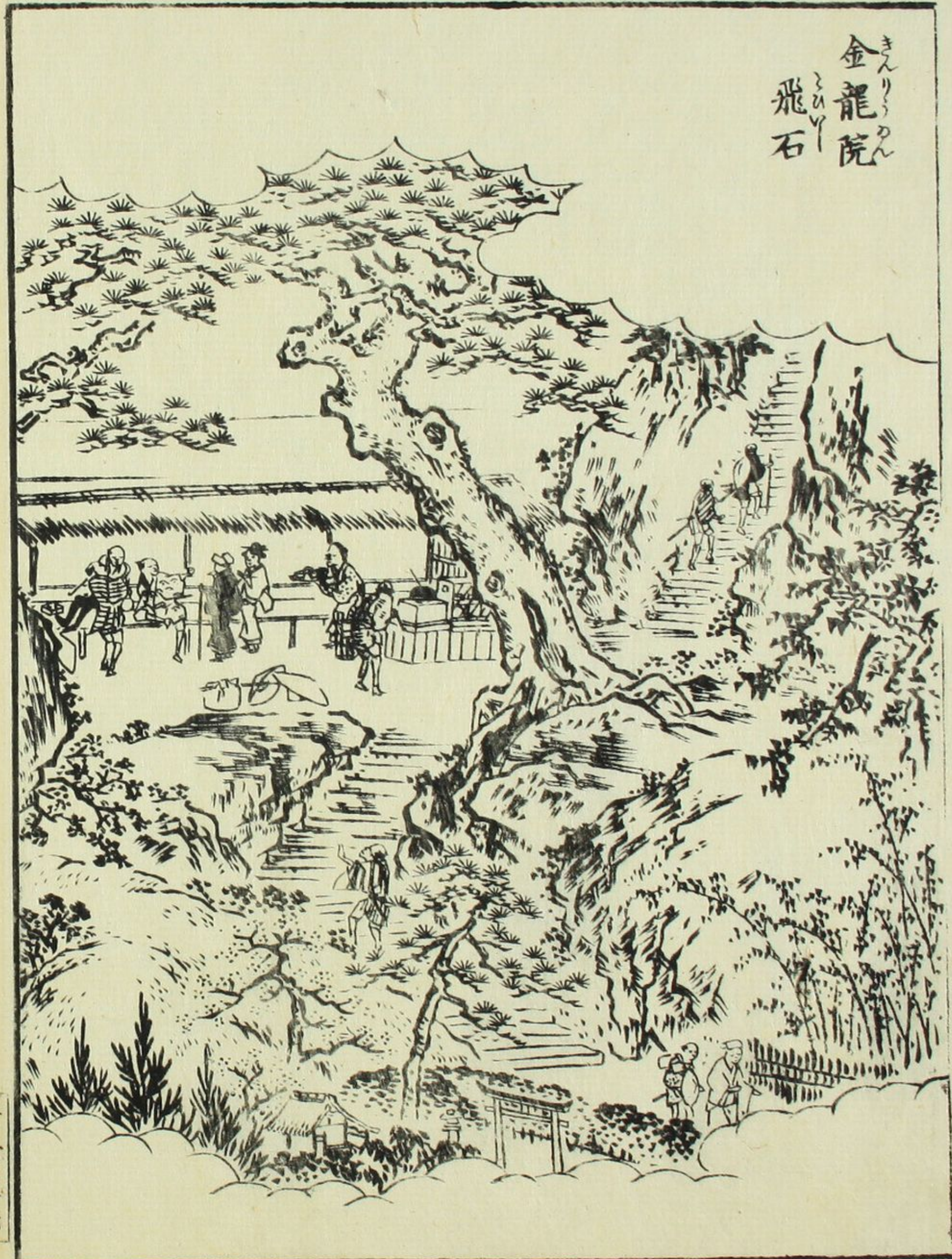
瀬戸辨財天 同社前道と隔て南の入海へ葉出く
 小島あり昔頼朝卿の御臺所平の政子御前江州
 竹生島の御神を勧清せられとあり
島の中混拍を修く
 植より今を枯く



瀬戸
 辨財天



きりりん
金龍院
とひや
飛石



奇形甚なり 同橋の下に福石と唱ふるものあり 金澤四石と稱す此石の
前より必有福の効とあると云はる

鎌倉記行 社のあり高きと云ふは天を触れし海くハ
才一才ニの格あり高のめりた本海内あり

海内 舟のあり高きと云ふは天を触れし海くハ

圓通寺 日輪山と號す同所二町半西の方道より右

あり昔法相宗中々南都法隆寺に屬す今ハ天台宗に

改ま江戶の東叡山に屬せり本寺を元三大師と安置す

岡山ハ法慧法印と号久世大和彦源廣之寺領を附

せし 東照大権現宮 山の上は鎮座なり郡官

昇天山金龍院 同所西南の方四町餘を隔て同道の左

側の海岸あり世俗飛石山とも呼ばる禪宗に

鎌倉の建長寺に屬せり本寺正觀音座像二尺三寸行基

大士の作なり 鎌倉志に虚空藏菩薩と方崖元圭和尚を以て

岡山と云 和尚ハ檢校翁の法嗣なり

飛石 當寺後園の山の麓あり高さ一丈あり廣は九尺と云

九覽亭跡 此地ハ近頃地震あり

八景小能見堂と加へて見るとる名あり

泥牛庵 金龍院の前路を隔て向側あり 禪宗あり

鎌倉圓覺寺に屬す本寺ハ七寸計の唐佛の十一面觀音の

像と安き此庵の開祖ハ圓覺寺の傳宗庵南山和尚

聖一國師の嗣法なり建武三年 中興ハ習甫玄道座原と号す

當菴の南一町半山の上古墳二基あり其一ハ海老名

長門守と云ふ人の墓あり此人泥牛庵あり自害し

終るりと云傳ゆるの... 時世事實... 猶考へ... 按は海老名源三季貞

荒井妙法日荷上人加持水 同所農家金子氏の地も存る

井と云その味甘美... 荒井と称せしを往古日荷上人荒井平次郎光吉と号

此地は居住せしよりかく呼ばるとなり

能仁寺舊跡 今の上杉寺の

能仁寺舊跡 今の上杉寺の 鎌倉志古記曰 上杉房州太守築武州金澤能仁寺

創七宇伽藍請方崖和尚為開山第一世諸山曰福

壽跡寺日能仁太守有旨隆能仁寺位列諸山者也

永徳三年小春日東暉曇晰謹記又本尊建立永徳

二年三月七日徳慧徳之同暉曇晰謹記又本尊建立永徳

曇那行徳慧徳之同暉曇晰謹記又本尊建立永徳

能仁寺佛殿梁牌銘 鎌倉建長寺の龍峯庵

恭願皇圖鞏固而四海昇平黎庶安寧而五穀豐稔
檀那前房州太守菩薩戒弟子道合敬白在伏冀佛
運帝運歷永劫而綿延寺門檀門經萬年以昌盛昔
永徳二年壬戌四月日開山方崖元圭謹題右

六浦山上行寺 泥牛庵より六七町西南の方道より右側に

あり當寺往古ハ真言の古刹也六浦山金全寺と号

然る小應安年中此住持某日蓮の法を著し日蓮宗とあり

北徳中山の日祐上人開祖と自ら妙法日荷上人と号

祖師堂 宗祖日蓮大士の像を安んず

日法上人三十三歳の年日常上人の指圖より彫造せりと

祖師木像胎中收藏法華經書寫人名簿 紙ハ常用の紙

三寸三分の紙筒に入し胎中より取出し表紙もなく巻も紙も

包紫銅の徑筒に入し胎中より取出し表紙もなく巻も紙も



八卷小書写の人名簿一卷共九卷あり其文よ云く

御身の御経奉書写之人

日源 安立坊の問山

- | | | | | | |
|---|---|---|------|---|---|
| 一 | 卷 | 良 | 圓融律師 | 日 | 源 |
| 二 | 卷 | 正 | 圓範坊 | 日 | 秀 |
| 三 | 卷 | 良 | 祐圓坊 | 日 | 正 |
| 四 | 卷 | 良 | 真範坊 | 日 | 秀 |
| 五 | 卷 | 衆 | 寧寧阿 | 日 | 秀 |
| 六 | 卷 | 衆 | 寧寧阿 | 日 | 秀 |
| 七 | 卷 | 衆 | 寧寧阿 | 日 | 秀 |
| 八 | 卷 | 理 | 賢賢坊 | 日 | 秀 |

奉造立 右願主 卿公沙門 妙光慈父母 妙法親父

奉讀誦妙法蓮華經五部

上良範公 正圓公 一心久讚

奉方便品 壽量品 自陀羅尼品 各十篇宛讀誦之是

奉讀誦 十如是 自我謁 題目百廿五

奉唱題目一萬反 日源敬白

應永十三年丙戌十月十三日

右六萬恒沙上首上行菩薩此御利益者尔住迹用本

石字初隨有喜形相身任御附屬妙法之要五字弘一

天四海秘法良藥施萬人所嚴迷者也廣爰流布因揀純就信

心大施主等之成就所嚴迷者也 釋迦堂 本尊釋迦多寶四菩薩 真言宗

六浦妙法日荷上人石塔 祖師堂之釋迦堂との間櫃の本にあり

上下との後人造り添々とするものとやうに中殿の石の横面は延和二年六月

蓋も尚ほ中山法華寺あり又妙法の住持なり
同記の妙法律師日荷上人の持水の条下
記の妙法律師日荷上人の持水の条下
す或ハ此妙法ハ杉田如法と号す北条時頼の臣ありと云あれとも時頼地も年整と
以て考ふべき時代あり

寶篋印塔

祖師堂の前左の方の山の裾ありと高文治元年の執号と刻せり

當寺住古真言宗

證證按米倉家陣屋の上より上行寺の後の山積ハ知足山龍華寺の旧地あり
と云今も上杉寺の後の山積上畑道の号ハ花藏院橋と号するものありハ昔龍華寺
支院花藏院の門前あり橋あり号あり

鎌倉志

當寺什宝は位牌一枚あり日祐上人の筆の曼陀羅と

彫其下

に日祐上人一世の間引導せし人の法号俗名成

奉

應安三年と記せり又日祐上人の大曼陀羅及日蓮

大士の消息等

と存する由記されし事今當寺より傳へ

すと云

金剛山嶺松寺

同所三丁斗を隔て西南の方道より右側ハ

あり

禅宗中々建長寺龍峯庵ハ屬を本寺ハ釋迦牟尼の

本像を安置せり関山を月窓和尚と号し

講元曉紀州の人貞治元年十一月

二日

儉約翁の法副なり傳へ云當寺ハ千葉介胤義の建立こと

鎌倉志

瀨戸明神の鐘の銘ハ神主平胤義とあり神主ハ

平姓

千葉氏なり此人の建立欽千葉系圖ハ胤義と云

有

り寺建立のより詳なりと云

因ハ千葉家累代の
堂城ハ本堂の後園百歩

六浦

或ハ六面は作東鑑ハ將軍家此地ハ遊覧のより往く又云

又同書

建久三年壬子二月廿四日丁卯武藏國六浦海辺ハ

北

上徳五郎兵衛尉忠光を梟首す義盛是と云

云

又鑑倉大草紙ハ應永四年正月廿四日小山若丸

子

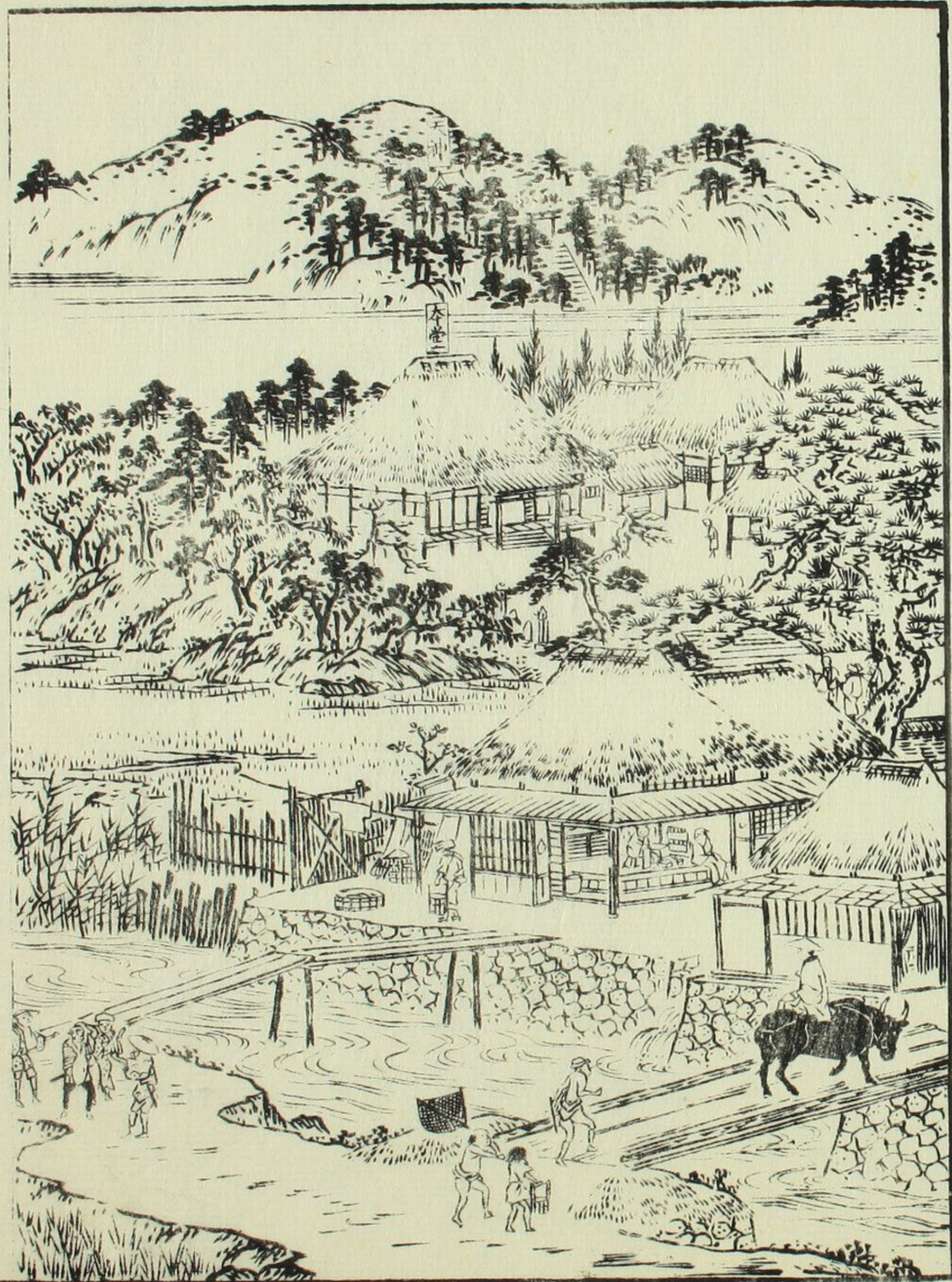
との二人弱年ありを會津の三浦左京大夫是と

召捕

鎌倉へ進上しと實檢の後六浦の海ハ沈ら

とあり

比条九代記ハ田村庄司則義ハ小山善丸ハ與ハ菅領氏満ハ



なりしを捕く六面の沖は沈みそりけりしとありく此しく異あり
永祿の頃ハ小田原北条此地を領し六浦木曾分の地ハ
武田家へ付し同所大道分の地を龍源軒とす小付
たる由分限帳よりんて

澤庵和尚鎌倉記行

あられハ三ツり鎌倉へ移る一塚をこれハ
野ありこゝありむむはの海とこハ
こゝハ海とこハありむむを

六浦川此地の道を横きりく流る小溝を云又此溝は架す

海士のまじり此ありと云

六浦川 此地の道を横きりく流る小溝を云又此溝は架す

小橋と云六浦橋と号くと云

日光寺の辺より光傳寺の辺迄の地の字を川村と称し按ふ昔の水流の
跡なる所ハかくと云入なりん決

日光山専光寺 嶺松寺より二町計を隔て南の方道あり

右側ハあり浄土宗中々同所天然寺ハ属を本尊十一

面観音ハ立像一尺計あり佛工春日の作なりと云相傳ハ

照天姫の念持佛中々姫松葉中々燻らむし一時身代

立立と云と云傳へり寺の後の方ハ日光権現の宮あり

故小山号と云

油堤 同一寺の後の田圃を隔て半町を隔て西の方小續き

山を油堤と云由土人云は鎌倉志中々専光寺の里諺に

照天姫の乳母侍従と云るもの姫の粧具と携へ此不逆

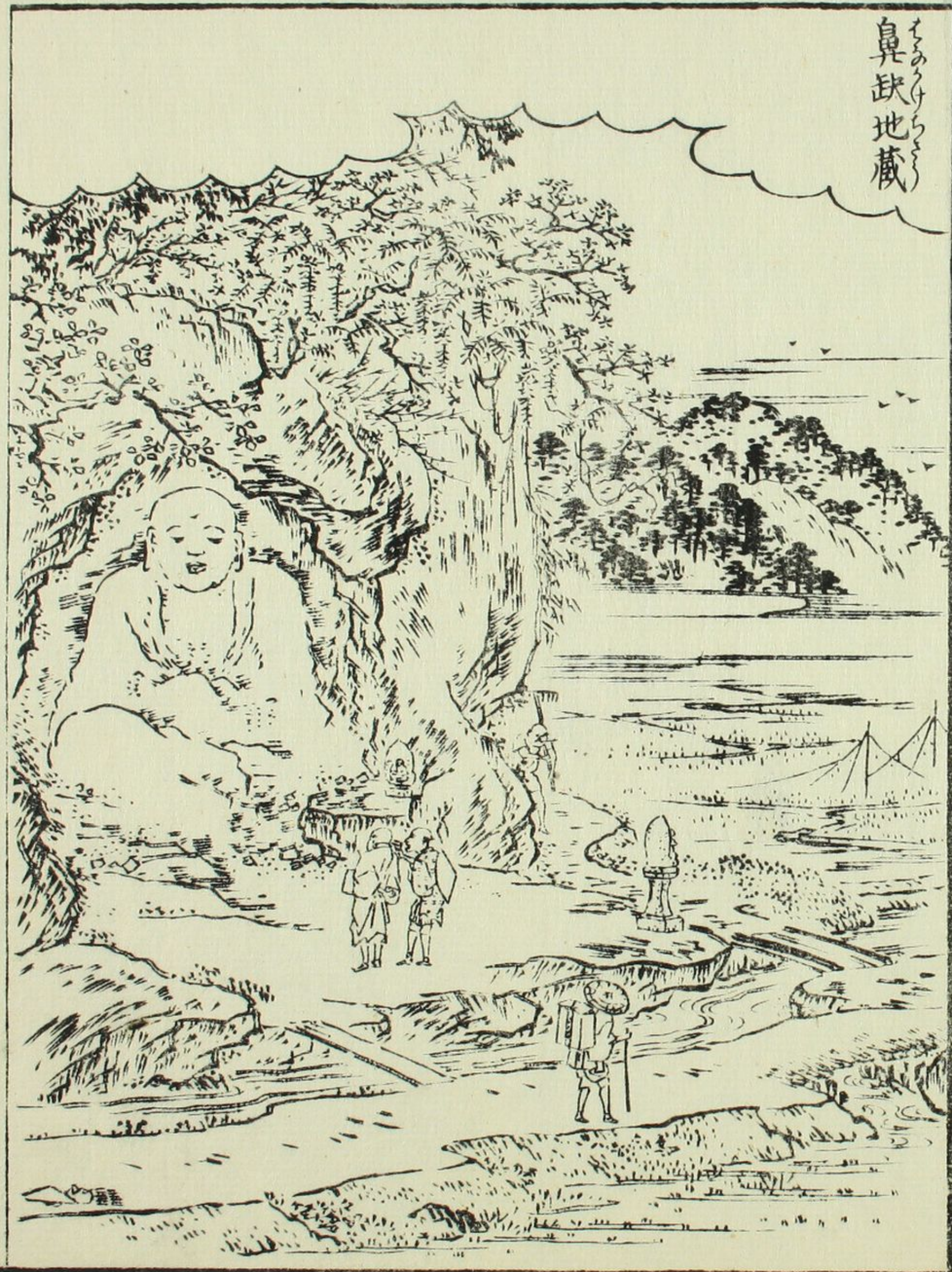
尋来りしと云と云姫の形方ありと云るを歎き悲しと彼粧

具と捨て終り此所の川へ身を沈めしと云故ハ号とす

と云り

侍後川 川村と大間村との中間光傳寺の前を流る川の

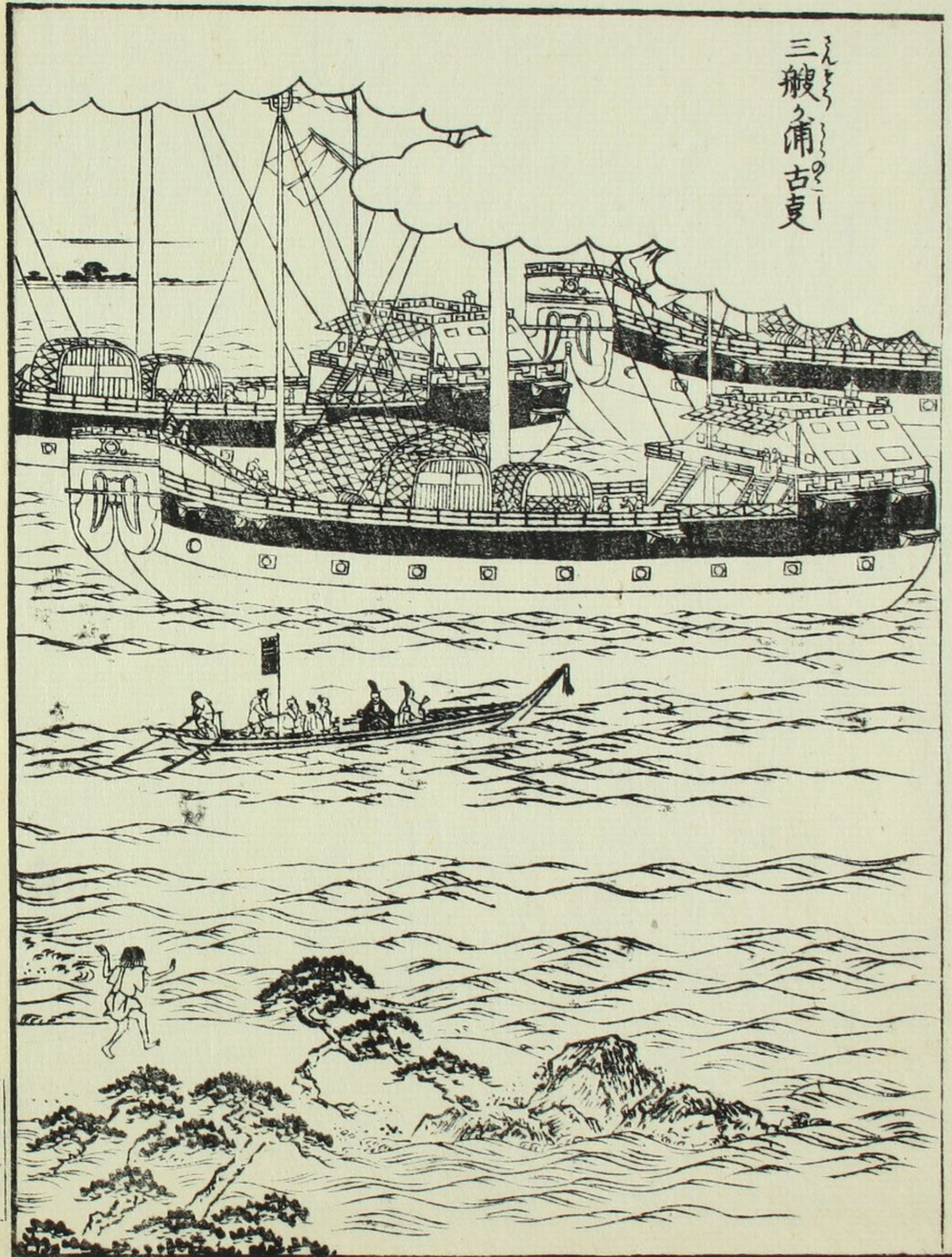
鼻缺地藏



下流をり水源を鎌倉より發し未ハ三艘村より盛濱へ
 如く海湾を會を瀬戸街道へ横より架を橋を侍從
 橋と号名義ハ油堤の奈下よ云々此橋を渡りて右の
 道ハ武藏相模の國境地蔵の辻へ如く鎌倉へ往還の道
 なる南行の道ハ三浦三崎への通路なり左の川傍の道ハ
 三艘浦又相州境浦郷等への道なり

常見山光傳寺 同所北の端道より右側侍從川に傍る
 あを浄土宗の如く鎌倉光明寺に属を本なる阿彌陀
 め来の本像を立像中より四尺許あを作者あへり
 開山ハ得蓮社忍譽靈傳上人と号門の内右の方より
 地藏堂の如く本なる地藏菩薩ハ立像六尺許あり
 運慶の作ありと云地福山蔵光寺と号り

界地藏 土俗鼻缺地藏と称し光傳寺より九丁あをり



三艘之浦古夏

西の方鎌倉道の傍にあり巨巖の壁立し一所に
此の像を鐫出せり此の像の鼻缺損也此所ハ武威相摸の
國界中一ヶ峠村と号す
三艘浦 六浦の南向三艘村にあり永祿九年の春唐船
三艘此浦に着岸せり故に名付くを鎌倉志云其時
舟に載來り一切経及び青磁の香爐花瓶等を皆
称名寺に傳へりありと云

海蔵山太寧寺 三艘浦の東頼崎村にあり
布金の道場中藥師寺と号し真言宗なり一々蒲
御曹司源範賴公生害あり後其法号を採り太寧寺
と号し千光國師開山とあり禪林に轉し鎌倉建長
寺の属寺とを藥師寺の号の廢せんを歎き其頃寺前村の地へ
本為藥師來立像丈五尺あり十二神將の像ハ三尺中

あり共運慶の作鎌倉志に當寺勸進帳を引く
云往古 伏見帝永仁年間此村に貧女あり父母の忌
日に當りてつとも佛に供養しき便なり絲を像
卷子とて賣り佛餉に備へんと然れども
容易に買人なり或時童子一人來り是を買ひ價を
以て父母の忌日此供養の料に充ちり佛前に至る
件の多きを多くあり依り知ぬ如来貧女の純孝志を
感し自介以来へを藥師と云とあり佛へ宿願のすがら
時其祈願成就の報賽と
蒲冠者 範賴靈牌 堂中に置其牌面に伏寧寺殿道悟大禪
定門神儀裏に範賴公建久四癸丑年八月と
彫付

範賴墓 本堂の後の山麓にあり高ハ二尺六七寸あり
按小異本源平盛衰記に範賴伊豆の修善寺に伊豆の時
又頼朝子中して伊豆小越景時父子三人五百餘騎中修善寺に伊豆の時

範頼ハ或坊の小袖ハ大計ノ中ニテ一ノ袖ヲ取リテ其後景時ノ静ヲ射ルノ爲メ取リテ此ノ地ニ納メテ其後景時ノ静ヲ射ルノ爲メ取リテ此ノ地ニ納メテ

題 太寧寺六首

寺樓一抹晚江煙
老矣身心機事外

朝送鐘聲落釣船
閒鷗容我社中眠

殘曉香消柏子煙
聞君去借江村宿

一夜鷗邊看月眠
老來無夢越漁船

六浦遙連三浦煙
興來撐棹竊佳慶

越風隨岸幾移船
月落前灣猶未眠

山街夕日水籠煙
盖世功名身外事

雪後蘆花月滿船
幾人能得一菴眠

衲衣懶惹柳爐煙
晚興遲留江上寺

還愛華亭載月船
三山翠映白頭眠

功名盖世畫交煙
一錫歸來孤外寺

失墜危於灑頰船
白沙翠竹閉門眠

當寺書院北小向瀨戸の入海を眼下に臨み風光殊小

勝れし寺寶は範頼自筆は古哥の懸幅及び陣中用

らむと云長刀一振あり

菅根権現社 瀨崎の東室本村あり又民家の間は犬樟の

老樹あり

雀浦同所の南北出崎を以て菅神の小祠あり故は主人ハ

天神崎とも称を此地の海灣と浦の江と云

巾着巖 同所絶壁の下あり大に二間四方に盤石あり潮尽

根附巖 同所百歩を隔て西南の方には崖下ありと云

前の帳着岩あり

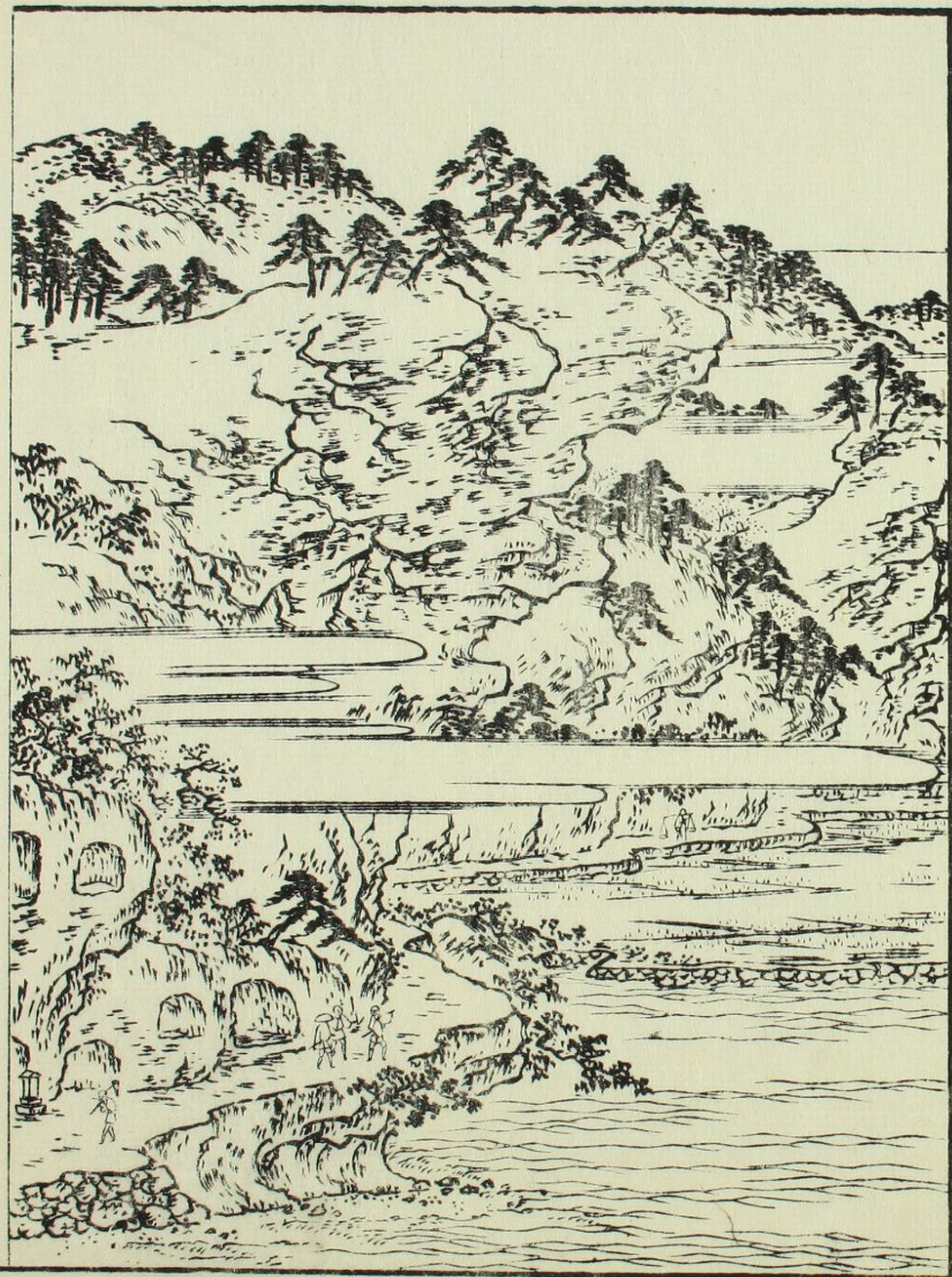
搜戸湊 刀切村の南の入海と云

田國雜記

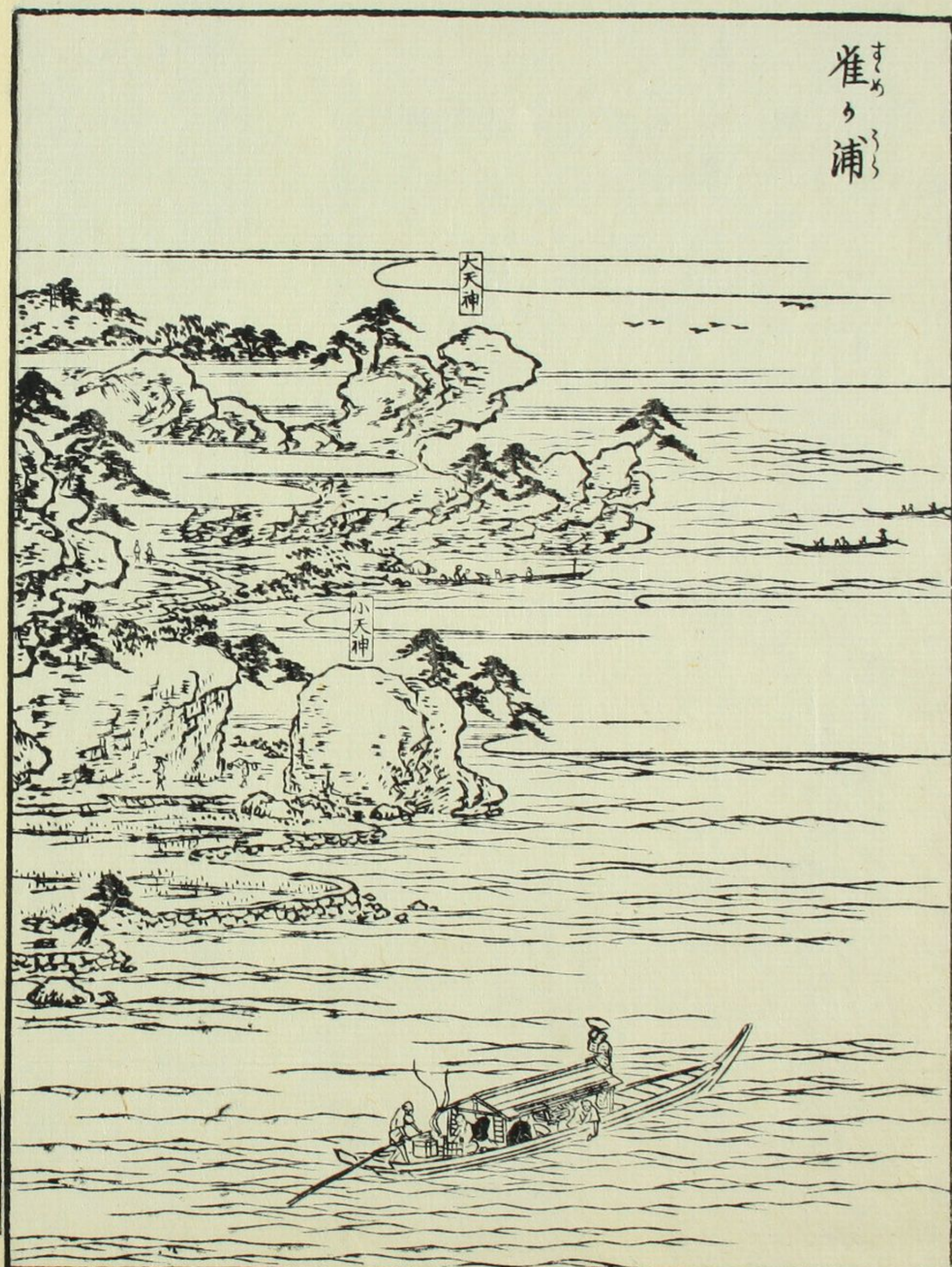
浦川の湊といふ所あり其地は古くより海邊にあり

搜戸をささぐりて浦の浦をわたりて

道與 准右



すめ
づみ
浦



烏帽子島 同所東の出崎の小島といふ形状烏帽子に似
たる故小名とせり

鎌倉記行 名保し海といふととそそも志し

終夕小浪を巻ぬる烏帽は沖より吹き風折やれ洋庵

夏島 同く東にあり長三町餘を横一丁計此小島なりと

里人云く玄冬の雪といへとも積るなりといへとも

鎌倉記行 夏島を名めたりなりは是時ハ考ふと

三冬ふも洋白をたぬぬるや夏島の名や消へん 洋庵

猿島 夏島の東南にあり五丁四方を占めあり

裸島 同所二三町を占め離れる小島なりと

按し洋庵和尚の法念記行に笠島といふ名と挙るを詠ふ

かきしやや基とありの夕時ぬぬる人ありやと
かくあれといふは地は笠島ありとありは
中とあり、わきしややかきしややありん

甲香 此れハ金澤の名産なり兼好法師の徒然草に甲

香ハ螺貝の様なる小くく口の程此細長ゆき出たる

貝の蓋なり武蔵國金澤と云浦にありしを所の者ハ

るかといふとまうしはるをといひしとあり野樵小今金澤

ゆき尋はるといひしははぬとも云ふ

王子嶺山町
成内頭一郎

九十終

